

父の寢間へ来て見ると、民造はさつきと同じやうに臥床のうへ、坐つて、さも疲れたやうに脇息へ倚り懸りながらぼんやり煙草を吸つてゐた。お絹は臥床のまはりに散らかつた書類や茶道具などを取片附けてゐたが、それが済むと、八重子達の座蒲團を直して、そつと眼配ばせしながら室を出ていく。民造はそれを呼びとめて、いつもの葡萄酒を持つて来るやうに命じてから、

『さ、此方へ入れ。』と、笑ひながら八重子達の方へ云つた。

八重子と歌子とは父の枕許へ並んで坐つたが、何から話し出していゝか分らないので、仕方がないにもちく／＼しながらそこらを見廻してゐた。

民造はその様をまたさも懐かしさうに見遣りながら、

『いや、ほんとによく歸つて来てくれた。私はもうこの天気だから今夜はとでも歸るまいと思つてゐたが……。』と、どうしたのかそればかり云つてゐる。

八重子はやつと口を切つて、

『でも、お父様そりや當然で御座いますわ。お父様が遠い旅から歸つて被來つたんで御座いま

すもの、もう少し早く東京から報らせて呉れ、ば上野の停車場までお迎ひに出る筈で御座いましたわ。』

民造はそれを聞くと心から嬉しさに微笑んでゐたが、ふとみると彼の雙眼にはどうしたのか涙が薄く光つてゐる。旅に疲れ、憂慮に疲れた彼の心にはかうした家庭の團樂がどんなにか安易な歡びを與へるのであらう。そしてこの四五日の間に経験した事件や情景が極めて荒々しく恐ろしかつたゞけに、彼の胸に燃える歡喜は一層深いのであつた。

八重子も歌子もいくら押耐へようとしても涙が臉に溢れて來た。

そこへお絹が大きな銀盆へ葡萄酒の壺と洋盃とを添へて持つて來た。そして栓をとつて酌しようとするのを八重子は傍から引取つて、

『私がお酌をして上げるからい、よ。』と、云ひながら大きな洋盃へなみ／＼と注いで、盆ごと民造の方へ差し出す。

民造は頻りに笑みつゞけながら、

『いや、これは濟まんなあ。私ばかり御馳走になつては濟まんから、お前達もどうだ、菓子で

も持つて來させたら……』と、笑談のやうに云つたが、彼が内心の苦惱を押し隠して強ひて二人の前をつくろつてゐるのはその唇の慄へても分つた。

八の四

八重子は少時すると黙つてゐられなくなつて、父親の顔をじつと見ながら、

『ねえ、お父様。今此處へ來てるた店の方達は何にしに來たんで御座いますの？ 何か店の方で心配なことでも起つたんぢやないんで御座いますか知ら。』と、口を切る。

民造はさう云はれると傷ましい顔つきになつて、

『いや、格別。』と、口のなかに咬いたが、八重子はそれを追窮するやうに、

『お父様。そんなに私共にもお隠し遊ばさなくつたつてい、ぢや御座いせんか。私、ちやんと知つて居りますわ。先程御挨拶に参りました時に、餘り心配だつたもんですから紙襖の向うですつかり伺つてしまひましたの。ほんとに若し大阪の方の店がどうかになりましたら、私達は何うなるんで御座いませうねえ。』と、心細げに云ふ。

民造はそれを聞くともう隠しても仕様がなと思つたか、眉を擧めながら、

『いや、それまで聞いてしまつたんならもう仕様がな、すつかり打明けて話してしまはう。』と、投げ出すやうに云つて、『實はお前がさつき聞いたとほり、商業上の手違ひから愈々大阪の方の店を維持することが出来なくなつてしまつたのだ。まことに残念な話だが全く悪いこと、云ふものは續くもので三島銀行が破産して以來、私はもう始終悪運にばかり追ひ廻されてゐたのだ。勢洋丸は沈没する、鑛山は滅茶々にされてしまふ、そのうへ鐵價は暴落する、私はもう手も足も出なくなつてしまつたのだ。もう此のうへはあるものを投げ出して破産してしまふより他には道がない。なまじ未練を残して先にい、芽をふかせようと焦せばあせるほど私は深みへ落ちてゆかなければならないのだ。それを避けようとすれば私はもうすつかり今の商賣に見切りをつけて、投げ出してしまふより他にどうにも仕様がななのだ。』

八重子はそれを聞くと眼の色を變へて、

『えッ、お父様。あの破産になりますんですつて？』さう云ふうちにもう雙眼には憂慮の涙が溢れて來る。歌子も息をつめて姉と同じやうに涙含んで來た。

民造はその様を憐れむやうに見ながら、
 「いや、破産すると云つても決して私の資産が全部なくなつてしまふ譯ぢやないのだ。捜せても枯れても私は磯谷民造だ。よく整理をつけて見なければ分らんが、鑛山を手離したり鐵工場を手離したりすれば、それだけでも損害は十分埋まつてしまふのだ。さうして跡のものをうまく整理してさへいけば却つて今迄よりも樂な生活が出来るかも知れない。唯茲で恐れるのは、その整理が早く運ぶかどうかと云ふ點なのだ。私も折角これまでやつて來た事業であつてみれば、いくら思ひ諦めても未練が残る。そんなことと整理が延引てもしようものなら、それこそ私は全財産を失つてしまはなければならぬ。お前達には分るまいが、かう云ふ商賣といふものは殆んど信用ばかりで成立つてゐるやうなもんだから、いざとなれば、たつた一時間二時間の違ひで何萬何十萬といふ損害を負はなけりやならんことになる。私は唯それを恐れるのだ。」
 民造はさう云ひながら頻りに葡萄酒の盃を貪つてゐたが、彼の顔には漸次と斷乎とした決心が見えて來る。十のものを七まで擲つて、あとの三分を助けようとするには餘程の決心が必要である。今民造はそれをするためにこの身ひとつを傷ましい絶望と懊惱の淵に沈めてゐるのである。

ある。幾十萬の資産はまるで浮雲のやうに動かぬ基礎を離れて今空中に浮動してゐるのである。機を逸すれば總ては命運の風に吹き散らされて、虚空に跡かたもなく消え去つてしまふのである。彼は今、事業家の感ずる最も致命的な問題に面を合はせ、その苦痛をどん底までも味はつてゐるのであつた。

八重子も歌子も返す言葉もなくなつて、かすかに啜り泣きをしながら首を垂れてゐた。
 戸外では吹雪の音も深沈と更けて、庭の樹立て枝措る、雪の音がひつそりと響いてゐる。

八の五

民造は少時すると又語をついて、

「兎に角、私はもうかうなつた以上は私で出来るだけの努力をして、なるべく損害の額を少なくするより他に仕様がなない。私ひとりの體ならどうなつても構はんが、しかし私の下に働いてゐる何十、何百の人間のことを思ふと私は軽々しく動くことが出来ないのだ。それに此の家にしてからが、私はお前達のことを思ふと、もしものことがあつた場合にどんな大きな苦痛を自分の身

に負はなければならんかも知れん。たとへどんな運命が迫つて來ても、お前達だけはどうかして苦しめ度くないからなあ。私はこの頃になつて親子の間の愛情といふものがしみる／＼分つて來た。私はお前達によつてどんなに慰められ、どんなに勵まされてゐるかといふことがやつと分つて來たのだ。』

八重子も歌子も唯低く首を垂れて、かすかな啜り泣きの聲を洩らすばかりであつた。今父がこんな絶望の淵に沈みながらも、仍且つ自分達を熱愛し、自分達の爲めよかれとばかり計つて呉れてゐるのかと思ふと、二人は有難さに泣かすにはゐられなかつた。その思ひは父と同じで、今彼等も亦たつたひとりの此父なしには生きては行かれないのであつた。そして父の斷乎とした決意の色をみると、今迄の不安はいつしか消え去つて、父と一緒にどんな陋巷にても甘んじて落ちて行かうといふやうな突詰めた心持ちになつてゐた。

民造はそのまゝ、又葡萄酒の洋盃をあげて何事か頻りに考へ込んでゐるが、しばらくするとやつと思ひ切つたやうに又八重子の方をみて、

『實はこの事ももう此間から云はう云はうと思つとつたんだが、つひ忙がしさに紛れて今日ま

でそのまゝになつてゐるが、八重子、實はお前には是非折入つて頼み度いことがあるのだ。』と、云つて、民造は八重子の顔色を讀むやうにじつとその顔を見てゐるが、やがて又氣を取り直して、それは他のことではない、いつぞやも話した例の今津の縁談のことだが、あれに就いてお前はどうか云ふ考へを持つてゐるか、それが聞き度いのだ。あの時には唯さう云ふ意向が見えてゐた、格別正式にどうかの申込んで來た譯ぢやなかつたが、あれから以後今津からは商業會議所の飯田君を介して、愈正式の申込みをして來たのだ。その様子でみると向うは餘程乘氣になつてゐるらしいが、私も自分の娘とは云ひ條、私の一存でどうするといふ譯にもいかなので、まあそのうちに娘の意志も確かめてみた上と云つてそのまゝにして置いたが、一體お前はどうかするつもりなのだ。』

八重子はそれを聞くと、そつと涙を拭きながら黙つて考へ込んでゐるが、やがて顔をあげて、

『どうつて別に私の方ではまだ極つた考へも御座いませぬのですが、……。』と、低い聲で答へて、『どうしたら宜しう御座いませう。私、お父様の御意見次第で定めようと思つて居りますんですわ。』

「いや、それは可けない。こればかりはお前の體のことなんだから、お前の意志に従つて定め呉れんけりや困る。」

八重子は手帛で口を掩つて、

「でも、私、いくら考へても考へがつかないんで御座いますもの。ほんとうのことを申しますと、もう私もとつて二十一で御座いますし、お友達の御様子をもみてももう大概の方は結婚をなすつておしまひなさいましたし、ますから、私も近い間にはさうしなければなるまいとは思ひますけど、……」

「無論さうとも。結婚するしないはもう問題にはならんのだから、唯先が今津の伊佐雄ではどうかといふことを訊くのだ。私はあれならお前の良人として申分のない人物だとは思ふが、併しお前の考へは又違ふかも知れんのだからなあ。」

八重子はさう云はれると又力なく首を垂れてしまつた。そして手に持つてゐた手帛を強く噛みながら長いこと返事をしなかつた。

八の六

間内にはしばらくの間、雨戸に當る雪の音ばかりが、ひそ／＼と聞えて來た。民造も葡萄酒の洋盃を手につつま、黙つて八重子の返事を待つてゐる。

八重子はやがて漸う又顔をあげて、

「私、ほんとうのことを申上げると、もう一年間だけこのまゝにして家に居度いんで御座います。來年になりましたら又何とか考へが極るだらうと思ひますが、……。」と、きれ／＼に云ふ。民造は強ひて微笑んで、

「そりや又どうした譯でだね？」と、訊く。

「どうしてつて、別に理由もないんで御座いますけど、唯さうした方がいゝやうな氣が致しますんで。なんだかかうやつて家に居りますと、自分といふものが漸次分つて來るやうな氣がして、ほんとにどんな方のところへ参り度いかつていふことが自然に極つて來るやうに思はれますもんですから……。」

「うむ、お前の云ふことはよく私にも分る。そりや無論さうだらうとも。さうなければならん筈だ。」民造は我が意を得た様に合點いたが、やがて眉を曇らせながら、「それではお前の考へに従つて今津の方は斷つてしまふか、それならば早くしないと、このまゝいつまでも引張つては置けんからなあ。」

八重子はさう云ふ父の顔をおつゝ見てゐるたが、父の顔に失望したやうな色がありくと浮かんて来るのを見ると急に自信のないやうな氣の毒なやうな顔色になつて、

「でもそれは私の心のなかでぼんやりさう思ふだけで、ほんとうは私にもどうしていゝか分らないんで御座いますの。若しお父様の方にいゝお考へが御座いますのならどうかそれを仰有つて下さいましな。」と、首を傾げながら云ふ。

民造は自分ももう一度考へて、やつと思ひ切つたやうに口を切りながら、

「お前がさう云ふなら、私も腹藏なく云はう。實は私の本心を云ふと、今度の縁談は私としては少しも異存はないのだから、どうかして纏まるものなら取纏め度いのだ。此の忙がしい際に又お前の結婚などがあつては一層忙はしくなるのだが、しかしそこには又別な事情があるの

だ。」と云つて、民造はそのまゝ、以ひ澁みながら八重子と歌子の方をまじく見てゐるたが、更に言葉を改めて、「實はかう云ふことを云ふのは親として甚だ卑怯な話ではあるが、事情がかうなつて見れば今更どうにも出来ないのだ。底を打割つて云ふと、私はこの際あの今津の助力を借りなければ到底私の位置を安全にすることは出来んのだ。今津が今十分肌をぬいて呉れ、ば私の方は存外早く片が附くかも知れんといふやうな状態にあるのだ。で、それをするためにはどうしても向うの要求も聞いてやらなければならないし、此方でも出来るだけのこととはしてやらんけりやならんことになる。それも伊佐雄君がお前の良人として不適當な男なら、一も二もななく斷わつてしまふのだが、私はほんとのことを云ふとひどくあの男に惚れてゐるのだ。それだけはどうかしてお前をあの男にやつて、圓滿な家庭を作らせて見度いし、一方では又婿、舅として何の遠慮もなく今津に私の事業を補助して貰ひ度いのだ。」

八重子はさう云ふ父の言葉を一々翫味するやうに聞いてゐた。

民造はそれを見ると急に聲をひそめて、

「つまりそれといふのもどうかしてお前達を幸福に暮させ度いと思ふからなんだ。若し私の身

に萬一のことでもあつたとすると、折角これまでにして育つて来たお前達までが私と同じ運命に引込まれてしまはなけりやならない。お前の體が極れば、又すぐに歌子も嫁げなければならん。さうして置きさへすればたとへ私が全財産を棒に振つてしまつても、私ひとりの體さへ處決すれば濟むのだからなあ。……』その言葉は沈痛を極めてゐた。

八重子はその言葉の裏に隠された父の傷ましい心遣ひと斷念を思ふと又耐らなくなつてしく／＼涙を呑みはじめた。

八の七

民造はそれから諄々と愚痴を零すやうな語調でいろ／＼な利害關係やら將來の方針やらを八重子に説いて聞かせたが、その言葉のなかには言々句々子を思ふ親の慈愛が溢れてゐて、何ひとつ無理と思ふやうなことはなかつた。八重子も歌子も唯泣きながら聞いてゐた。父の情が身に沁めば沁む程彼等はどうかして父を助け度いと思ひこそすれ、父の意志に背いて少しても父を苦しめるやうな事をする氣には傷々しくてどうしてもなれなかつた。

八重子は父の言葉を聞きながらも自分といふものを頻りに考へ耽つてゐた。併しそのうちに父を憐れむ心に打克たれて、自分はどうかつてもいゝといふやうな心持ちになつて来た。もし今津の伊佐雄と結婚する方が父のためになると云ふのなら結婚しよう、自分の身はたとひどんな苦勞の淵瀨へ沈んでも、父ばかりはどうかしてこのうへの憂き目に逢はせ度くない。それに伊佐雄も決して嫌ひな人ではなし、唯自分の廣い運命が今急に一局部に限られてしまふのが何となく厭さに結婚を拒んで見えたものゝ、さうと覺悟を極めて見れば決して自分が恐れる程の一大事ではないやうな氣がする。彼女はその時には心からさう思つたのであつた。ついこの夕方大磯の別荘で貞夫と話し合つたことなどはもういつの間にか記憶の面から消えて、彼女は自分を偽つてゐるのをその時少しも意識しなかつた。自分ばかりではない、忘れてはならぬ或心の祕密までも彼女は忘れてゐたのであつた。

八重子はやがてやつと決心が極つたので涙を拭きながら、

『お父様。私、いざこざ申しましてほんとに申譯が御座いませぬ。お父様の仰有ることはよく分りました。私、お父様の仰有るとほりに伊佐雄様と結婚いたしますから、どうかそのおつ

もりて。……』と、口籠りながら云ふ。

民造は今迄不承知さうな顔をしてゐた八重子が急に思ひ懸けない調子で結婚を承諾したので、意外な顔色になつて、

『それではなにか、お父様の云ふことを聞いて、結婚すると云ふのか?』と、繰返して聞いた。八重子は優しく合點いて、

『はい。私、さう極めました。漸次いろ／＼なことを伺つて見ますと、どうもさうした方がお父様にも私にも利益のやうで御座いますから。それに私はもうどんなことがあつてもお父様にこのうへ御心配をかけるのは厭で御座いますから、丁度今度のお話がい、機會で御座います。私達は私達で出来るだけのことをして、どうかしてお父様のお苦しみを少しでも軽くして差上げ度いと思ひますから……』さう云ふうちにも云ひ甲斐のない涙は八重子の頬に流れて思ひ断ち難い或悲しみが心に湧いてくる。

民造はそれを聞くと自分もうすぐ涙含みながら、

『うむ、よく云つて呉れた。私もお前達からさういふ言葉を聞くと實に嬉しい。よく云つて呉

れた。』と、云つて、心から嬉しさに微笑んだが、やがて又「しかし結婚のことは私に強ひられて承諾したのではあるまいなあ?もしさうとすると私はお前を犠牲にするやうで甚だ心外でならんから、……』

八重子はそれを途中から抑へて、

『あら、お父様。そんな、そんな水臭い事を仰有つちや厭で御座いますわ。犠牲にするのしないのつて、そんな厭なことは私これつばかりも考へちや居りません。そんなことを仰有られると私情なくなりますわ。』

民造は態と聲をあげて笑つて、

『いや、こりや私が悪かつた、許して呉れ。それならそれで私は明日早速飯田君の方へそのことを返事してやらんけりやならんが……。』

窓の外では漸次と風が吹き募つて来て、雨戸へ吹きつける雪の音が騒々しく耳へついて来た。親娘三人は各自違つたことを考へながらじいつとその物音に聞き入つてゐた。

隣の民造の居間では飾時計が冷たい音色で午前一時を打つた。

九のー

八重子が愈々今津家の伊佐雄と結婚することに取極められると、局面は俄に一轉して來た。結納が取交されてから僅か四五日も経たないうちに結婚の事實は各新聞によつてさまざまに世間へ流布される。磯谷の店に起つてゐた重大な事件もいつか巧みに糊塗されてどう整理がついたのか兎にも角にも、總ては一時世人の視聽の域外に葬り去られてしまつた。その間には様々の苦心慘憺があつたのだが、それは計畫がうまく圖に當つたので、遂に今津家と磯谷家と、それにその事件に關係した二三の人々より以外には全く知られずに済んだのであつた。

磯谷家と今津家との慶事はいろ／＼評議のあつた末、愈々その翌年の正月の十日に擧げられることに決定した。もう正月といつても間がないので、兩家とも師走の忙しいさなかにまるて足もとから鳥が立つやうに大急ぎでその支度に取懸つた。

殊に磯谷家では始めての結婚なので邸中上を下へかへしての騒ぎであつた。八重子の兄に當る清造がもう十年以前に病死してしまつてからは八重子が嫡統の長女になつてゐるので、戸籍

の關係を變更するのがなか／＼容易なことではなかつた。養子は断じて不可といふのはもう民造の年來の持論なので、なかには長女を他家へ婚嫁させるのをいざこざ云ふものもあるにはるたが、民造はそんなことには断じて耳を藉さなかつた。そして何か異議が出たりすると彼は磯谷家の相續人はちやんと別に考へてあると云つて、一步も譲らなかつた。彼の胸中にはその時、何か深い考へが藏されてゐるらしかつた。

三越や高島屋からは毎日のやうに八重子の晴着や調度が出来上つて來る。殊に高島屋は八重子の母親の代からの出入りなので、高貴な衣類や帯のやうなものは一切その店へ任せてあつたのであつた。出来上つて來た衣裳を拜見にさまざまの人が出たり入つたりした。八重子の居間から外の廊下まで箆笥や長持ちが列をなして續いた。

もう師走も押詰つた或寒い日の午後のごと、弱々しい薄日の射す大森の停車場のプラットフォームには一人の若い女がさも人目を忍ぶやうにこつそり院線の電車から下車した。黒つぽいお召のコートを着て、房々とした束髪にはダイヤのヘアピンをさし、鼻が隠れるほどに柔かい繻子の襟巻をしてゐるので、大きな美しい眼だけが見えてゐるたが、それは紛ふ方もない八重

子であつた。

彼女は絹の手袋をはめた手に小さなオベラバッグをひとつ持ったきりて、そのまゝ、小走りに停車場を出て、すぐ前にゐる客待の俥に乗つたが、俥夫が行先を訊いた時、何やら答へるには答へたが、その言葉は低かつたので俥夫にだけ聞えたきりであつた。

俥夫はやがて心得た顔で梶棒をあげた。そして歳暮にても行くらしい人の間を、

「はい、はいッ。」と威勢のいい、懸聲を残しながら突切つて行つたが、道は踏み切りを越えようとすぐに山手の方へ曲つて、そのまゝ、山を削つた切通しへ上つてゆく。

俥上で俯向いてゐる八重子の顔にはもう婚儀の近づいた昨日今日を、どうしたものか妙に思ひ入つたやうな窠れが見えてゐる。眼の色も力なく沈んできちんと化粧してゐるだけに頬の色は傷まじさが眼に立つてみえた。そして時々その眼をあげて四邊をじろ／＼見廻してゐるが、その底には人を恐れる心持ちがあり／＼と見えてゐた。

俥はやがてやつと平らな高臺へ出た。そこ、の樹立は悉く赤裸になつてゐて、黄褐に枯れ盡した草葉はいた／＼しく日の光に照らされてゐる。陰の道には霜どけの泥濘が、紫色の陰影

を浮かせて、そのなかへ百舌鳥の鋭い啼き聲が寒さうに響いてゆく。

俥が生籠で取圍まれた廣々とした清岡子爵の邸の前まで来懸ると、俥上の八重子は、

「あ、此處でいゝのよ。」と云ひながら、俥を留めさせてついと降りた。そしてそのまゝ、大きなその邸の石の門のなかへ吸ひ込まれるやうに入つてしまつた。

九の二

八重子は門を入るとそのまゝ、つか／＼と西洋建の女關のところへいつて、その扉を軽くノックした。と、なか、らは十七八の眼鼻立ちの美しい少年が取次ぎに出て来て、八重子の名を訊くとやがて又奥へ入つてゆく。

二度目に出て来たのは脊丈の高い、色の白い三十四五の美丈夫で、遊いお召づくめの着物がしつくり體に合つて、見るから男でも惚れられするやうな人柄であつた。それはこの清岡子爵家の當主で、父なる子爵が長逝してからはこの大森に自分の嗜好どほりの邸宅を建て、誰に制縛されるでもなく、草花などを仕立てたり、趣味の廣いに任せて道楽といふ道楽は片端から仕盡

しながら悠々とその日を暮らしてゐるのであつた。まだ獨身で、しかも生活がきちんと整頓されてゐるので、彼は若い華族の間でも評判の人物であつた。それも父が残していつた資産があり餘るほどあるためではあつたが、ひとつには又彼が青年時代を英國で過したその影響もあつた。清岡子爵は八重子の姿をみるとさも吃驚したやうに眼を睜つて、

「お、貴女でしたか。どうした譯でこんなところへ來たんです？」と、怪訝さうに訊く。もう長い間の交際と見えて、言葉の調子はひどく打解けてゐた。

八重子は艶やかな嬌態をしながら、

「あの、私一寸貴方に急にお眼に懸り度いことが出來ましたもんですから……。」と、いつて滴るやうな媚びを見せながら清岡子爵の顔を見上げて、「只今お邪魔ぢや御座いませんの？」
「いや、格別。まあ、お上んなさい。」清岡子爵は何やら浮かぬ顔で云つて、そのまゝ先へ立つて、彼女を庭に面した應接室の方へ連れてゆく。

そこは總てルネッサンス式の裝飾をした極めて華麗な室で、綠色の窓帷を透いて來る日の光が何とも云へぬ柔かい色を四邊へ流してゐる。高貴な卓布をかけた卓子や、飾棚はそのなか

にぼうつと浮き上るやうに見えて、隅のところへ置いてある大理石の影像や美しい草花は光線の加減でまるで繪のやうに見えてゐるのである。

清岡子爵は大きな安樂椅子を示しながら、

「さあ、お懸けなさい。」と、云つて、自分もその傍へ腰をおろしながら、じいつと八重子の顔を見た。八重子はしなやかに體を曲げて遠慮なくその椅子へ坐つた。そして四邊を見廻しながらさも居心地がよさうに、

「ほんとに何時伺つても氣持のいい、お宅ですことねえ。」と、云つたが、清岡子爵は何を云ふかといふやうな顔つきをしてその横顔を見詰めてゐた。

やがて先刻取次に出た美少年が茶や菓子運んで來る。清岡子爵はそれを一々八重子の前へ配つてやつて、美少年の書生が出ていつてしまふと靜かに口を切りながら、

「急な用といふのは何んですか。それを聞かうぢやありませんか。」と、云ふ。

八重子はそれを手で抑へて、

「まあ、貴方も随分忙はしない方ですわねえ。そんなに仰有つちや私困つてしまひますわ。」

と、笑ひ出す。

「いや、併し貴女が急な用だつて云ふからそれなら早く聞いて上げた方がいい、と思つたのさ。」
清岡子爵は眞顔で云ふ。

八重子は又噴き笑して、

「いくら急な用でもお茶ぐらゐるは頂かせて下さつてもいい、ぢや御座いませんか。私今電車を下りたばかりなんですもの。」と、甘えるやうに云ふ。

清岡子爵はそれなり葉巻に火をつけて黙り込んでしまつた。

三町も離れてゐない射的場の方では鋭い銃聲が時々思ひ出したやうに聞えてゐる。寂しくうら枯れた庭の花床には日の光が黄色く淀んで、その陰を綺麗な鶏が三羽ほどことごと歩いてゐる。

九の三

八重子は窓の硝子越しに美しい鶏の姿をじいつと覗いてゐるが、漸う思ひ切つたやうに清岡

子爵の顔を眞面に見て、

「あの、私實は今先日のお手紙のことについて、あの、一寸御相談いたし度いと思つて伺ひましたんですが……」と、云ひながら清岡子爵の胸のなかを讀まうとするやうに瞳を据ゑる。子爵はそれを皆まで云はせずに、

「あ、あの手紙のことならあれでもう済んでゐるんだから、相談もなにもない筈ぢやありませんか。私はもう一度不愉快な記憶を呼び返すのは厭だからあの話ならお断りしよう。」と、陰鬱な眼光になつて云ふ。

八重子はそれを慌たしく手で押へながら、

「私、貴方がきつとさう仰有るだらうと思つて、途々心配しながらやつて参りましたんですわ。ほんとに私、貴方がきつとさう仰有るだらうと思つて……でも、私、貴方の仰有ることも御無理ぢやないとは思ひますけど、私の立場も少しは察して頂き度いと思ひますわ。かうなりましたのも決して私のしたことでは御座いませんし……。」

「いや、もうそんな辯解を聞く必要は少しもないんです。察しろと云つたつて、私の方にはそ

の餘地がないんだから仕方がない。私はかうなつた以上は結果をもつて判断するより他はないんですからなあ。」

八重子はそれを聞くと急に悲しさに眼を濕ませて、

「そんなことを仰有られると私、ほんとにどうしていい、か分らなくなりますがわ。私、ほんとに自分で覺悟をして父の犠牲になつたんで御座いますから、今更愚痴つばいことは申せませんけど、少しは私の心持ちも察して頂き度いと思ひますわ。死んだ氣になつて、思ひもそめない方のところへ參る私の心持ちも察して頂き度いんで御座いますわ。」さう云ふ八重子はいつもとまるで違つた素直な、弱々しい調子になつてゐる。そして雙眼に溢れるほど涙をためながら、

「さうしてなんて御座いませうか。あの一旦かうなりました上は、あのお手紙に御座いましたとほりに、もうまるつきりお眼にかゝることも出来なくなるんで御座いませうか。」

「無論ですとも。人の妻になつた貴女と以前どほりの關係を續けていくといふことは到底私には出来ません。私は貴女の聲を聞くのも厭だと思ふんです。」

「まあ、そんなにまで仰有らなくてもいい、ぢや御座いませんか。私、それぢやあんまりですわ。」

……。

八重子は到頭我慢が出来なくなつたか、袂から佛蘭西絹の手巾を取り出して、つと顔を掩つてしまつた。そして嗚咽をくひしばるやうにじいつと肩を縮めてゐたが、やがて胸の底から絞り出されて來る歎歎はその力に打勝つてくひしばつた唇からは悲しげな泣き聲がかすかに洩れて來る。

八重子と清岡子爵とはもう半年も以前から互に思ひ思はれてゐた間柄なのであつた。理智の勝つた二人はその戀の間にも節制といふものを堅く守つてゐたので、二人の仲はまるで他人の眼にも觸れず、始終彼等の周圍に絡つてゐる人達も二人がそんな關係になつてゐることは夢にも知らないのであつた。二人はそれほどにまで世人を恐れて、わが手で築いた小さな世界のなかで人知れず戀の愉樂を嘗め味はつてゐたのであつた。

八重子が突然今津の伊佐雄と結婚することにになると二人の間にはそれと同時に或慘ましい破綻が生じて來なければならなかつた。

父を救ふ爲に身を殺して結婚を承諾したものの、八重子は到底この清岡子爵を思ひ切ることに

が出来ないのであつた。父に向つて結婚すると云ひ切つた時には、清岡子爵のこともどうにかして思ひ切らうと思つたのだが、漸次と日が経つにつれ、思ひは増りこそすれそのまゝ、彼から別れてしまふことなどは到底出来さうになかつた。心の壓迫が強くなればなるほど八重子の思ひは益々清岡子爵の方へ惹かされていくのであつた。

九の四

八重子は本心ではどう考へても、どう考へ直しても、この清岡子爵とこのまゝに別れてしまふことは出来なかつた。思ひ切らうとすればするほど強い執着が来て附纏つた。しかしもう結納も済んでしまつた今日、今更伊佐雄との結婚をどうする譯にもいかない。じいつと考へて見ると、いくら父への忠實な考へからとは云へ、あの時軽々しく結婚を承諾してしまつたのが、口惜しくて耐らない。一時の感情に惹かされて、到頭こんな悲しい羽目に陥つてしまつたのかと思ふと、耐へ難い悔恨の念は次々と湧き起つて来る。

八重子はもう如何に悔恨しても、泣き叫んでも一旦極つた事實には打克つ事が出来なかつた。

で、彼女は父の爲に身を犠牲にしたその報酬、否、その償ひのためにどうかして何等かの方法でこの清岡子爵との間の關係を結婚して後迄も持續していき度いと思つた。譬へ破倫と罵られても、法律上の罪人と威嚇されても、彼女の強い利己心はどうかしてそれを仕遂げようと望んでゐた。それぐらゐるなことはかうまでして身を苦しめてゐる自分にとつて正當な權利であると思つた。今日彼女が大膽にも白晝人目を忍んで大森の清岡邸を訪ねたのは全くその方法を講ぜんがためばかりであつたのであつた。

八重子は清岡子爵の冷たい言葉をどうにかして打解けさせようとして、これしきのことに向けてはと我れとわが心を鞭打ちながら、「ほんとにねえ、貴方、私、そんなにまで仰有らなかつたてい、と思ひますわ。そりや私の致したとがさぞお氣にも障つて居りませうけれど全くどうにも出来なかつたんで御座いますもの。貴方は今父がどんな苦しい位置に居りますか、それを御存知ないから私をお憎みになるんでせうけど、私、全く父の境遇を思ふと可哀さうで耐らないんで御座います。私、さへ眼を瞑つて結婚しませば、それで澤山の人の苦しみが助かるんで御座います。それまでにして、私は父の犠牲になりましたんですから、どうかそのことだけは貴

方へもようく考へて頂き度いと思ひますんですわ。』

子爵はその顔を見ながら皮肉な眼つきになつて、

『そりや私にもよく分つてゐます。貴女が親孝行といふ善行をするために戀も何も擲つてしまつたその悲壯な意氣には私も非常に敬意を拂つて居るんです。貴女は實に意志の強い立派な女性です。總てに打克つてゆく力は到底私達には眞似が出来ない。』と、いらくしたやうに云つて

『併し、その貴女の意志の犠牲になつて、まるで古草履のやうに手もなく打棄られてしまつたこの私はどうなるんでせう。裏面から見れば誰れも合點のいく事實であつても、表面から見ればこの私が非常に悲惨な位置に落ちなければならぬ。つまり私はあの今津君に負けたことにならぬ。それは私の誇りが許さない。私は斷じて人に負けてゐたくないんだ。だから私は此際たとへ貴女に對してどんなに深い執着があつても、それをどうかして投げ出して、反對に私の方から貴女を捨て、しまはなけりやならない。私は貴女と別れるのぢやない。此方から貴女を捨て、しまふんです。』

八重子はその言葉が終らないうちにもう耐らなくなつて、安樂椅子の腕木へ泣き伏してしま

つた。てきばき物を處理するとの好きな思慮の深いこの清岡子爵がかう云ひ出したからには到底もう自分の未練な考へが受入れられる見込はないに極つてゐる。自分は今このまゝ、永久にこの男から捨てられてしまふのかと思ふと八重子は身も世もあらなくなつて、涙のある限り泣いて泣いて泣きつくしたかつた。それと一緒に伊佐雄と結婚するといふことが耐らなく厭になつて、どうせ破談にすることが出来ないものなら、いつそのまゝ、何處か人に知られない遠い處へでも遁げていつて、そこで徐に善後の處置を極めたいやうな氣になつて來た。

九の五

清岡子爵は頼りに泣き鞆る八重子の姿をじつと眺めてゐたが、やがて我れに歸つたやうなきつとした顔になつて、

『八重子さん。兎に角これでもう私の方から云ふこともないし、又貴女から聞くこともないんだから、どうかもう歸つて下さい。夕方から新戚のものが來ることになつてゐますから、ひよつとして貴女とかうして逢つてゐるところを見付けられでもすると、それこそ大變な事になりま

すから。』と、云ふ。

八重子は泣きながら顔をあげて、さも恨めしさうに眞紅に泣き膨らした眼で子爵の顔をじつと凝視してゐたが、その瞳からは涙が大きな玉になつてはらくくと留途もなく流れ落ちて来る。何か云はうとしてももうせぐり来る感情のために舌が纏れて、彼女は言葉が唇へ出て来ないのであつた。

八重子はそのまゝ、返事もせず子爵の顔ばかり見てゐたが、しばらくすると狂氣したやうに激しく嘔り泣きしながらいきなり子爵の胸へついと顔を埋めて、

「貴方、いつそ私を殺して下さいまし。私、私、どうしても此のまゝ、お別れするのは厭で御座います。私、死んでもそんなことは厭で御座います。……」と、涙に遮られながら云ふ。

子爵はその感情の激動にうごかされて、思はず八重子の肩へ手を置かうとしたが、すぐ又思ひ返してその手でそつと八重子を突き離すやうにしながら、

「今更なんです。そんな未練がましいことをして貴女は恥かしいと思ひませんか。親のために身を犠牲にするとあれほど強いことを云つてゐた貴女が、何故そんなに今になつて醜い未練を残

すのです。そんなことをするよりも、このまゝ、涙を拭いて私の傍を離れていつて下さい。貴女に捨てられたこの憐れな意氣地のない私を嘲つて、孔雀のやうに羽をひろげてこの家を出ていつて下さい。』さう云ふ子爵の言葉の底にも涙が滲んで来た。

「厭です、厭です、そんなことを仰有つちや厭です。』と、八重子は痙攣するやうに肩を慄はしながら云つたが、猶ほも眸と彼の胸へ顔を押當て、

「貴方こそそんな、そんな冷たいことを仰有るよりも何故この私に死ねと仰有つて下さいません。このまゝ、私をお捨てになるくらゐなら、ほんとに何故私を殺しては下さいません……」

「そんな馬鹿なことを云ふもんぢやありません。どうして私にそんなことを云ふ権利がありません。貴女はこれからあの今津君と結婚して、幸福な生涯に入る人です。私は今一時の感情に制せられて貴女の前途に暗い影を投げるやうなことはしたくない。さ、そんなことを云はずにどうか今日はこのまゝ、歸つて下さい。私はもうとてもかうして貴女の顔を見ていることは出来なくなりました。』

子爵は強ひて自分の感情を抑へながら徐に云つて、八重子の肩を抱いてそつと彼の胸から引離した。八重子はその腕へじつと唇を押當て頻りに泣き欬つてゐたが、到頭強い男の力に打負かされて安樂椅子から立たせられてしまつた。

子爵はやがて八重子を連れて玄關まで出て來た。そして、

「ぢやもう私はこれぎりお眼にかゝりません。どうか御機嫌よう。」と、云つて、そのまゝ八重子を扉の外へ出して、扉をばたりと閉めてしまつた。

八重子は人の見る眼も恥ぢず頻りに泣きくづれてゐたが、扉の閉まる音と一緒に伸び上つて、その硝子からなかを覗いた。子爵は緑色の帷の陰に隠れて、八重子がどうするかと見まもつてゐたが、ちらと見えた彼の眼には一杯に涙が輝いてゐた。

八重子はしばらくすると到頭泣きながら清岡邸の門を出ていつた。戸外へ出てみると夕陽は紅く高臺の彼方へ傾いてゐた。

九の六

八重子は清岡の邸を出ると片影の道を選つて歩きながらとある坂道の上の空地へ出た。そこは片方は崖地、片方は大きな邸宅の生籬になつてゐて、蕭々と枯れ盡した草地のはづれに生えた雑木の間からは暮れゆく東京灣がひと眼に見渡される。夕陽は鈍い灰色に沈んだ海面に浮ぶ白帆の影を紅くそめて、松並樹のつゞく街道には淡い寒靄のなかをもう灯をともした電車が小さく走つてゆく。畑地は黄色く、人家は黒く、地の面を掩ふ總ての影は何から何まで陰鬱な冬の黄昏に壓しつけられて、何處をみても寂しさよりほかには何も無い。じつと耳を澄ますと眞紅な夕榮の空を二三羽の鴉が断れぎれに啼きながら渡つてゆく。

八重子は到頭そこへ立止まつて、置き捨てた古材木のうへへ、腰を下ろしながら見るともなく、海の方を眺め下ろしてゐた。夕陽は刻一刻に影うすれて、見る間に四邊は冷たい夜の色に掩はれてゆく。それと一緒に霧は漸次と深くなつて、海を掩ひ、街道を掩ひ、しまひにはあかくと電燈のともつた停車場までぼんやりと霞ませてしまふ。その心細げな薄明を眺めやる八重子の胸には限りない悲しみが湧上つて來るばかりであつた。

考へれば考へるほど八重子は悲しくて耐らなかつた。今清岡子爵に捨てられて、これから先の

幾年をどうして送つたらいいであらう。此の戀ばかりは今迄自分が全力を盡くして秘めに秘めて楽しんで来たものを、もう今日からはその歡びも消えてなくなつてしまふのである。どうしてこのうら若い心がその悲しさに耐へられよう。と云つて、もう今日となつては伊佐雄との結婚を破談にすることは到底出来ないのである。その間の切ない苦悶はやがて漸次と八重子の心を捨鉢な自暴自棄の方へ追ひ落としとしていつたのであつた。寒靄につ、まれた海と野とを眺め下ろしたその夕が遂に八重子には一生の轉機をつくる岐れ道になつてしまつたのであつた。彼女は冷たい夜氣のなかに古材木のうへ、くづをれたま、泣けるだけ泣いた。

ふと氣づいて顔を擡げた時にはもう四邊は闇の一角に掩ひつくされて、とみると遙かな海上には盆のやうな寒月が浮び出てる。その光は煙のやうな靄を蒼ざめた、鉛色に照らして、その底に點々と瞬く燈影は心細げに遠く近く明滅する。八重子の頬にはもう涙も乾いて、濕みを持つたその艶やかな瞳は堅い決心と、物に餓えたやうな凄まじい氣勢に充たされてゐた。

八重子はやがて力なく立ち上つて、古材木の傍を離れた。そしてそのまゝ、停車場の方へ降りていかうとして、坂路へかゝつたが、やがて何と思つたかもう一度引返して再び清岡の邸の方

へやつて来て、少時の間、その生籬のところから邸内の様子を窺つてゐた。

温室の向うに遠く見える應接室にはあか／＼と電燈がともつて、綠色の窓帷を透いて来るその光は美しく芝庭の面に流れてゐる。夕方から親類のものが訪ねて来るとか云つてゐるが、今その來客があるのであらう。じつと耳を澄ますとその室のなかに交はされてゐる談笑の聲が、すかに洩れ聞えて来るやうな氣がする。

八重子の胸には戀しさ懐かしさが抑へきれないほどの力で湧き上つて来た。せめてもう一度彼に逢つて、自分の思ひの丈を打明けて、どうにかして彼の心を翻させたい。もし伊佐雄との結婚を止せと云はれ、ば止めもしよう。それも自分の身を捨て、どうなつても構はないといふ覺悟さへきまればどうにてもなる事なのである。さうは思ひながらも八重子の頬には又云ひ甲斐もない涙が留途もなく流れ落ちて来るのであつた。

八重子はそのまゝ、もう一度門のところまで行つてみたが、その足音を聞きつけて、邸の庭口の方からは大きな畜犬が出て来て、意地悪く吠え廻る。八重子は幾度か入らうとしたが、どうしても臆病な氣が先へ立つて足が前へ進まないの、到頭思ひ諦めてそれなり又もと来た道の方

へすごく引返していった。

十の二

ちよつと銀座迄買物に行つてくると云つて伴も連れずに邸を出懸けていつた八重子が、その夜の七時になつても八時になつても歸つて来ないので、磯谷の邸では歌子をはじめ婆や達までがひどく心配しだした。どうもその二三日前から八重子の様子が變て、いつになく人氣のない應接室の隅なぞへ入り込んで二時間も三時間も泣いてゐたり、又はともすると斷わりもしずぶいと外へ出ていつたりするので、邸のもの達はそれとなく警戒してゐたのであつた。その晩民造も商會の方の會議があつて十一時過ぎてなければどうしても歸邸しないことになつてゐたので、歌子の憂慮は猶一層深くなつていつた。せめて小間使ひでも從けてやればよかつたなどと、云ひ暮らしてゐるが、併しもう一旦出ていつたものはどうにも仕様がなかつた。そして八重子が出る時には何氣ない風はしてゐるが、考へてみると變に思はれるやうな節がないでもなかつた。

姉妹二人の居間になつてゐる八疊には歌子と婆やお絹が火鉢の周圍へ集まつてもう先刻から八重子の行方ばかり氣遣ひながら打沈んだ調子で話を立て、ゐるのである。八重子の行きさうな銀座界隈の商店や化粧品店などへは何處もかも残る限なく電話をかけてみたのだが、何處でも今日はお見えになりませんといふ返事ばかりであつた。今三人の頭には少しもその行方について心當りがないのであつた。

歌子は涙ぐんだやうな眼眸をしながら、

「ほんとに姉様も仕様がなの方だわねえ。まさかなことはあるまいと思ふけど、私ほんとに心配になつて来ましたわ。どうかして行つて被居る先を捜し出す工夫はないか知ら。」

「さあ、これほど捜しましたが分りませんので御座いますからねえ。ほんとにどう致したら宜しう御座いませう。出て被往る時にも私存じて居りましたら決してこんなことには致しませんでしたのねえ……。」

「ほんとに一寸した間だつたもんだから私もつひうっかりしてゐて……でもほんとに姉様は

此頃どう遊ばしたんだらうねえ。先時分とは何處やら御様子が変わつてゐるし、私一昨日の晩なんかはほんとに吃驚してしまつたのよ。御一緒に寝てゐると丁度夜半頃に私眼が覺めてねえ、ふつとみると姉様は臥床の上へお起きになつて、頻りに泣いて被居るぢやないか。私餘程どう遊ばしたのつて何はうと思つたんだけど、何だか恐かつたもんだから到頭そのまゝ黙つて御様子を見てゐたの。なんでも一時間位泣いて被居つたわ。ほんとにどう遊ばしたんだらうねえ。」

婆やはその話をじいつと耳をとめて聞いてゐるが、やがて片唾を呑んで、

「ほんとに此節は變なことばかり御座いますのねえ。私も應接室で頻りにお泣き遊ばして被居るところをお見懸け致しましたよ。私ほんとにお可哀さうで、……あんなお氣のさつぱりした方があゝ迄おなり遊ばしてゐるところを見ると何かお心のなかに大層な御心配ごとでもお出来遊ばしたんぢや御座いますまいか知ら。……」と、云つたが、婆やはひと膝すゝみ出て、急に聲をひそめながら、

「これはあの、此處だけのお話で御座いますけど、あのひよつとかしましたら今度の御縁談のことで何かあるんぢや御座いますまいか。私それが心配で耐りませんが……。」

歌子は悲しげな眼色になつて、

「さあ、……」と、返事をしかねてゐる。彼女の心にはそれよりも家の運命に就いて此間からいろ／＼見聞きしたことが先づ電のやうに浮んで來た。云はゞ父の犠牲のやうになつて結婚して行く八重子の心持ちの辛さも思はれると同時に、どうなつてゆくとも知れぬ明日明後日の運命が暗く彼女の胸にも迫つて來た。彼女には八重子がそんなこんなを思ひ案じて涙に日を送つてゐるのではあるまいかと思はれて來た。

その時床の間の飾時計が鳥のやうな聲で十時を打つた。

十の二

「お、もう十時打つたわ。」歌子は時計の音を聞くと慄乎としたやうに云つて、「ほんとにどうしませうねえ。あの、いつそお父様のところへ電話でこのことを申上げて御相談してみませうかしら。それでないと、もしものことがあつた場合に、手遅れにでもなると私ほんとにお父様に申譯がないわ。」と、おろ／＼しながら云ふ。

婆やも思案に盡きたやうな顔をして、「さうで御座いますね。もう時も遅う御座いますし、さう遊ばした方が宜しいかも知れませんが、あやふやな聲でいふ。」と、あやふやな聲でいふ。

歌子はそのまゝ、そわ／＼立ち上つて電話室の方へ行つた。そしてお絹に商會の番號を呼び出させて、それが出て来ると自分が代つて民造を電話口へ呼び出して貰つた。向うの電話は卓上電話なので、がや／＼した人聲と一緒にすぐさま父が出て来た。

歌子が涙ぐんだやうな聲で今夜の一件をすつかり父に話すと、彼はいかにも驚いたやうに、それは大變だと云つた。そして何は兎もあれ、これから直に歸るからそれまで待つててくれと慌たしい調子で云つて、そのまゝ電話をきつてしまつた。

民造が自動車で歸邸したのはそれから三十分ばかり経つてからであつた。彼はひどく心配になつたので、會議が了らないうちに中座して来たのだといふ。そしてその眼は憂慮で暗く乾いて居た。

民造は自分の居間へ入ると歌子たつたひとりを傍へ引きつけて、いろ／＼と善後の手段を相談した。心當りは何處もかも尋ねたあとなので、もう此のうへはどう手の下しやうもないと聞

くと、民造の眼にはみる／＼絶望の色がみえて来た。

「ほんとに困つたものだなあ。一體何處へいつたんだらうなあ。此間から私もどうも素振りが變だとは思つとつたが。……なあ、歌子。お前は何かそのことについて見たり聞いたりしたことはないか。何かこれが原因だと思ふやうなことをお前は知つてゐるやしないか。もし知つたらどうか包まずに私に話して呉れんか。私とお前との間の秘密として、私は決して誰れにも洩さんから。」

歌子はさう云はれると父の心のうちを思ひ遣つて、思はず涙ぐみながら、「あの私の口から此様な事を申上げては何んで御座いますけど、あのお父様がそんなにまで仰有るなら申上げますわ。實はこれは私だけの考へて、ひよつとしたら間違つて居りますかも知れませんが、あの姉さまは今度の結婚のことで何か御不満足なこともあるんぢや御座いますまいか。どうも此間からの御様子を見てみますと、私にはさう思はれてなりませんのですわ。」と、云ひ盡りながらやつと云ふ。

民造は黙つて歌子の顔を見詰めてゐたが、そこまで聞くと急に顔をそむけて、

「そのことに就いては私ももうこの縁談のきまる時からひどく心配してゐたのだ。」と云つて、嘆息を吐くやうに、

「考へてみればほんとに可哀想なことをしてしまつた。あれが今度の結婚を厭がつてゐるのは私とてもよく知つて居つたのだが、事情がかうなつて來てしまつたものだからつひ無理強ひにしてしまつて、……私はそれを思ふと八重子が可哀さうでならんのだ。」

「い、え、それはお父様。あのお父様もあれほど事を分けて仰有つたんで御座いますし、姉様だつても御父様のお心持ちをよく汲み分けたうへで自分から進んで御承知なすつたんですから何も私、お父様がお悪いとは思やあ致しませんわ。唯私そのことがどうのかうのと云ふんぢや御座いませんけど、あの、……」歌子はそのまま、涙と、もに云ひ淀んでしまふ。

民造は悄然として、

「いや、幾ら事を分けて話しを極めたといつてももとを云へば全く私が八重子を犠牲にしたと同様なんだからなあ。八重子の心中に立入つてみると私は可哀想でならんのだ。……」

十の三

民造も歌子もそのまゝ、少時の間黙つて深い思ひに沈んでゐたが、やがて民造は又歌子の顔を見ながら、云ひ憎さうに口を切つて、

「併し、此處でひとつ疑問になるのは何故八重子がそんなに結婚を嫌ふかと云ふことだ。今津の家なら、決して格から云つても、八重子に釣合はんといふのではなし、それにあの伊佐雄は寧ろ八重子には至極適當な人物だと私は思ふのだが、……」と、云つて、民造はどう云はうかとしばしの間考へたあとで、「こんなことをお前のまへで云ふのはいかんが、もしひよつとしたらあの八重子に誰か思ひ合つともものでもないかと思ふが、お前はそんなことを感じたことはないか？ 私の前では定めし云ひ憎からうが、併し事情がかうなつて來とるのだから、どうか打明けて云つて呉れ。それならばそれで私もどうにかせんけりやならんから。」

歌子はそれを聞くとぼうつと顔を染めて、しばらくの間云ひ淀んでゐたがやがて顔も得上げずに、

「私姉様に限つてそんなことは決してないと思ひますわ。かうして始終御一緒にゐますんですから、もしそんなことがあればいくら秘密にして被居つてもぢきに分るだらうと思ひます。」

「ふむ、併しあれも始終方々の會へ出たりして男のなかを平氣で歩いてゐるのだから、そんなことがあり得ないとは云へないなあ。お前はほんとに知らんと云ふのか。」

歌子は漸う顔をあげて、

「それだけはあの私、きつと證明致しますわ。私、姉様ばかりはそんな方ぢやないと思つて居りますもの。」

民造は力なげに煙草を取上げて、淡い煙を唇のまはりへ漂はせてゐたが、しばらくすると又云ひ憎さうに、

「あの稻垣の貞夫とは随分近しくしとるやうだが、お前はどう思ふ？ あの男ともそんなことはないと思ふか？」

歌子は又顔を染めて、

「まさかお父様。……貞夫様はあの通りほんとにさつぱりした方で御座いますもの、……。」

とは云つたが、その語尾には何かしら物が挿まつてゐるやうであつた。

民造はあんまり歌子がいたくしい顔をしてゐるのでそのうへ追窮もしかねて、急に話頭をかへながら、

「まあ、併しそれならそれでい、さ。思ひ合つとる人があるのなら、いくら八重子でもあの際に少しぐらゐるは素振りにも見せる筈だ。」と、自分でも承認の出来ぬやうなあやふやなことを云つて、「まあ、それはそれとして、此場合今津との縁談が此處まで進んで來てゐて、ひよつとして此處で何か不祥なことも起つたとしたら此の私はどうなるだらう。今度の商會の方の事件も幸ひ今津の盡力で曲りなりにも片が附いたのだから、その恩義に對しても私はどうかしてそんなものないやうにせんけりや濟まんのだ。かうならん前ならどうなつても私ひとり處決してしまへばよかつたがもう何を云つても結婚の事實は社會に公表されてしまつたのだし、それに聞くとところによると伊佐雄は八重子と結婚が出来なければ外國へ行つて一生彼地で暮らすと云つとつたほど熱心になつてゐるのだから、もし此際八重子が減多なことでもして呉れたら、私は全くどうして、か分らなくなるのだ。八重子には氣の毒だが、私の位置も少しは察して呉

れて、どうか間違ひのないやうにして呉れないと、私はそれこそ社會的に自殺をせんけりやならなくなる。……』

さう云ふ民造の顔色は漸次と沈んで来て、眉根には極めて陰鬱な神経の苦悶がふるへてくる。事實今津との間の關係がかうなつて来た今日、八重子の體に萬一のことでもあるとそれこそ惨ましい破綻は民造ひとりのうへ、集まつて来なければならぬのである。

歌子はかすかに噎り泣きしながら嘆息ばかり吐いてゐた。

十の四

民造はそれから長い間歌子に向つて今の自分の切ない境遇をこまかくと語つてゐたが、それを聞く歌子の胸は深い悲しみの底に沈んでゆくばかりであつた。父の言ふ言葉が一々聳と心を衝いて、何を云はれてもそれには抗ふことの出来ぬ意味があるやうに思へてならなかつた。もし自分が姉の八重子の位置に置かれたとしたら、何をしても涙を吞んで今津家へ興入れしなければならぬ、さうするのが父へ對する子の義務である。又父もそれを強ひる權利があるとき

へ思つた。親思ひの歌子には父がさまぐの勞苦を忍んで家を救ひ二人の姉妹を救はうとしてゐるのが此の上もなく傷はしくて、何となく八重子の態度に對して口にはつくせぬ不満を覺えずにはゐられなかつた。

十一時を打つ頃になつても八重子は歸つて来なかつた。書生達は邸の門口や電車の停留場の附近へやられてそこで見張りをしてゐる。小間使のおみよは舊友の誰彼の番號をしらべてそんな處まで片端から電話で訊ねてみる、それでも八重子の行方は皆くれ知れなかつた。

十一時を打つと民造は愈々我を折つて、執事の岡田を呼んで、極く内密で警察の手をかりて搜索する手段を講じた。岡田は何事にも緻密な世間馴れた男なので、委細の旨を一人の胸に疊んで、やがて大急ぎで警察へ出向いていつた。

それと殆んど引違へに一臺の自動車は消魂しい警笛を磯谷の邸の門口へ残しながらすすつと門内へ入つて来て、其ま、内女關の前へ来てびたりと止まつた。吃驚して婆や、小間使や書生達が出迎へに出て見ると、その自動車のなか、らは思ひもかけぬ稻垣の貞夫が降り溢る八重子の手を執らんばかりにしてついと降りて来た。

婆やは誰れよりも先に聲をかけて、

「まあ、お嬢様！」と、氣もそゞろに叫んだが、そのまゝ、式臺のところまで飛び出していつて、
「まあ、お嬢様。ほんとにどう遊ばしたんで御座います。皆さんでどんなにか御心配で……。」
と、云つたが、憂慮が深かつただけにその言葉はいつか嬉し涙に遮られてしまふ。

八重子はまるで鉛のやうな蒼ざめた顔をしてじつと俯向いてゐた。

そこへ慌しい報らせを聞いて歌子は息を切らしながら駈出して來たが、これも姉の姿をみると口がきけなくなつたやうに唯まじくしてゐる。

貞夫はいつものとはまるで違つた沈みきつた様子をしてゐるが、やがて歌子の方を向いて、

「歌子さん。あの少しお父様にお話したいことがあるんですが、お眼にかゝれるてせうか？」
と、思ひ入つたやうな聲で云ふ。

歌子は聲を慄はして、そわ／＼しながら、

「あの、父も大層心配して居りますのですから、どうかすぐにあの父の居間の方へ……。」

「それではさうさせて頂きますせう。何事もお父様にお眼にかゝつて申上げますから……。」と、

貞夫は改まつた調子で云つて、そのまゝ、内立關へ上つた。

八重子も首を垂れたまゝ、しよんぼりそのあとについていつた。

歌子は婆やと二人でその後からどうなることかと云ふやうな顔をしながら引添つていつたが、長い疊廊下を幾曲りかして奥まつた父の居間の前まで來ると、つゝとそこの紙襖の傍へ走り寄つて、外から、

「あのお父様、稻垣さんの貞夫様とあの姉様がちよつと……。」となかへ聲をかけた。そしてそつと紙襖を開けたが、なかては父の民造が何か深い思ひに沈みながら顔もあげずに火鉢の端へじつと坐つてゐた。

歌子は思はず氣先を折られて、

「あのお父様。」と、もう一度慄へ聲で云つたが、その聲で力なく此方を振向いた民造の顔は絶望と悲痛と憂慮とて眞蒼に打沈んでゐた。

貞夫も八重子もそのまま、歌子に急かれて父の居間へ入つたが、婆やが持つて来て敷く座蒲團には手も觸れず、座敷の真中のところへそつと坐つた。歌子も婆やもその場合自分達がゐるは却つて面倒と見てとつて、二人が座に就くと一緒に足音を忍びながらこつそりとその場をばづしてしまつた。

あとには三人が互ひに顔を背け合ひながら對座してゐた。貞夫も口を切らなければ、民造も一言も發しない。

その異様な沈黙は少時の間つゞいたが、やがて貞夫はもう我慢が出来なくなつたやうにきつと顔をあげて、

「あの、こんなに遅く伺つてまことに邪魔ですが、實は八重子さんのことに就いて一寸貴方までお話し致し度いことが出来ましたもんですから。……。」と、云つて、じいつと民造の顔を見詰める。

民造は苦痛に耐へられないやうな顔色になつて、

「や、さうですか。何なりと聽きませう。」と、力めて力をこめて云つたが、併しその唇は妙

に神經的に慄へてゐた。

貞夫は此處ぞと云はぬばかりに居坐ひを正して、

「實はあの今夜突然八重子さんが私のところへ見えまして、いろいろ私もお話を伺つたんですが、此際私のやうな局外者からこんなことを申上げるのは如何にも心苦しいのですが、併し私の位置としてどうしてもそれをしなければならなくなりましたもんですから、實はかうしてお眼にかゝりに伺つたやうな次第で……。貞夫の言葉は漸次と云ひ憎さうに激んで来る。

民造はあからめもせずじいつと火鉢を見詰めながらその言葉に聽き入つてゐた。

貞夫が断れぎれに語り出した内容はかうであつた。今夜晩くなつてから突然八重子が貞夫の家へ訪ねて来て、是非逢つて話したいことがあるからと云ふので、折柄遊びに来てゐた友人を態々歸して彼は書齋へ上げて見ると、八重子はいつになく歇斯的利的な落着かぬ様子で實は今夜少し考へたことがあるので、このまゝ家出をしてしまはうと思つてゐるといふ。餘りその言葉が藪から棒なので、譯を糺してみると、八重子は貞夫の詰問に耐へられなくなつて到頭伊佐雄との結婚のことから清岡子爵との關係に至るまで包むところもなくすつかり打明けて話してし

まつた。彼女の云ふのには清岡子爵と別れなければならぬ切なさはどうのものにも代へられぬ苦痛になつて心を責め苛むので、いつそこのまゝ、見ず知らずの遠い遠い國へても身を隠して自分の一身を處決してしまはう。自分に死ぬ覺悟がきまればこのまゝ、自殺をしてしまつても惜しくない命である。……

併しさうまで思ひ詰めてみても、後髪をひかれるのは父のうへである。父の悲しみや窮地に陥つてゆくのをまさしく想ひ起すと、八重子はいかに氣強くてもこれなり生命を隕してしまふやうな無謀な決心はきめかねた。そのために彼女は身ひとつを持ちあぐねて、貞夫にその切ない胸を訴へに來たのであつた。貞夫とは常からあゝして打解けて交際つてゐる間柄なので、此際彼女はほかのこと、違つて彼より他には誰れに打明けける人もなかつた。八重子はこの深夜まで、彼の書齋の椅子にくづをれて泣けるだけ泣いたのであつた。そしてどうかして身のたつやうに彼の救ひの手に縋つたのであつた。

貞夫の物語るのを聞いて先づひどく驚いたのは父の民造であつた。清岡子爵なぞといふ名は今迄殆んど彼の思考にもものぼらなかつたので、子爵と八重子がそんな關係になつてゐようとは

夢想だにしなかつたのであつた。あの評判の英國紳士風な子爵が八重子とそんな關係になつてゐる！そのため八重子が家を捨て、親を捨て、家出までしようといふ、民造は現在貞夫の口からその眞實を語られても、唯まるて夢のやうな氣がするばかりであつた。八重子は耐らなくなつて兩手で顔を掩ひながらひた泣きに泣いてゐた。

十の六

民造は少時すると漸う顔をあげて、小刻みに慄へる手で煙草を取上げながら、

「よく分りました。いろ／＼八重子のごとて貴方にまで御迷惑をかけて何とも申譯がありません。』と、低い聲で呟くやうに云つたが、やがて又悲しげな眼色になりながら「實はそのことに就いて、今迄歌子ともいろ／＼話をしとつたところなんです、何にしる餘りに出來事が急なので、私も今は殆んどどうしてよいか處置に窮しとるのです。それでかうして貴方が仲へ入つて八重子の意志を私に傳へて下さる以上は、私も貴方の意見を一應伺つて置き度いと思ふのですが、どうか腹藏なく云つて頂けんものでせうか。一體此の際私は八重子をどう云ふ風にす

ればよいのでせうか。』その言葉は沈痛を極めてゐた。

貞夫は自分も煙草に火を點けながら考へ深い口調になつて、

『さあ、その事に就いて私も今迄随分考へてみましたが、もうかうなつては唯二つの道しきやないと思ふんです。八重子さんの意志を尊重して今津の方の縁談を破談にしてしまふか、或は又飽くまで貴方の意志をお徹しになつてこのまゝ無理に結婚させておしまひなさるか、この二つにひとつだと思ひます。』さう云ふ彼の眼は熱をもつて輝いて來た。

民造はその言葉を味はふやうにじつと耳を据ゑて聞いてゐたが、長い沈思の後に今度は急に八重子の方を振り向いて、

『八重子、お前もさうまで考へたのなら、お前の方にも何かかうしようといふ意志があるだらう。それをどうか包まず隠さずに私に云うては呉れまいか。もうかうなつた以上は何も耻かしいことも云ひ憎いこともない筈ぢやないか。お前も家出までしようと思ふくらゐな心持ちなら私の前で何んでも云へん筈はないぢやないか、どうだ、八重子。』

八重子はまるで石像のやうに黙して唯悲しげに啜り泣くばかりであつた。今彼女の心は悲し

みの底の底へ陥ちてもう殆んど前後の考へもなくなつてゐるのである。突き詰めた思ひが胸をどよもせばどよもす程涙ばかりがせぐり上げて、いくら口をきかうとしても舌が強ばつてゐて動かないのであつた。

民造は益々不安な色になつて、じつと穴のあくほど八重子の顔を見つめてゐたが、しばらくすると又口を切つて、

『さうしてお前が返事をしないとこゝろを見ると、もう私にも大概お前の考へは分つた。よし、それではいつともうこのまゝ今津の方の縁談は破談にしてしまつて、お前の一身はお前の自由に任せるでしょう。』と、啜り泣くやうな聲で云つて、その返事を待つやうに八重子の一舉一動に眼を据ゑてゐたが八重子はそれを聞くと俄に聲を揚げて泣きながら、

『お父様。ほんとに相済みません。私が悪う御座いました……。』と、あとの言葉は激しい嗚咽と一緒に唇のなかで消えてしまふ。

民造は到頭自分も涙ぐみながら、

『いや、お前ばかりが悪いぢやない。もとを云へば私の考へたことが皆卑怯だつたのだ。磯

谷の家がかうなつたのも私の罪、私の考へが至らなかつたのと、ひとつには私の運が既に傾きかかつてゐるからなのだ。もうそれは不可抗な力で、いかに私がこゝて跳いたとて到底駄目なんだ。私はそれをもう疾うから自覺してゐたのだ。それに未練らしくすべてを彌縫していかうとしたのは全く私の過誤だつた。……』さういふうちにも民造の眼には涙が一杯に溢れて来て、ともすると蒼ざめたその頬へ流れ落ちさうになる。そして吃々としたその聲音には胸に餘る絶望の悲しみが歴然と響いて、じつと見てゐると彼の姿が今にも地の底へ沈んで、もいきさうに見える。

貞夫もいつか眼を伏せて、一言も口をきかない。

間内はしんと靜まり返つて、八重子の啜り泣く聲ばかりが脈々と斷續してゆく。

十の七

民造は自分の運命が既に終りに達したことをいつまでも語りつゞけてゐたが、そのうちに漸次と自暴自棄な心持ちに落ちてゆくと見え、もう總てを投げだして、我と我が體を破滅の渦巻ういつまでも支へられるものではなし、いつそ誰れを苦しめるもなく自分唯一人の處決さへしてしまへばそれでいゝとまで云つた。

併し彼の言葉は悲しみと一緒に漸次と今度は彼の唇に裏切つて來た。彼は涙の溢れた眼で八重子をみつめながら、

「併し八重子。どうせかうなるものなら何故私がお前の意志をたづねた時に清岡のことを打明けて話しては呉れなかつたのだ。あの時一言でもそのことを私に云つて呉れたら、私は決してこんな苦しい羽目に落ちなくてもよかつた。たとへ破談にするとしてもあの時断わつてしまつたら、總てのことが綺麗に運ぶ。それだけが私は恨みなのだ。今になつて断わるとしたら、私は何と云つて飯田さんに辯解したらよからう。今津の方はどうでもよいとして私はあの飯田さんに對して將來も顔向けが出來んことになる。たとへ事業界から私の名が消えてしまふとしてもどうかして私の面目だけは立て、いき度い、……」

八重子はそこまで聞くと又聲をあげて泣き出しながら、
 「お父様、ほんとに私、濟まないことを致しました。私が悪かつたので御座います。私、心
 得違ひをしてゐたんで御座います。もうかうなりました上は私、は決してお父様の御迷惑にな
 るやうなことは致しません。私、もう黙つて今津さんへ参ります。伊佐雄さんと結婚いたしま
 す。」さう云つて八重子は到頭疊のうへ、泣き倒れてしまつた。
 その時入口の紙襖の陰で誰れか、かすかに啜り泣く聲が聞えたが、やがてその紙襖はついと
 開いて、そこからは手帛で顔を掩つた歌子が轉げ込むやうに入つて來た。そして姉の傍へくづ
 をれながら、

「姉様……」と、一言云つたつきりそこへ泣き伏してしまふ。

それをみるとさすがに貞夫も耐らなくなつて、袂から手帛を取出しながら、

「八重子さん。さつき僕が云つたのは此處のことなんです。貴女が今思ひ切つて運命に反抗す
 るのを止めてしまへばお父様も御都合がよくなる。また此のお家も無事に納まるんです。犠牲
 といふもの、美しさはそこにあるですよ。さつきも云つたとほり、たとへ今津君の方が止め

になつたとしても清岡子爵があ、云ひだしたからは決して貴女はあの人と結婚することは出来
 ないんです。今津君とも結婚が出来ず又清岡子爵とも結婚が出来なくなるとしたら貴女はどう
 なるんでせう。そこをどうかよく考へてみて下さい。僕がさつきも一度貴女に反省して貰
 ひ度いと云つたのはこのことなんです……」

貞夫はさう云ひながら涙を押隠すやうに顔を背けてしまつたが、手帛を持つその指先はふる
 ぶる細かく慄へてゐた。

民造は黙つて石像のやうに身動きもしずにゐる。その顔には何とも名状することの出来ぬ表
 情が浮んでゐた。絶望と云ふにしてもそれは餘りに傷ましすぎる表情であつた。

それから一時間ばかりの間貞夫と歌子とは涙ながらに八重子を宥めつ諭しつした。一度はど
 うでもそれを思ひ切つた八重子も父の前や妹の前へ出てみると、強い決心も敢なく崩れて、彼
 女はもう死んだ氣になつて今津の家へ嫁いでゆく氣になつてゐた。そしてたとひ結婚しても末
 始終はいづれ何か身の破滅となるやうな事件が起つて來ることを彼女はその時自分でもそれと
 なく自覺してゐたのであつた。四方八方から壓迫された彼女の自己はいつか爆發しなければな

らぬ、——その不安は既にその時八重子の胸に萌してゐたのであつた。

十一の一

何事も一切磯谷家と稻垣の貞夫との間の堅い秘密として、八重子が愈々今津家の伊佐雄と盛大な結婚式を挙げたのは明くる正月の十日の夜のことであつた。實業界の大立物たる兩家の慶事なので、新聞紙上にも支度の噂などがさままぐに記載される、それに磯谷民造の一身並びにその商會が問題になつてゐたゞけに、この結婚式は兎に角世間の視聽を峙てしめた。

その日は晝のうちにはどんより曇つてゐた空が夕暮からかりりと晴れ渡つて新夫婦が日比谷の大神宮の神前で目出度婚儀を済まして自動車で披露の宴席たる築地の精養軒へ向ふ頃には凍てきつた空にも零れるほど星がきら／＼輝いてゐた。

その夜の饗宴の華やかさ、賑やかさは改めて茲に記述するまでもない。實業界、政治界の名士は悉く一堂に集まつたと云つてもいい、ほどで、三百に餘る會衆はいづれも知名の紳士と淑女ばかりであつた。乾盃の祝辭は實業界の元老宮崎男爵が述べる、それにつゞいて四五人の名

士が祝辭を述べたあとで、會衆はいづれも三鞭酒の大盃をあげて新夫婦の幸福と光榮とを祈つた。硝子窓のすぐ外には血も凍るやうな夜寒が迫つてゐるにも拘らず、饗宴の席上には電燈が白晝のやうに煌々と照り輝き、天下の春を茲に集めたやうな華やかな氣分が何處をみても充ち溢れてゐた。

八重子は眼も緩な繻ひをした晴着や春に餘る蜀紅錦の帯の美しさに憂ひを包んで、食卓に就いてからそこを離れるまで始終俯向いてばかりゐた。何か不意の出來事でも起りはしまいかと民造や歌子は頻に心を傷めてゐたが、併し幸ひにして式も饗宴も些の滞りもなく済んで、八重子の態度は遂に一絲も亂れなかつた。何も知らぬ會衆は唯八重子の美しい花嫁姿を讚めたへて、かはる／＼に來ては心からの祝辭をのべていつた。

饗宴が終ると新夫婦は會衆の間をひとわたり挨拶して廻つたあとで、媒人の飯田男爵の夫人に連れられて愈々お開きになつた。伊佐雄はその時もう父の家から別れて、新に買求めた小石川の高臺の邸の方へ移り住んでゐたので新夫婦達を乗せた大型の自動車は折柄吹きはじめた寒風と夜陰を衝いてその新居の方へ駛つていつた。

その夜は何事もなく明けて、その翌日新夫婦は打連れて新婚旅行の途にのぼつた。伊佐雄は平常から京都や奈良がひどく好きで、年に三四度は必ずそつちへ旅をするならばしになつてゐたので彼は一生の記念となるべき華やかなこの旅も態と京洛の地を選んだ。そして一週間ばかりの豫定で、畿内の名所々々を巡遊することになつた。

停車場へは、民造をはじめ歌子や婆やまで見送りに出た。何處か遠いとほい土地へでも旅してゆくやうに、その別れは華やかな新婚旅行にしては妙に濕つぽかつた。

發車間際になつて民造は八重子を眼顔で呼んで、見送りの人から離れた待合室の隅のところへ連れて行つて、

「おい、八重子。それでは當分の別れだが、どうか無事に旅行を済まして来てくれ。私はそればかり心配しとるのだからなあ。」と、心のなかに抑へてゐる思ひを眼に云はせて、何事も事なかれと口には云ひ盡くせぬ情感を籠めていつた。

八重子は束髪に結ひかへた頭髮を思はず垂れて、

「お父様。どうか御心配なく。」と、云つたぎりあとは悲しげに口を噤んでしまふ。

民造は人の見る眼もあるので態と笑顔になりながら、

「いや、まあ目出度い旅だ。お前はまた京都も奈良も知らんのだから十分見物させて貰つて来るがい。は、は、は、は。」

八重子はそのまゝ、父や妹に別れを告げて、新しい良人と一緒に西へ向つて旅立つていつた。

十一の二

寝苦しい寢臺車のひと夜が明けると列車はもう東京を遠く離れて、冬ざれた近江の國の田畝の間を駛つてゐた。車窓の窓帷をあげて見ると、弱々しい朝の日射しのなかには打續く村々の彼方に琵琶の湖面が眞紫にひろがつて見え、その向うには雪を頂いた比良比叡の連峯がまださめやらぬ夢のやうに模糊と起伏してゐる。そして人家の軒陰にほのめく紫色の影をみてる

と車外の寒氣が思ひやられるやうだつた。

八重子は曉の光りが窓の硝子に白む頃までまんじりともしすにさまぐのこことを思ひつづけてゐるが、それから少しうとくして、車内の人々がまだ起きあがらぬ前に又眼を覺してし

まつた。それからどう眠らうとしても眠れないので、彼女の向う側の寢臺に寝た良人の夢を覺まさないやうにそつと起上つて、化粧用具を入れた鞆をもつて化粧室の方へ出ていつた。そしてそこで三十分ばかりか、つてすつかり身じまひをしまふと、もうその頃には彼方でも此方でも寢臺を片附ける音がして、狭い通り路には乗客が混雑したので、八重子は人の見る眼を恥ぢるやうにそつと自分の座席へ歸つた。

伊佐雄はそれから間もなく起き上つて、顔を洗つて、體にしつくりと合ふ背廣服に着かへて、すがくしい顔つきをしながら八重子のところへやつて來た。まだかうした夫婦の生活に馴れないので、二人は何となく四邊に氣を兼ねるやうにまじくしてゐるが、伊佐雄はやがて金口の煙草へ火を點けて、

「ねえ、昨夜はよく寝られたの？」と、やさしく口を切つた。

八重子は力めて機嫌よく見せようとしながら、

「え、よく眠られましたわ。でもあの寢臺車つて云ふものは馴れないと氣持ちが悪う御座いますのね。」

「は、は、は、。そりや當然さ。家で衣具のなかへくるまつて寝るやうな譯にやいかなしさ。」

「そりやさうで御座いますけど、でもこれで二晩も三晩も寝なけりやならないとなりましたら随分窮屈で御座いませうねえ。」

「そんなことちやとてもシベリアやアメリカの旅は出來ないねえ。は、は、は、。今夜からいよ。ちやんと宿屋の座敷へ寝られるから。」さう云ふ伊佐雄の眼には今宵人氣のない宿屋の奥座敷で、息塞るやうな新婚の夜の愉樂を味はふ歡びがまざくと輝いてゐた。

八重子はそれを見ると妙に陰鬱な眼つきになつていつた。

京都へ着くまへに簡単な朝飯を済まして置かうと云ふので、新夫婦はやがて食堂車へ入つていつた。朝の食事の客がたて込んでゐるので、そこには騒々しい人の話聲や、フォークやナイフの觸れる音が車輪のどよみと一緒に充ち溢れてゐる。そしてもうなかには朝酒に酔つて埒もない氣焔を吐いてゐるやうな紳士もゐた。

二人はボーイに命じて隅の方の一つの食卓を片附けさせ、そこへ對向ひに坐つた。そして軽いフライドエッグスのやうなものをとりながら車窓から移りゆく車外の景色を眺めてゐた。

伊佐雄は少しでも話を切るのが寂しいやうに、絶えず何事か話しつゞけてゐたが、八重子はそれに口重く返事をするばかりであつた。漸次と氣持は引入れられるやうに暗くなつて、明るい朝日の光を見ても、いくら氣を引立てようとしてもそれは彼女の力に及ばなかつた。新婚の第一夜であつた一昨夜の出来事を思ひ返すと、それにつけても思ひ起されるのは清岡子爵のことであつた。あの後は何の消息もなく、また人の噂も戀しい人のことは少しも傳へて來なかつた。今頃はどうしてゐられることであらう。盛大な一昨夜の結婚式のこと聞えたならあの方もどんなにか私を嘲り、私をお憎みなさることであらう。それを思ふと人妻となつた今の體ながら八重子は思はず不覺の涙に暮すにはゐられなかつた。

十一の三

京都へ着くと、その日は一日東山から銀閣寺までの名所舊蹟を巡覽して夜は澤文へ宿を定め、その翌日も午過まで嵐山から嵯峨の方を見物して、その足で今度は奈良へ向つた。奈良では菊水へ行李をおろして、古美術の好きな伊佐雄はすぐさま春日神社や大佛の方へ八重子を案内し

ていつた。

手向山から二月堂三月堂を廻つて、あの宏莊な大佛殿の前へ出る頃にはもう夕陽も生駒の峰へ傾いて、参詣人の數も疎らになつてゐた。色褪せた丹塗の廻廊は紅い夕陽に寂しく輝いて、砂の白く乾いた境内の廣庭には枯葉を齧めかす風が妙に寂びてゐた。

二人は拜觀料を拂つて案内人に連れられながら寺内へ入つていつた。大佛殿のなかはもうはいやりとした夕闇に罩められて、欄間から射し込んで來る夕陽が僅かに大佛の胸のあたりへかすかな反映を流してゐる。三抱へも四かへもあるやうな巨柱の林立した殿堂の奥は暗く陰々とした冷たさに掩はれて、そつちから吹いて來る風は針のやうな寒氣を含んでゐた。

案内人は紋切形な調子で大佛殿創立の由來を説明したが、その聲は高い高い天井の間へ深沈と響いてゆく。そして跌坐した杉大佛の姿は半は暗く、半はほの明るく刻一刻に暮か、つてゆく。

彼等の周圍には田舎から來た参詣人らしい年老り連れが一組程通つていつた。いづれも殿堂のなかにはふさはしからぬ二人の美しい姿を立止つて眺めてゐたが、その時、今度は又殿堂の

奥の方から軽やかな靴音と、流暢な英語で話す聲が聞えて、と、みると大石壇の横の薄間がりからは脊丈の高い品のいい、西洋人夫婦と、それに日本人にしてはすらりとした洋服のよく似合ふ若い紳士が何事か熱心に語り合ひながらついと現はれ出て来た。

伊佐雄は思はずそつちへ腫を走らせたが、何と思つたかつか／＼と八重子の傍を離れてそのひと連れの方へ近寄つていきながら、いきなり、

「失禮ですが、貴方は清岡さんぢやありませんか？」と、聲をかけた。

と、若い紳士は吃驚したやうに腫を据ゑて此方をみまもつたが、急に聲を慄はして、

「お、今津さんでしたか。」と、云つたつきりちよつと帽子へ手をかける。

その會話を聞くと八重子は悸乎として、耳の附根から眞紅になつた。その若い紳士は、こんなところで邂逅しようとは夢想だになかつたあの清岡子爵であつた。夕闇のなかにほのめく白い顔をみてるると彼女はまるで夢のやうな氣がして、眼の前が茫としてゆくやうな心地にならずにはゐられなかつた。

伊佐雄は懐かしさうな聲音になつて、「ほんとに珍しいところでお眼にかゝりますなあ。い

つ此方へ？」と、訊く。

清岡子爵はやつと心の平靜をとり返したやうに落着いた調子になりながら、「實は一昨日から奈良へ來てゐるんです。あ、まだこの方を御紹介しませんでしたね。」と云つて彼は西洋人夫婦の方を顧みながら、場馴れた英語で伊佐雄を紹介した。西洋人達は愛嬌のいい、笑顔と身振りをして、伊佐雄と二言三言挨拶をかはしたが、その様子で見ると彼等夫婦は英國の富豪で、彼地で知己になつた子爵を訪ねて日本へ觀光に來たものらしかつた。

伊佐雄は又清岡子爵の方を向いて、

「それでいつ頃まで此方へ御滞在ですか？」

「さあ、まだよく分りませんが、もう二三日は居度いと思つてゐます。何しろこのメエーフィルドさんがひどく氣に入つてしまつたもんですから、他處へ廻る日程を變へてもこゝへるよと云ふことになりましたね、……。」

「さうでせうなあ。奈良は全く日本人でもいゝと思ひますからなあ。それで何方へお泊りです？」

「奈良ホテルです。」清岡子爵は簡短にさう云つてちらと八重子の方を偷視した。

十一の四

何も知らない伊佐雄はやがて八重子を眼顔で呼んで、

「あの、清岡さん。こりや私の妻です。結婚式の披露の時には是非お出でを願ひ度いと思つてお待ちして居りましたが生憎なことで残念でした。」と、いふ。

清岡子爵はつとめて平靜な顔をしながら、

「あ、あの時はまた態々御招待下さつて難有う。實は私先約があつて英國の大使館へいかなければならなかつたもんですから、……」と、云つて、今度は八重子の方を向いて、

「お目出度う。」と、はつきり云つた。

八重子は顔も得上げずに、黙つて禮をした。伊佐雄は嬉しさうに笑ひながら、

「お互に知つてゐる間柄でこんな風になるとまことに妙なものですなあ。は、は、は。併しどうかまた此の後もよろしく御交際を願つて置きます。」

清岡子爵は顔を背けて、

「私こそ、……。」と、口のなかで呟いた。

それから彼等は一連れになつてもう一巡殿堂の内部を觀覽したあとで、黄昏が低く掩ひかぶさつた堂の前の廣庭へ出た。伊佐雄は思ひがけない旅路で友と逢つた嬉しさに何くれとなく清岡子爵に向つて話しかけて、言葉の終りには必ずこんなところで出逢つたのは珍らしいと云ひ云ひしてゐた。

子爵は言葉少にそれに受答へして、なるべく話題を變へようとして西洋人の方へ話しを持ちかけていつた。

山門を出ると、そこにはホテルの人力車が来て待つてゐた。清岡子爵はそこでふと立止つて、
「ちや甚だ失敬ですが、こゝで失禮します。いづれ又東京でお眼にかゝりませう。」と、別れの言葉を云ふ。

伊佐雄は名残り惜しさうに、

「お伴れがあつてはどうも仕様がありませんなあ。ではお別れします。」と云つて、西洋人の方

へ歩み寄つて別れの握手を交す。彼等もなにかなしに懐かしさうな眼眸をして、堅く握つた手を幾度か揺り動かした。

「左様なら。」

「さよなら。」の聲は寒い風に吹き分けられて、やがて子爵は二人の西洋人のあとから伸を急がせて別れていつた。たつた二人になると、伊佐雄は樹陰を洩れる夕陽の残映のなかを歩きながら、

「ねえ、八重さん。あんたあの清岡子爵を知つてゐるだらう？」と、やさしく聲をかける。

八重子は眞面に見られるのを厭ふやうに、顔を背けながら、

「え、何處かの會で一度か二度お眼にかつたことが御座います。」と、低い慄へを帯びた聲で答へる。

伊佐雄はその横顔をみて、

「て、その時に紹介して貰つたの？」

「い、え、唯お眼にかつたゞけてすわ。」

「さうかい、それならもう少しよく紹介して置けばよかつた。あの人は芝居や繪が好きでよく帝劇やなにかへいつてゐるから無論私は知つてゐること、思つてゐたんだ。そりや残念だつたねえ。」と、心残りらしく云ふ。そして南大門から菊水までの暗い大路を歩きながら彼は清岡子爵が外遊してゐたことや、現在の境遇などを事こまかに語つて、彼と俱樂部で逢つて以來の關係をすつかり打明けて話した。伊佐雄と子爵とは英國で初めて交際しだして、それからもう三年の月日が経過してゐるのであつた。

八重子はそれを聞くと耐らなく胸が迫つて來た。清岡と逢ふ時には伊佐雄のことなどは殆んど話題にのぼらなかつたので、二人がそれほど以前からの交際であらうとは夢にも知らなかつた。そして漸次聞いてみると、なかには初めて彼女の耳へ入るやうな事實もあつて、彼女は今更ながら世の中の狭さをつくづく恨まない譯にはいかなかつた。一人は忘れ得ぬ戀人、一人は良人、その間がそんなに親しいとすると、此れから先彼女はどいふ風にして生きていかなければならないのであらうか？

十一の五

やつとのこととて草臥れた足を引摺りながら一の鳥居の傍から旅宿の菊水へ迎りつくと、夫婦はそのまゝ、ひと風呂つかつて、奥二階の十疊の座敷で夕飯にした。化粧に手間どる八重子は良人よりも半時ほど遅れて膳についたが、その間良人は東京から持つて来た葡萄酒の壺をあけて、仲居に酌をさせながらちびく飲んで待つてゐた。そして八重子が膳につく頃には酒の弱い伊佐雄はもう眼を濡ませて、さも幸福らしく微笑みながら彼女の湯上の美しい姿にじつと見惚れてゐた。

夕飯を済ますと、すぐ寢室へ入つて旅疲れを休めたかつたが、伊佐雄はこのまゝ、寢てしまふのは何んだかひどく惜しいやうな氣もすると云つて、更らに火鉢にかつかと炭火を熾させ、その前へ對向ひに坐つて、頻りに八重子にいろ／＼な話しを語つて聞かせた。八重子は心に絡はる憂ひや悲しみを押し隠しながら黙つて聞いてゐた。

少時たつと伊佐雄は漸次と感傷的な調子になつていつて、

『だけどねえ、八重さん、人間の運命といふものは全く不思議なもんだねえ。私はついこの一月ばかり前までは、まさかあんだとこんな間柄になつて旅へ出られようなどとは夢にも思はなかつた。今度の結婚だつて、私の方から申込みはしたものの、一時は到底成立しさうな見込みはなかつたんだからねえ。それを考へると私は何んだか不思議な氣ばかりしてならないんだ。』

さういふ思ひは八重子とても同じことである。寒い日のつゞいた師走の果ての幾日には、まさか伊佐雄とかうした新婚の旅へ上らうなどと、は夢にも思はなかつた。又そんなことは思ふさへ悲しかつた。そんなこんなを考へると八重子は又ひどく悲しくなつて来て、新しい鞆や、トランクを置いた身のまはりをそつと見廻さずにはゐられなかつた。

伊佐雄は八重子がそんな心持ちになつてゐるようとは少しも知らないので、益々幸福に酔つてゐるやうな顔色になりながら、

『併し今かうして考へると私は全く幸福な男だ。こんなことを云つちや笑はれるかも知れないけど、全く私はあんだを戀してゐたんだ。今だから白状するけど、私はあんだのお父さんに結婚の申込をした時には、もう全くどうにもならなかつたんだ。もしこの申込みが成功しなかつ

たら、もう總てを擲つて歐羅巴へ飛んでいつてしまはう。もう決してこんな日本なんかへ歸つては來まい、全くその時にはさう覺悟をきめてゐたんだ。それほど私はあんたに戀してゐたんだ。……』

伊佐雄はさう云ひながら漸次に熱狂的な歡びを眼に輝かして來て、

『併し、私はもうそんな寂しい心持ちになつて心や體を荒ませてしまふ必要はなくなつたんだ。總ては私を幸福な生涯の方へ連れていつて呉れた。つまりあんたは私を救つて呉れたんだ。私は今この世の中で一番幸福な人間になることが出來たんだ。こんな嬉しいことはない。』

伊佐雄はさういひながら感激の餘りつと手をのべて八重子の手をじつと握りしめた。そして燃えるやうな眼つきをしてものも云ひ得ないやうに彼女の眼のところを穴のあくほど見入つた。

八重子はどうしてもその感激のなかへ溶け込むことが出來なくて、心は却つて暗い方へ暗い方へと沈んでいつた。伊佐雄が熱狂してくればくる程彼女の心には反對に悲しさ、遣る瀬なさが湧いて、しまひにはともすると涙が一杯に湧いて來る。あゝもしこれがあの清岡子爵であつた

らと思ふと、八重子は到頭耐らなくなつて袂から手巾を取り出して顔を掩つてしまつた。

伊佐雄はそれを自分と同じ思ひにくれてゐるものと解したのか、やがて彼もうすく涙ぐんで來た。二人の涙には到底融合することの出來ぬ深い悲しい溝が横たはつてゐるのを彼はその時少しも知らないのであつた。

十一の六

伊佐雄はやがて又顔をあげて、

『私は自分の今の幸福な位置を自覺すればするほど、私の胸には今迄に一度も覺えなかつた勇氣や自信が湧いて來る。私はもうなんにも恐れることはない。私はあんたといふものを得た爲めにどんな困難にも打克つ事の出來る力を得たんだ。これからは唯一心に親父の事業を助けてどうかして一日も早く立派な自分の家を築きあげたい。ねえ、八重さん。もうかうなつたからはお互に一生懸命に力をつくして幸福な生涯を送らうぢやないか。ね、八重さん。……』と云つて、燃えあがる熱情に耐へられなくなつたやうに彼はいつの間にかかと八重子の肩を抱き

しめて、その美しい襟脚に唇を押し當てゝゐた。

八重子は良人のなすがまゝに身を任せてゐたが、しかし心は益々暗い方へ落ちてゆくばかりであつた。ともするとせぐり来る嗚咽は舌の先へ絡みついて、彼女はそれを抑へるのに渾身の力を注がなければならなかつた。

伊佐雄は少時すると又八重子の肩を抱いたまゝじいつと彼女の横顔に見入つて、

「ねえ、八重さん。それから又かうなつた以上はお互ひの間に少しでも秘密があつてはならないから、もしあんたが何か秘密らしいものでも持つてゐるならほんとに包まず隠さず打明けて話してお呉れ。私は又いろ／＼と力にもならうし、相談相手にもなつてあげるから、……さうして私の方には決してそんなものゝないことを今茲であんたの前で断言する。」

八重子はさう云はれるとひとしほ悲しくなつて、

「私だつてさうて御座いますわ。そんなものは決して御座いません。」と、消え入るやうな聲で云つたが、その語尾には伊佐雄には知れぬ悲しみがひゞいてゐた。

伊佐雄は満足らしく微笑んで、

「無論私だつてさう信じてゐる。併しこれからも秘密といふものが一番可けない結果を生むから、どうかそれだけは決してないやうにして貰ひ度い。そしてほんとに二人で幸福に暮らさうよ。」さう云ひながら伊佐雄は又熱情の勃發するがまゝ、に八重子の肩をしかと抱きしめた。

と、みると、障子の腰硝子の向うには低く窪んだ谷の彼方に奈良ホテルの燈影が明るい縞をなして遠く見えてゐる。そしていつの間に出たのか更け渡つた四邊には蒼白い寒月の光が冴えてその底に眠る樹立の影や、丘陵や燈影は何れも深海の底に封じられた幻影のやうな一様の薄明りを帯びてひつそりと静まり返つてゐる。じつと見てゐると、ホテルの建物はその月光のなかに朦朧と輪郭だけ浮いて来て、その客室で起る談笑の聲や、ピアノの音がかすかに洩れ聞えて来るやうな氣がする。

八重子はそれを眺めてゐると胸が張り裂けるやうな突詰めた思ひが迫つて来る。今彼處では戀しい清岡子爵がメエーフィールド夫婦を相手にどんな思ひで此の夜を過ごしてゐることであらう。それにしても東京を遠く離れたこんな土地でふいに思ひがけなくも彼に出逢つたのはどう考へても不思議でならない。運命の神はまだ二人を捨てないのであらうか？それとも飽くま

て二人を弄もてあそんで、遂つひには悲かなしい破滅はめつの底そこに追おひ落おとしてしまはうとするのであらうか？
抱だきしめられた肩かたから胸むねへ傳つたつて来る良人やまとの肌はだの温ぬくみをしみじみと感かんじるにつけても、思おもひ出だされるのは嘗かつてかうして清岡きよおか子爵しやくと長い歡喜よろこびの時ときを費つひやしたその夜よるの思おもひ出だである。今は互たがひに別わかれ別わかれて、もう二度と再またびさうした嬉うれしい時は歸かへつて来こないのかも知しれない。そして今いまホテルの客室きやくしつの窓まきから新婚しんこんの樂たのしい夢ゆめを封ふうじたこの菊水きくすゐの二階にかい座敷ざしきを打眺うちながめてゐる子爵しやくの心こころの中うちを思おもふと、八重子やへこは到頭たうとう我慢がまんが出来できなくなつて、かすかに咽ひび泣なきしながら手帛ハンカチで顔かほを隠かくしてしまつた。

遠とほい兵營へいゑいの方ほうで聞きえる喇叭ラッパの聲こゑとともに寂さびしい舊都きゆうとは漸次だんじと牙かえ渡わたつて来る月光げつこうに照てらされながら夜の眠ねむりに落おちてゆくのであつた。

十二の一

その翌日よくじつは唐招提寺たうせうだいじ、秋篠寺あきのしのじ、それからずつと西にしの京きやうの廢滅はいめつした寺々てら々に古藝術こげいじゆつの不朽ふくこうの匂におひを訊たねあるいて、もうそろ／＼夕陽ゆふひが生駒いこまの峰みねへ傾かたむきか、らうとする頃ころ、漸やうう菊水きくすゐへ歸かへつて来こ

た。歴史上れきしじやうの奇蹟きせきや、藝術げいじゆつなど、云いふものに対たいしてはさう大たいして興味きゆうみをもつてゐない八重子やへこは一日いちじつの見物けんぶつに疲つかれ果はて、旅宿りよしゆくへ歸かへつて来こると浴場よくじやうへいくのさへ大儀たいぎさうに肩かたで息いきをしてゐた。そして遠とほくに見みえるホテルの建物たてものを見ると、ふとしたことから唯譯たひわひもなく清岡きよおか子爵しやくのことばかりが思おもひ出だされて、戀こひしさ懐なつかしさは油あぶらのやうにじく／＼と心の底そこへ滲にじんでくるのであつた。やつと元氣げんきを振ふるひ起おこして入浴にふよくをすまして歸かへつて来こると、その時階下ときししたからは婢めいが上あつて来こて、座敷ざしきの入口いりぐちへ手てを支たへながら、

「あの、奥様おくさま。只今ただいま奈良ならホテルから電話でんわがか、りまして御座ござりますが、此方こちらへつなぎましても大事だいじ御座ござりまへんやろか？」と、云いふ。

その時座敷ときざしきで髪かみを分わけてゐた伊佐雄いさおはそれを聞きくとふつと顔かほをあげて、

「なに、ホテルから？」と、訝あやしむやうに聞き返かへす。

「へ、さうで御座ござります。なんやお名前なまを云いうてやはりましたけど、私わてらにはよう覺おぼえられまへんので、……」さう云いひながら婢めいは恥はづかしさうに笑わらつてゐる。

伊佐雄いさおはそれと聞きくと笑わらひながら八重子やへこの方ほうを向むいて、

「八重さん。きつと昨日のメエーフィールドさんだよ。何の用だらう？」と、云ふ。
 八重子はそれを聞いたゞけでもう眼を輝かしてゐた。
 伊佐雄は電話をつなぐやうに命ずると、自分で卓上電話の口へ出て、しばらくすると何か英語で話し出した。

八重子は息をつめてその會話を聞いてゐたが、それは何でもメエーフィールド夫人からの晩餐の招待らしかつた。そして午後にも一度電話をかけたが、生憎留守で用が足りなかつたといふやうなことを云つてゐると見え、伊佐雄は頻りにそれに辯解をしてゐた。そして子爵清岡といふ言葉は幾度となく繰返された。

やがて伊佐雄は叮嚀な調子で別れの言葉を云つて電話を切ると、そのまゝ、八重子の方を振向いて、嬉しさうに、

「八重さん。あのメエーフィールドさんから是非晩餐に招待したいと云つて來たが、行つてみようぢやないか。旅先で珍らしい外國の人達に逢ふのも愉快だし、それにあの夫人はなかく話しの面白さうな人だから何かまた話の種になるかも知れない。」と、云ふ。

八重子は唇だけで笑つてゐたが、清岡子爵も出席するのかとあけすけに聞くのも後護たいので、

「參つても宜しう御座いますが、でも着物の用意も御座いませぬし、……」
 伊佐雄は快調に笑つて、

「着物なんかどうだつて構はないさ。どうせお互に旅先なんだもの。それに先方でもどうかそのまゝ、て來てくれといつてゐるんだから、お茶に招ばれると思つていきやい、さ。清岡さんだつて無論そのつもりでゐるんだらう。」

八重子はさう云はれると初めてきつかけが出来て、

「あの清岡さんも御一緒なんですか？」と、訊く。

「無論さ、それなけりや私は行きやしないさ。メエーフィールドさんとは殆んど初對面も同じことなんだもの。」

八重子は妙にもじくしてゐるが、やがて伊佐雄に促されてとにかく行くことになつた。口や舉動では進まないやうな氣色を見せてゐながら彼女の胸の血はもう清岡子爵に逢ひ度さに喉

もとまで込み上げてゐるのであつた。

八重子はそれから一時間ばかりかゝつて化粧をした。それが済むともしもの時の用意にといつてトランクのなかへ入れて来た裾模様の襦袢を出して着たので、見違へるほど美しくなつた。その姿はひどく伊佐雄をよろこばせた。

十二の二

伊佐雄と八重子とは支度が済むと宿の俵で荒池の傍を奈良ホテルへ向つた。夕陽の名残りはすつかり空から消えて、天心から三笠山の頂きへかけて星が降るやうにきら／＼輝いてゐる。吹く風は頬を割くやうだつた。

後の俵に乗つた八重子は行手に當つて縞のやうに點るホテルの灯影をみると耐らなく胸が躍つて来た。そして今夜そこで清岡に逢ふといふことがまだ夢のやうに思へて、逢つたらどうしよう、どう云つて話しかけようといふやうなことは幾度考へなほしてもはつきり心に浮んで来なかつた。

俵はやがてホテルの門を入つて、長い坂路を玄關の方へ登つてゆく。そこには階段のところ、に若い給仕が立つてゐて、俵から下りる今津夫婦を丁寧に迎へながら、

『あ、メエーフィールドさんをお訪ねで……。』と云つて、そのまゝ二人を應接室の方へ案内してゆく。

手広い應接室には彼方にも此方にも卓子が置いてあつて、それを圍む椅子や安樂椅子の色や、カーテンの様子が明るい電燈の光に美しく映えてみえる。そして七八人の西洋人がその卓子へ座を占めて、雑談を交してゐるものもあれば、書物を出して讀んでゐるものもゐた。その室へ入つた刹那、裝飾品やなにかには日本風を十分に加味してありながら、とにもかくにも歐羅巴らしい心持が湧いてくるのであつた。

今津夫婦は隅の方の卓子へいつて、その安樂椅子と腕椅子とへ分れて坐つた。そしてしばらくの間ぼんやり待つてゐると、やがてメエーフィールド夫人は良人と腕を組んで扉のところから足音も軽く入つて来た。今津夫婦が立上つて會釋するのを見ると、夫人は先づ八重子と握手を交はしながら溢れるやうな愛嬌を唇のあたりに漂はせて、よく来てくれたといつて頻り

に嬉しさに歎待した。

八重子は可成熱達した佛蘭西語でそれに答へてゐた。

各自の挨拶が済むと、やがて夫人は今津夫婦を椅子へ坐らせ、伊佐雄をつかまへて頻りに話しかけた。日本愛好者といふよりも寧ろ日本狂に近い夫人は、熱心な口調で京都の美を説き、奈良の美を讃嘆し、いつ話しがつきるとも覺えなかつた。殊に夫人はこの奈良が氣に入つたらしく、大佛、法隆寺などは世界中で最も不思議な藝術の奇蹟だと云つた。

「實に不思議な、美しい郷國？」といふやうな言葉は幾度となく彼女の唇に繰返された。

伊佐雄はそれを聞くと自分の持つてゐる寶を讃められてゐるやうな感激を眼に現はして、一その言葉に適當な答へを與へてゐた。奈良は彼も殊の外好きなので、その語調は益々高潮に達してゆく。メエーフィールド夫婦はそれを又なく喜んだのであつた。

その話の半にひとりの給仕が入つて来て、何やらメエーフィールド夫人の耳へ囁いた。と、夫人は快活に笑つて幾度か合點いてみせたが、給仕はそのまま、室を出てゆく。

やがて給仕と引違へに又扉が開いてそこからは清岡子爵が輕快な脊廣服を着て、つかつかと

入つて来た。そして夫人に會釋すると今度は今津夫婦の方を向いて、
「昨日は失禮しました。」と、云ふ。

伊佐雄も八重子も椅子から立つて挨拶をした。

子爵はそのまゝ、夫人の隣りの椅子へ腰を下ろして、ポケットから金口の紙巻煙草を取り出して火を點けた。そしてじいつと卓子の上の灰皿を見詰めながら妙に陰鬱な顔つきをしてゐるが、やがて夫人に言葉をかけられると少しづつ、自分も皆の會話のなかへ口を入れて備さうにぼつぼつ話した。

清岡子爵はその日所用があつて、たつたひとりて京都へいつて、つい今しがた歸つて来たところなのであつた。京都には子爵家の親戚があるので、それを訪ねたのだと云つてゐた。

十二の三

それから間もなく又給仕がやつて来て、食堂の方の支度が出来たと報らせた。メエーフィールド夫人は眞先に立ち上つて、自分で先頭へ立ちながら皆を食堂の方へ案内していつた。

食堂には白い卓布に映える電燈の光が美しかった。温室もの、草花は小さな籠にもられて、その陰に置かれた玻璃器は銀のやうにちらちら輝く。何處かて蓄音器の管絃樂がまるで食卓音楽のやうにかすかに響鳴してゐる。

やがて食事は始まつた。メエーフィールド夫人は絶えず方々へ氣を配つてどうかして談話のきれないやうにと力めるので、食卓は漸次愉快な談笑の聲に包まれて來た。なかでも夫人と伊佐雄とは一番よく語つた。

話題は日本の古藝術から遠い昔時の文明、歴史といふやうな範圍まで擴がつていつた。メエーフィールド夫妻は日本に關する學殖も智識も可成り豊富に持つてゐるので、話は極めてしつくりと照應していつた。一寸した言葉の端にも深い意味を搜らうとするやうに夫人の態度は漸次と熱心になつていつた。

八重子は自分の出る出端がないので唯黙つてフォークやナイフを動かしてゐた。清岡子爵も自分は口を入れずに皆の言葉を味はふやうに會話の末々まで氣を配つて聞入つてゐたが、そのうちに彼の顔には異常な緊張がみえて來て、眼は不思議に輝いて來る。それでも子爵は口を切

らうとはしなかつた。

話題は漸次と轉々して、新婚した今津夫妻のことから日本の結婚制度や風習のことに移つていつた。新婚の幸福に酔つてゐる伊佐雄は一も二もなく結婚のうへからいふと日本在來の習慣が一番日本人に適合してゐるといふ説を固持して、それに對する細かい説明をメエーフィールド夫妻にして聞かせた。

夫人達は非常な興味をもつてその説に聴き人つてゐた。まるで違ふ異國の風習はどうしても彼等の興味を倍加させずには置かなかつた。そしてその説明がひとくぎりすむと、夫人は黙つてゐる清岡子爵の方を向いて、もしも未婚者としての彼の説が伺へるならばと云つて、笑ひながら彼の出馬を促した。

子爵は考へ深い眼つきをしながらじいつと卓子のうへの盛り花をみつめてゐたが、やがて重しく口を切つて、

『その問題に就いては、私は意見を發表する資格がありません。何故といふに私はまだそんなことを考へたことがないんです。』と、流暢な英語で答へた。

夫人は笑つて、

「併しそれはどうしても一度はお考へにならなければならぬ問題でせう。結婚といふものが我々の一生にどれほど深い關係をもつてゐるかといふことは賢明な子爵もよく知つて被居るだらうと思ひます。」

「それはよく知つてゐます。併し私は唯知つてゐるといふだけで、その價值や善惡を考へてみたことがないです。そんな問題は今私の思考のずつと彼方にあるんですから。」

夫人は又笑つて、

「子爵は御自分が若いと思つて被居るからそんな風にお考へになるんですね。若い時代には結婚など、いふものをさう重大な事に考へないものです。併し年が漸次と過ぎ去つてゆくにしたがつて私達は幸福といふものを考へます。幸福といふもの、價值を知らうと力めます。その時に私達はなによりも先に結婚といふものを思ひ浮べます。……」

伊佐雄はそれを聞くと、さも我が意を得たやうに、

「さうです、幸福の價值といふものはたしかに結婚を境として分れてゆくものです。私は夫人

の仰有ることに非常な興味を覚えます。」と、興奮した語調で云ふ。

子爵は伊佐雄の方へは眼もやらずに唯ひと言、

「私はさういふ風に考へることは出来ません。」と、陰鬱な聲で呟いた。

十二の四

メエーフィールド夫人はパンを掴みながら猶ほも言葉をついで、子爵に向つてその説明を求めたが、彼は少時すると少しづつ、煩さ、うな顔になつて、

「その理由は私には完全に説明する事は出来ません。私は結婚といふ問題を考へる前に先づ女といふ者に就いて考へなければなるまいと思ひます。夫人の前で失禮な申分ではありますが、私には女ぐらゐる不思議なものはないのです。私はどうかして女といふものを深く知り度くて耐らないんです。」と、云つて、その時初めて子爵は對向ひに坐つた八重子の顔をきつと見た。

八重子は思はず頬を染めて顔を背けてしまつた。結婚の問題はそれから先も種々に論じられたが、併し到頭誰れも斷案を下すものはなくて、

そのまゝ、話題は次へと移つていつてしまつた。

子爵はそれなり口を噤んでしまつて、もうそれからはひと言も口をきかなかつた。

食事は一時間ばかりで終つた。夫人は面白さうに頼りに饒舌りつづけながら、やつと食卓を離れたが、今度は私室の方へ珈琲の支度をさせたからといつて彼等を連れて廊下をすつと奥へ入つた自分達の居間へ案内していつた。

その居間からは三笠山や春日の杜が真正面に見え、市街の灯はまるで南京珠をぬきつらねたやうに北へひろがつて、荒池の水面がすぐ眼の下にほの白く見えてゐる。と、みると、いつの間にか月がのぼるとみえ、三笠山の頂線は蒼白く明るんで、何處かで小舎へ入りそびれた神鹿の鳴く聲が二聲、三聲牙えて聞える。

メエーフィールド夫人は自分の居間へ入ると、方々から買ひ集めて来た古美術品や、壁に懸けた繪畫などを良人とふたりでさも自慢さうに皆に示した。なか／＼鑑賞眼が高いのでそのなかには笑はれるやうなものはひとつもなかつた。殊に佛像のなかには随分高い金を拂つて買つたものもあるとみえ、金銅の小さな坐像などはすばらしいものだつた。

伊佐雄は食卓で飲んだ白葡萄酒やコニヤツクで頬を眞紅にほてらせながら頼に買ひ集められた品々を讚めて歩いてゐた。父親の嗜好に感化されて、少しは骨董品などに對する愛着心も持つてゐるので彼の讚辭は一々メエーフィールド夫妻を喜ばせた。それが又伊佐雄の興味を先から先へと導いていつた。

子爵はい、加減に皆の群を離れてたつたひとりて窓際へいつて、折柄三笠山の山頂にぼつと浮び出た寒月を眺めながら少時の間そこへ立ちすくんでゐた。何を思ふのか彼の眉は漸次と暗く悲しげに曇つて眼眸は力なく沈んで来た。

八重子は伊佐雄のすぐ後に引添うて時々話しかけられる言葉に義理だけの受け答へをしてゐたが、その實彼女の瞳は絶えず子爵の方へ惹かれてゐるのであつた。食卓にゐる時から彼女はどうかして子爵に言葉をかけようとは思つてゐたのだが、いざとなると氣が咎めてどうしても言葉が唇から外へは出てこないの、彼女はもどかしさに氣を焦々させてゐたのであつた。子爵の云つた言葉は一々針を打つやうに胸の底へ響いて、よくそれを嚙碎いて考へてみるとひとつとして涙の種ならぬはない。子爵の胸に鬱してゐる悲しみ、憤り、妬み、さういつたもの

が今子爵の姿そのものに象られて、一々八重子の胸へ悲しく滲みとほつて来る。その力は一刻に強くなつて、しまひにはいつともなしに涙がすうつと雙眼ににじみ出て来る。それを抑へようとすればするほど、八重子は切ない思ひに責められていくのであつた。

子爵はそんなこと、は露知らずにじつと立ち盡してゐたが、しばらく経つと何と思つたか露臺へ通ふ硝子扉を開けて、此方へは氣どられないやうにこつそり戸外へ出ていつてしまつた。

十二の五

メエーフィールド夫妻はひとわたり買求めた品々を伊佐雄や八重子に見せてしまふと、今度は室の眞中の卓子へいつて、その周囲の椅子へ皆を坐らせた。そして給仕が運んで来る珈琲を夫人は手づから皆に分け與へながら猶ほも先刻からの話題を追ひつゞけた。

八重子は聞いてゐても薩張り興味が湧いて来ないので、少時経つと到頭我慢がしきれなくなつて、壁に懸けてある繪畫をもう一度見直すやうな風をしながらそつと座席を離れた。伊佐雄も夫人も一心になつて語りつゞけてゐるので、格別此方へは注意を拂はなかつた。

八重子は足音を忍びながら窓際へ寄つていつた。そこから差覗くと戸外はまるで白晝のやうな月夜になつてゐて、空氣は氷のやうに牙え返つてゐる。と、みると、露臺のところには清岡子爵が半面に蒼白い月光を浴びながら欄に倚つてゐて、その雪白なカラーが何とも云へない陰鬱な色に輝いてゐる。そしてその瞳は何處を見てもか遠い町の方へ向つて投げられてゐる。

八重子はその姿を見ると耐まらなく胸が喘いで来た。我れとわが乳房をしつかりと抱きしめながら立つてゐるが、ともすると眼の前がぐらくと暗くなつて来て、遣る瀬ない涙は危く頬へ流れ落ちさうになつて来る。

子爵は八重子が窓のところへ立つて居るのをどうして知つたのか、少時するとそつと此方を振顧つた。その眼は月の光に白く輝いて、いつまでもじいつと此方を瞞めてゐる。

八重子はその眼眸のなかに何ものをも焼き盡くすやうな強い強い誘惑を覺えた。もうどうなつても構はないと思ふほど、切なさが胸を咬かして、彼女はやがて大膽にもその扉を開けて、そのまゝつかくと露臺の方へ出ていつた。そして扉をしめる時、一寸室内を振顧つてみたが、そこでは談話が益々高潮に達してゆくものと見え、誰れも此方を見てゐるものもなかつた。

八重子は寒い露臺へ出ると、態と月光のなかへ出るのを避けながら子爵から二三歩のところまで歩いていつた。そしてじいつと子爵の眼のところを見詰めたが、しばらくの間そこへ立ちすくんでゐたが、頭腦のなかは火のやうに燃えて、いくら抑へようとしても思はず知らず言葉が唇から迸出してゆく。

「清岡さん。しばらくして御座いました。……」それは彼女の唇から出た最初の言葉であつた。子爵は黙つて、それには答へなかつたが、やがてまるで痙攣でもするやうに両手をずつと前へ差し伸べながら、彼方へ行けといふやうな格好をした。

八重子はそれをみると耐へに耐へてゐた涙が一時に喉に溢れて来て、きつと嗚咽を嚙みしめながら體を慄はしてゐたが、やつと氣を取り直して、

「清岡さん。餘りて御座いますわ。餘りて御座いますわ。」と、涙聲で断れぎれに呟いた。

清岡はその様をみると危く此方へ近寄つて来ようとして、そのまゝ、何と思つたかあべこべに露臺の石段を庭の方へふら／＼と降りていつてしまつた。そして明るい月光の中をついと右に折れて、とみる間にもう植込みの間へ隠れてしまつた。

八重子はすぐさまそのあとを追はうとは思つたが、そればかりはさすがに氣が咎めて出来なかつた。激しい歎息は強い力で喉もとまで込み上げてきていくら足に力を入れてゐても體は宙に浮いたやうに、ともすると倒れさうになる。彼女は到頭そこにあつた藤椅子のうへへ身を投げかけて、手帛で顔を掩ひながら泣けるだけ泣いた。體ぢうの血潮は悉く涙に溶けて流れ出るかと思はれるばかり、その悲しさ、遣る瀬なさは際限がなかつた。

ふと氣づくとき、いつの間にか室の硝子戸は開いてゐて、彼女のすぐ傍には黒い人影が立つてゐる。何ごとか囁く聲は聞えてゐながら八重子にはそれが誰れとも分らなかつた。それほど彼女が興奮してゐたのであつた。

十二の六

「おい、八重さん。どうしたんだい。黙つてゐちや分らないぢやないか。」と優しく言葉をかけてゐるのは伊佐雄であつた。

八重子はわが良人と氣づくとき、はつとして顔を上げたが、涙ばかりがせぐりあげて急には言

葉が出て来ない。

伊佐雄は半面を月光に晒らしながら心配さうにじつと八重子の顔をみてるたが、やがて顔をちか／＼と寄せて、

「何處か體でも悪いんぢやないのかね。それならそれと云つて呉れないか。なにも隠すには當らないぢやないか。」

八重子はやつと我を抑へて、

「い、え、隠すんぢや御座いませんけど、私少し頭痛が致しますもんですから……。」と、慄へ聲で云ふ。

「頭痛がする？ふむ、そりやきつと煖爐が温かすぎたからなんだよ。それにしてもこんな寒いところへ出てるぢや可けない。清岡君はどうした？」と、伊佐雄は氣が、りさうに聞く。

八重子は態と苦しげに聲を落として、

「どう遊ばしましたか、私存じません……。」と云つて、又俯向いてしまふ。

「ぢや清岡君は此處にゐるたんぢやないかい？私は又あなたと此處で話しをしてゐるものとばか

り思つてゐるたが、……何處へいつてしまつたんだらう。伊佐雄はさう云ひながら月光の充み澄れた庭園を當てもなく眺めてゐるたが、やがて、

「兎に角八重さん。なかへ入らうよ。こんなところへ出てゐると凍えあがつてしまふ。さうして氣分が悪いやうなら、メエーフィールドさんにさう云つて、すぐに菊水へ歸らうぢやないか。折角の楽しい旅行に體ても悪くしちや大變だからねえ。」

八重子の胸には親切に云はれ、ば云はれるほど悲しさ、辛さが迫つて来た。何も知らない良人をかうして欺いてゐる、自然にさうした結果になつてしまつたとは云へ、八重子は何かしら自分が犯してゐる罪のやうな氣がしてならなかつた。その罪の苛責は彼女を反省させ、抑制させるよりも却つて、もうどうでもなれといふやうな捨て鉢な氣持ちの方へ彼女を追ひ落としていつた。

八重子はやがて伊佐雄に腕を執られて、又メエーフィールド夫人の居間の方へ歸つていつた。明るい電燈の光のなかへ出ると、彼女の顔色の蒼さが伊佐雄やメエーフィールド夫妻まで驚かして、彼等は八重子をそのまゝ、安樂椅子へ坐らせ、そのまはりへ集まりながらいろ／＼に勞は

つた。

今夜の手厚い饗應の禮を云ひ、東京での再會の日を約して、今津夫妻がホテルを出たのはそれから間もなくであつた。メエーフィールド夫人は良人と一緒に應接室まで送つて来て、幾度か握手を交はしながら、恙がない旅と、八重子の健康がすぐに恢復せんことを祈つた。今津はそれに丁寧な挨拶を返して、やがて八重子をせきたて、女關へ出ていつた。

子爵は庭の植込みへ隠れてしまつたつきり店頭姿を現はさなかつたが、それが八重子には耐らなく氣になつてゐた。俾てホテルの門を出るとき、彼女はそつとホテルの二階の方を振顧つて見たが、そこには數多い窓々に明るい電燈の光が一杯に射しか、つてゐるきりて、誰ひとりその窓から此方を見送つてゐるものもなかつた。

菊水へ歸り着くと、今津夫妻はそのまま、寢室へ入つて、これから先の旅路の話などをしながら疲れを休めた。良人の伊佐雄が間もなく寢入つてしまふと、八重子はやつと自分ひとりの世界へ歸つたやうな氣になつて、今宵の出來事を一々心に繰返してみた。新たな涙は又八重子の頬に流れて來た。そしてその晩の出來事は却つて彼女の思ひを募らせ、どうせ末は果敢なく終る

戀として、清岡子爵と自分との間を此のまゝに打捨て、置くことは到底出來ないと思つた。さうした考へから彼女はその夜、それとなく心の底に或覺悟をきめたのであつた。

十三の一

八重子達夫妻が西へ向つて新婚の旅に上つたその翌々日、磯谷家では民造が急に大磯の別荘へいくと云ひだした。結婚の準備やら何やらでさすがに民造も奔命に疲れて、唯安靜を欲するばかりの氣持ちになつてゐたので、幸ひ商會の方も手順よく整理が運んでゆく、それに當分は差迫つた所用もなさ、うなので彼は今度こそ出來るだけ長い日數を湘南の海岸でゆつくり暮らさうと思つたのであつた。そして歌子は無論一緒に行くことになる、ほかには小間使ひのお絹それに書生がひとり伴をすることになつた。

別荘へは朝から電話で通知がしてあつたので、彼等が着く頃には庭の掃除まできちんと出來あがつてゐた。早春の梅が眞白に咲きこぼれた窓をあけて、うら／＼と澄む海と空とを眺めてゐると、來馴れた別荘とは云へ民造は何とも云へぬ清新な心持ちを覺えずにはゐられなかつた。

單調な、それであるて何處か張りきつた樂みに充ちた別荘生活はやがて始まつた。歌子は話相手の姉もゐなくなつてしまつたので、殊更寂しい氣持ちにばかりひたつてゐたが、それでもどうかして父を倦かせまいとして、一心になつて彼を樂しませる工夫ばかりしてゐた。朝夕は海岸の散歩に誘ふ、時々は又自分で臺所へいつて、手料理の幾皿かを民造の膳に上せたりして父を歡ばせた。

夕暮になるとそれでもさすがに寂しさが別荘ぢうに迫つて來た。父の居間にたつたふたり膝を突き合はせて坐つてゐると、いつか話の種もなくなつて二人共長い間口を噤んでしまふことがあつた。そんな時、歌子は仕方がなしに樂しい新婚の旅に出てゐる姉のことを云ひ出して、今頃は何處を歩いてゐらつしやるだらうなど、その旅の模様を想像しては強ひて話題をつくつたりした。

別荘へ來てから三日目の夕暮、歌子はいつものやうに父を誘ひ出して海岸の方へ散歩に出た。黄昏の海を眺めてゐると冬が漸次と地上から消えて、あとには麗らかな春がすぐそばまで迫つて來てゐるのがはつきりと感じられる。民造や歌子の胸にもいろ／＼な紛紜が收まつて、暴風

一過の後のやうななごやかな氣持ちが流れてゐる。歌子は海へ出る度に、又再び彼等の一家のうへには幸福が歸つて來たやうな歡びを覺えるのであつた。

海岸から滄浪閣の方まで廻つて、今度は本町の通りを別荘の方へ歸つていつたが、停車場のすぐ傍まで來かゝると、その時丁度東京からの列車が着いたばかりのところ、下車した客は伸にのつたり、歩いたりして此方へ降りて來る。若しや見知つた人に出逢ひはしまいかと民造も歌子もそれとなく眼を配ばつてゐるが、ふとみると一番遅れてやつて來た一臺の伸のうへには思ひも懸けぬ武田の欽哉が乗つてゐる。大きなロングコートにくるまつて、前庇をおろしたソフト帽の下から眼ばかり出してゐるので、初は誰とも分らなかつたが、漸次と近寄るにしたがつて、歌子は彼よりも先にそれが欽哉であることを認めた。歌子はどうしたのか耳の附根から眞紅になつてゐた。

欽哉は伸上から歌子の姿を見付けると、さも吃驚したやうに眼を据えて、

「おう、歌子さん。」と、聲を懸けながら、初めて帽子をとつた。

歌子もそこへ立止まりながら伸のうへを見上げたが、欽哉はそのまゝ伸を止めさせて、

『どうもしばらくでした。貴女はいつから此方へ?』と、まるで豫想もしてゐなかつたやうな調子で云ふ。

歌子は呻に挨拶を返して、

『私、あの二三日前から参つて居りますの。』と、云つたが、その時ふと芳子のことを思ひ出したので、『貴方はあれからずつと此方で御座いますの?』と、訊いた。

家の混雑に紛れて忘れてゐたが、この大磯で病ひを養つてゐた武田の芳子は一時もうとても駄目だと醫師達から見離されたにも拘らず、又容態を持ち直して、此頃では大分快いといふ噂を歌子は風の便りに聞いてゐたのであつた。

十三の二

欽哉はさう訊かれると歌子の顔をみながら言葉を変めて、

『私、あれから實は、妹が持直したものですから一應農場の方へ歸つて、今日又出て來たんです。何んだか又妹の容態が悪くなつたといつて、電報を打つて寄越したもんですから。……』

歌子はそれをきくと眉を擧めて、

『まあ、またお悪いんで御座いますか。そりや可けませんわね。私も是非一度お見舞ひに伺ひ度いと思つて居りましたんですけど家の方がごたくして居りましたもんですから、……それでどんな御様子なんて御座いますの?』と、心配さうに訊く。

欽哉は聲を落として、

『私も電報だけなんて、どんな容態だかよく知りませんが、併しもう今度は愈々駄目らしいんです。此の前悪くなつた時の打撃が激しかつたんで、あれ以來めつきり衰弱が加はりましたからなあ。』と、慘ましさうに云つて、『兎に角私はこれで失禮します。どうかお暇がありましたら一度被來つて下さい。』と、云ひながらさも妹のことが氣に懸るやうにそ、くさ別れ支度をす

る。歌子も何んだか芳子のことゝが急に氣になつて來たので、

『あの、私も後程一寸伺ひますからどうかよろしく。』と、云つて、動き出した欽哉の俾へ挨拶する。

伴はやがて車上の人の『さよなら。』を残して、坂路を一散に駛り去つてしまつた。歌子はその後姿を見送つてゐたが、五六間先のところに父の民造がしよんぼり佇んで歌子の來るのを待つてゐるのを見ると、はつとしてそのまゝ、そつちへ小走りに走つていきながら、

「お父様。お待ちせ致しました。」と、態と笑ひながら云ふ。

二人はやがて肩を並べて別荘の方へ歸つていつたが、民造は暫らくするとやつと口を切つて、

「あれは誰れだ？」と、訊く。

歌子は笑ひながら、

「お父様、もうお忘れ遊ばしましたの。あれはそれいつぞや伊佐雄兄さまが被來つた時に海岸で逢つた武田さんの兄さまで御座いますわ。」

「うむ、司法省に居つたあの武田の息子か。」と、云つて、民造は考へ深い眼つきをしながら、

「なか／＼しつかりした男らしいなあ。今は何をしとるのだ？」

「あの今は北海道の山崎伯爵の農場の主任技師をしてゐらつしやるんですつて。」

「ぢや農學士で、もあるのか？」

「え、札幌の農科をお出なすつたんださうですわ。學校でも大變に御成績がよかつたさうで、なんでも農場を經營して被居る。傍、大學の助教授もして被居るやうな御話でした。」

民造は黙つて聞いてゐた。

歌子は別荘へ歸りつくまで欽哉の家の話や、重い病の床に就いてゐるその妹の芳子のことなどを父に物語つて聞かせたが、その哀深い武田家の零落のなりゆきは民造にも少からぬ同情を起させたのであつた。

別荘へ歸り着くと、もうそこらは夕闇に包まれたので、茶の間へ電燈を黙させ、二人はそこで夕餐の膳に就いた。夕暮になると必ず襲つてくる寂しさが又迫つて來た。民造は飯の前に例のごとく葡萄酒を用ゐるので、その間歌子はどうかして父の心持を浮かせようとして、頻りにさつきからの話題を追ひながらいろ／＼な物語りをつづけた。

その話の中途に、女關の方で誰れか訪ねて來たやうな聲がする。不思議に思つて耳を澄ますと、應接に出てゐた書生がやがて茶の間へやつて來て、歌子の方を見ながら、

「お嬢様。あの武田様からお使ひが俵をもつてお迎ひに參つて居りますが……？」と、云ふ。

歌子は悸乎として、

「伸をもつて？」と、云ひながらそのまゝ、箸を置いてしまふ。

十三の三

『どうしたんだらう、芳子さんがお悪いのか知ら？』と歌子は獨語のやうに呟きながらしばらくすると自分で女關へ出ていつたが、そこにはひとり年の老つた仲夫が寒さうに突立つてゐて、彼女の顔をみると叮嚀に頭を下げる。

その仲夫に聞いてみるとどうも芳子の容態が悪いらしく、茅ヶ崎の病院からも醫師が今しがたやつて来たといふ。歌子はそれを聞くと一刻の間もじいつとしてゐられないやうな氣がして、再び父の居間へとつてかへし、父の許しを得てすぐさま支出度をした。そして夕飯もおちおち喉へは通らないので、そのまゝ、放棄つて彼女は迎ひの俵にのつて芳子のゐる長島の別荘へ驅けつけた。

打續く松原のなかにある長島の別荘へ来てみると、門内の砂地には幾條となく俵の轡のあと

が亂れて、生籬越に見える廻り縁になつた座敷の明取には明るい燈影が映つてゐる。何となくそこらがざわついてゐるやうで、外から見たゞけても家のなかの混雜がそれと分るのであつた。歌子は俵を下りるとすぐさま女關へ上つていつた。そして取次ぎに出て来た別荘番らしい老爺に案内されて奥の間の方へ入つてゆくと、とつ、きの六疊には障子越しにひそ／＼人聲が聞えて、その次の八疊には芳子の病床が見えてゐた。病床の周圍には芳子の母や欽哉や醫師やそれから、東京の方からやつて来たらしい親類の人達が二人ばかり圓くなつて坐つてゐた。いづれも堅く口を噤んで、石像のやうに身動きさへしなかつた。ひと眼みただけでも芳子が重態に陥つてゐるのは分つて、歌子は先づ胸つぶる、思ひに打たれずにはゐられなかつた。歌子が入つていくのを見ると、芳子の母は眞紅に泣き膨らした眼をあげてさも待ち兼ねてゐたやうに、

『お、磯谷さんが被來つた。さ、どうぞずつと此方へ被來つて、……。』と涙聲で云つて、芳子の枕許の方へ彼女を招く。そして歌子が無沙汰をしてゐた挨拶をしようとするのを手で抑へて、

「まあ、何よりも先にどうか芳子に逢つてやつて下さいまし。もうさつきから頼りに貴女の被
來るのを待ち焦れて居りましたんですから……。」と、鼻を詰まらせながら云ふ。

歌子はそつと芳子の枕許へ居坐り寄つて、枕に顔を埋めてゐる彼女の顔を覗き込んだ。芳子
はもう此世に生きてゐる間も幾何もないと見えて、眼をつぶつたま、僅かに忙はしない不規則
な息を吐いてゐる。これが在りし日のあの芳子かと思はれるばかりに瘦せ衰へ頬も眼のまはり
もまるで穴のやうに落ち窪んで、色褪せた唇にはもう死の色が刻々に迫つて来る。

歌子は耐らなくなつて、せぐり来る涙を抑へながら、

「芳子さま、芳子さま。」と、呼んでみた。

何んの返事もない。

芳子の母はそれをみると顔を差しのべて、

「芳子、芳子、磯谷さんが被來つたよ。」と、泣きながら云つたが、その肉身の呼び聲は、今や
消えなんとする燈のやうな彼女の魂魄にも通じたのか、芳子はしばらくすると薄く眼を睜い
て力ない瞳を空にさまよはせながら、そこらを捜すやうな眼つきをした。

歌子は思はず又ひと膝のり出して、顔を近寄せながら、

「芳子さま、芳子さま。私ですよ、歌です。」とつゞけさまに云つたが、その顔がやつと眼に映
つたか、彼女はじいつと瞳を据えて、何か云はうとするやうに少し唇を動かした。併しもう
その唇も言葉を發するだけの力を持つてゐないのであつた。

歌子ははふり落つる涙を拭はうともしずに芳子の顔を見詰めてゐるたが、胸が迫つてもう口を
きくことさへ出来ない。これが永劫の別れになるのかと思ふと、歌子はいくら我慢しようとし
ても涙ばかりが溢れ出て来て、しまひには顔を掩つて激しく歎息した。だした。

芳子の母もそれに誘はれて又涙に沈んだ。

十三の四

武田の芳子が二十一期の春を名残に、果敢なく此の世を去つていつたのはその晩の十時であ
つた。歌子の見た時が最後で、それからはもう昏々と人事不省に陥つて、幾箇の注射も効を奏
することなく、彼女はさながら眠るがごとくに息を引取つていつたのであつた。

あとに残つた芳子の母や、欽哉の悲歎は端のみる眼も痛ましいほどであつた。長の病ひで、幾度か危篤の域まで陥つた病人ではありながら、この年月手鹽にかけた、けに肉身のものには却つて名残りが盡きないのであつた。

殊に芳子を自分の生命のやうに愛してゐた母親はまるで狂氣のやうになつて泣き悲しんだ。芳子を喪つてはもう此の世に生きてゐる瀬もない、いつそのまゝ、芳子と一緒にあの世へ行つてしまひたいなど、云つて、母親は疊の上へ身を投げ伏してひた泣きに泣いた。

さうした老いの繰言を聞くにつけても、歌子は芳子の母の心のうちを思ひ遣つて、慰めるよりも一緒に泣く方が多かつた。欽哉はさすがに取亂した母の様子を見兼ねて、涙ながらに宥めつ、慰めつした。その言葉には、たつたひとりの親を思ふ至情が溢れてゐて、朴訥な外見によらぬ親切な眞實さが、はたにゐる歌子の心にも沁みじみと迫つて來た。そしてその言葉を聞いてゐるうちに歌子の心には漸次とさうした思ひ遣りの深い、頼りになる男心がなつかしくなつて來て、こんな差迫つた場合だけにその感動は彼女の胸底深く刻まれていつたのであつた。次の間で親戚の人々が跡の始末を相談しはじめると頃には母親もいくらか落着いて來た。欽哉

は長の看護に疲れてゐるのと老體を氣遣つて、自分で彼女を寢間へ連れていつて、まるで子供でもあやすやうにしながらやつと寢かして來た。歌子は却つて取込みのなかに邪魔になつてゐるのも心ない業だと思つたので、やがて芳子の亡骸に最後の別離を告げて歸り支度をした。それを見ると欽哉は母親の寢間から歸つて來て、

「お宅でもさぞ御心配でせうから、お引留はしません。どうも態々有難う御座いました。妹も貴女にお眼にか、れたんでさぞ喜んだこととせう。」と、云ひながら又眼を濡ませてじつと歌子の顔をみる。

歌子は新しい涙に暮れながら、

「私、なんて申上げてよいやら……どうかおあとがお大事で御座いますから、お母様のお體に精々お障りのないやうに……。」と、云つて、口籠りながら「又明晩のお通夜には是非伺ひますから……。」

欽哉は涙の顔を背けて、

「有難う。まだあとのこととは何うなりますか分りませんが、葬式の日取なども定まり次第御通

知します。これからは急に寂しくなつて母もさぞ辛がるてせうから、妹が死にましても、どうか以前同様おつきあひを願ひます。』

『私の方からこそ、……』

歌子はそのま、別れを告げて玄關の方へ出ていつた。

欽哉は別荘までの夜道が危いといつて、態々自分で近邊の俣宿まで送つて来て、そこを起して俣を備つて呉れた。歌子はぢきだからといつて幾度か辭退したが、折角の親切を無にするのも心苦しいので、到頭その俣に乗つた。

『てはさよなら。又明日。』と云つて、歌子はそのま、別れてしまつたが、しばらくたつてその後を振顧つてみると、俣宿の軒燈の影には欽哉がしよんぼり立つて此方を見送つてゐた。

歌子の胸にはその時何かしら人懐かしいやうな感情が流れて來た。ほんの束の間ではあつたけれども、それはその後深い根ざしを彼女の心に残したのであつた。

十三の五

歌子が別荘へ歸り着いた頃には民造ももう待ちくたびれて寢室へ入つてしまつてゐたので、彼女はそこの枕許へいつて、芳子が亡なつたことを手短かに話した。民造は芳子に直接見知りはないが、そんな若い身空で此の世を去つてゆく哀れさを沁々惜しんだ。そしてあとに残された老母の心のうちを思ひ遣つて、歌子にも體だけは大事にして呉れと幾度か繰返して云つた。

その晩、歌子は臥床へ入つてからもなかく寝つかれなかつた。ともすると芳子の短い一生が繪巻のやうに思ひ返されて、漸次と不遇に陥つていつた徑路が今になつてはつきりと心に映つて來た。あゝ、可哀な身の上だと思ふほど傷ましさは胸に迫つて、彼女の夜着の襟はしとくに濡れてきた。そして欽哉のことを思ふと、亡なつた芳子の一生が悲しまれるだけに、彼に對してもまるで別な情感が湧て來るのであつた。

その翌晩はお通夜だと云ふので、歌子も夕方から長島の別荘へいつた。前の晩來てゐた親類の人達は東京へ引上げて、親しい家の奥さんや芳子の父が在世中に世話をした人達が三人ほど東京から來てゐた。芳子の亡骸は枕の向きをかへ、白布で掩はれて、倒さ屏風を引廻したなかに寂しく横たはつてゐた。その前へ心細げにゆらく御燈明と線香を供へながら六人ばかりの客

は涙に打濕つた通夜の營みをした。

話は亡き人の生ひ立ちから始まつて病氣に罹つてからの日常生活まで一々事細かに語られた。芳子の母は思ひ出すことゝもが何ひとつとして涙の種でないものはないやうに、頻りに愚痴ばい言葉で掻口説いてゐたが、それをみてるると悲しみは殆んど彼女の心を嚙碎いてしまふのではあるまいかと思はれるほど深くなりまがつてゆくの、欽哉は幾度かはらはらしながらどうかして話題を換へようと力めた。

欽哉は到頭我慢が出来なくなつて、

「お母さん。もうそんな話は止さうぢやありませんか。いくら泣いたつて今更芳子が歸つて来る譯ぢやなし、そんなに泣いてもし體でも悪くしたら却つて芳子の遺志に背くやうなものぢやありませんか。それよりももう今夜ひと晩の名残りだ。何か面白い話でもして、芳子の靈魂が何を思ひ残すこともなく、行くところまで行ける様にしてやつた方がいくら佛のためになるか知れやしません。」と、沈んだ聲で云ふ。

母親はそれでも涙話をやめなかつた。

欽哉はやがて歌子の方を向いて、

「ねえ、磯谷さん。何か面白い話をしようぢやありませんか。」とは云つたが、その眼は涙に濕んでゐる。それでも彼は強ひて笑ひをつくりながら、

「さう云へばつい此頃貴女のお姉さんは結婚をなすつたんださうですな。僕は一寸新聞で拜見したばかりなのですが、その後どうなすつて被居いますか？」

歌子は態と氣を張りながら、

「あの、只今京都から奈良の方へ參つて居りますの。もう近々に歸つて參るだらうと思つて居りますけど、……。」

「ふむ、新婚旅行ですな。」と、欽哉は笑つて、「京阪地方は全くだすな。僕は二三度しきや行つたことありませんけど、それでも奈良や京都は忘れられません。そこへいくと殺風景なのは僕の今ある北海道ですな。三笠山や東山を見た眼にはまるで別な國へいつたやうな氣がしますからなあ。」

歌子はつひ引入れられて、その北海道の話が聞き度さに、

「なんでも大變に寂しいところだつて云ふお話は伺つて居りますけど、私共にはまるで想像もつきませんわ。今頃はさぞ雪が深いんで御座いませうねえ。」
 欽哉は話のしほを得て、
 「深いですとも、そりや全くお話しになりやしませんよ。丁度僕が今度此方へ出て来る晩がひどい吹雪でしてねえ、小樽から函館へ来る道の俱知安なんて云ふところは四尺から積つてゐました。……」

十三の六

「まあ、四尺も積もつて居りますの。そんなお話を伺ふと私達は恐くなりますわ。」歌子はさう云ひながら聞き入つてゐる。平常から文學書類などを耽讀してゐるだけに、彼女は總て變つたものに對する好奇心を多分に持つてゐるのであつた。

欽哉はそれが嬉れしさに何かと面白い話題を考へながら、

「全く殺風景といへば殺風景ですが、併しそれと同時に又北海道には内地で見られないやうな

面白い生活も澤山ありますなあ。僕等の様な粗野な、むき出しの人間には北海道が一番適してゐるんです。廣い牧場で馬や牛を相手にしたり、又蒸息の立つやうな自然を耕して、それへ一粒一粒麥や米の種を植ゑつけてゆく。人間といふもの、本然から考へると此れほど眞實な生活はないのですからなあ。そりや都會もい、てせう、文明もい、てせう、併しそんなものは好く出来過ぎてゐるだけに餘計な虚偽が多い。そこへ行くと自然は馬鹿馬鹿しいほど正直で、決して嘘といふものを吐きませんからなあ。僕達は自然にさへ信頼して、自分で出来るだけの勞力を擲つてばこれ程安全な生活はないと思ふんです。僕は何よりも眞實といふとを一番愛しますからなあ。」
 歌子は男らしい眉に溢れる眞率な色をうつとり眺めながら聞き入つてゐたが、やがて、
 「でもそんな生活をして被居つたら、嘸お寂しう御座いませうね。雪が降つて畑は其下へ埋つてしまふ、戸外へ出るには道がない、私達からそれを考へると考へた丈でも心細くなりますわ。」
 「そりや寂しいには寂しいです。併しその寂しさは決して無益な寂しさではないんです。私達は長い冬の間につき春の準備をして置きます。春になつたらどうして自然を征服してやらう。どうしたら一粒でも多く收穫を得ることが出来るだらう。そんなことを實地にも又理論的

にも考へてみます。それからいろいろな理想や希望や期待が生れて來ます。その樂しみが私達の生活をなると単純な、そして人間らしい歡の方へ連れていくんです、私達百姓はそれだけで十分満足してゐるんです。』

歌子はその言葉が、一々自分の胸へ共鳴していくのをはつきりと感じた。さうした眞率な考へを持つて生活してゐる人の眞實の生活状態はどうであらう、春が長い冬を追ひのけて、大地には満目の緑が漲り渡つて來る頃になると、その人達の瞳はどんなに男らしい光に輝くことであらう。奸詐、詭計、嫉妬さうしたもの、微塵もない純潔な生活、それは彼女が常に夢想して止まないところであつた。殊に姉が結婚する當時の紛紜をみてからは妙に世間の底に流れてゐる虚偽が淺猿しくなつて、はつきりこれとは考へなかつたけれども、彼女は何かしらさうした、純潔といふやうなものを空想してゐたのであつた。そして芳子の死は歌子に一層深い感銘を與へて、朝に生き、夕に死する人間の世の果敢なきがしみ、悲しまれると同時に、何かに頼り絶つて生きていき度いと思ふ切なる心が彼女の胸にも芽ざしてゐたのであつた。そこへ丁度この欽哉が現れて來た。

欽哉は漸次と我れながら話の興趣に乗つて來て、北海道の春の美しさを次々と物語りだした。歌子はまるで詩を讀んでゐるやうな心持ちで胸にさまざまの空想を描きながら聞き惚れてゐた。芳子の佛前では僧侶が又讀經をはじめた。若くして世を去つた魂が恙もなく彌陀の淨土へいくやうに、その經文はまるで佛の徳を讃嘆する音樂のやうに陰々と斷續していつた。通夜する人々の眼には又新たな涙が湧いて來た。心細げに立騰る線香の烟は一柱の絲のやうにゆら／＼とゆらめいて、僧侶の叩く鉦の音もいつか悲しく打沈んでくる。歌子は死といふことを深く深く考へながら頻りに涙を拭いてゐた。

十四の一

武田親子はその翌日、芳子の亡骸を海岸の松原のなかにある火葬場で茶毘に附して、その遺骨をもつてすぐさま東京へ引上げてしまつた。そして、それから一週間ばかり經つと東京の方の家はすつかり片附けて、欽哉は母親を連れて北海道の農場の方へ歸つていつた。老母ひとり東京へ残して置くことも出來ないので、欽哉は無理とは思つたが他にどうすることも出來ず

到頭彼女を凍雪の國へ伴つていつてしまつたのであつた。歌子は欽哉からの手紙ではじめてそれを知つた。

京阪の地へ新婚旅行を試みてゐた今津夫妻は一週間の豫定が三日ほど延びて十一日目にやつと歸京した。その歸途是非大磯へ立寄ると電報が來てはるたが、伊佐雄は會社の方の用で急に東京へ歸らなければならなくなつたので寄るといふ日には國府津から電報で斷わつて來て、そのまゝ、急行列車で大磯を通過してしまつた。

民造達の方はそれから四日ほど遅れて歸京した。歸京すると久しぶりて里歸りやら、親類の別披露やらが毎日のやうに續いて、民造は近頃にならない賑やかな思ひて日を送ることが出來たのであつた。

八重子は旅疲れてか、歸京するとすぐに二日ほど寝たが、それからは何となく顔色がすぐれなくて、歇斯的利性な神経痛なぞが時々起つた。併しそれも大したことはなかつた。

磯谷の家も今津の家もそれからは兎に角見たところでは幸福に平和にその日その日を送つていつた。冬はいつしか春になり、その春は又夏に移つていつた。そしてさうかうするうちに秋

も過ぎて、一年の月日は夢のやうに過ぎ去つてしまつた。

小石川にある今津の新宅でそろ／＼面白くない噂がたちはじめたのは伊佐雄が八重子と結婚してから丁度一年あまり経つた後のことであつた。その間にも新夫婦の間には幾度か面白くないことがあつたのだが、その都度伊佐雄は八重子を愛する餘りに自分の方から折れて出て、いつもどうにかかうにかその場が納まることになつてゐた。それが却つて悪い結果を齎らして、八重子は漸次と増長するにつれ心が荒んで我儘になつてしまつた。時々歌子までがあんまりだと思ふやうなことが往々持ち上つて來た。

面白くない噂といふのは他でもなく、今津の新宅では夫婦の間が益々不和に傾いていくといふことであつた。その原因は聞くも忌はしい姦通沙汰で、八重子と清岡子爵との間の關係が愈々あからさまに伊佐雄に暴露して來たのであつた。伊佐雄とても教養のある紳士のことゝて、さまかあの高潔な清岡子爵と八重子との間にそんな忌はしい關係があらうとは信じなかつたが、二人の間に密々て手紙の交換などが行はれてゐるのを見ると、さすがに何かしら疑惑を持たない譯にもいかなかつた。伊佐雄はそのために長い間苦悶した。それがいつか外面にも現は

れて来て、八重子との間はともすると圓滑を缺くやうになつていつた。八重子の我儘な振舞ひもその不和を助ける原因になつていつた。

伊佐雄はたとひ疑惑はもつてゐても、それで八重子を責めるやうなことはしなかつた。飽くまで紳士的に口を籍して、じつと事のなりゆきを凝視してゐた。そしてそのことが心に宿り出してからは八重子を憎くいと思ふことも屢々ではあつたが、それよりも彼女に對して反對に一層強い執着を覺えるやうになつていつたのは事實であつた。たとひどんなことがあつても、もう今となつては八重子を捨てることは到底出来ない、出來得る限り自分を屈して八重子に反省させ、どうかして彼女を自分の手から離したくない。さうした未練な心持ちは伊佐雄に益々激しい苦悶を與へていつた。

八重子はどういふ心持でゐるのか、端の眼には唯現實的な物質に對する慾望に身を打任せて、この世を面白可笑しく暮らしていかうとしてゐるやうにばかり映つた。身には高貴な装身具を纏ひ、化粧に憂き身を費して、毎日のやうに華やかな空氣のなかばかり歩き廻つてゐた。流行を趁ふ貴婦人の群、さういつた階級に彼女は漸次と入つていつた。そしてその群のなかで燕の

やうに噪いて廻る人となつていつた。それに對する莫大な費用は伊佐雄の手から出るばかりでは到底足りないので、磯谷の家からも月々多くの仕送りをしなければならなかつた。民造は黙つて云ふがまゝにそれを出してやつた。

十四の二

それと同時に、磯谷家でもその一年の間にはさまざまな出來事があつて、事業の方は可成りな好成绩をもつて整理が進んでいつた。沈没した勢洋丸に對する海上保険との爭議も八重子が結婚すると間もなく協定が出來て、保険金の大部分は取れる、それに勢洋丸はとて浮揚の見込みがないといふので水底に横たはつたまま、競賣に附せられてしまつたが、鐵材のなかには大分引揚げられたのもあつて、それが又多少の利益を磯谷商會に與へた。

秋田の鑛山の方も一年の間に以前にも増した設備が出來て、盛んに探掘を初めた。それといふのも民造が鑛山の荒廢するのを恐れて、自分の利益は投げ出して、鑛山全部を新たに株式組織に改め、その資金に依つて着々復舊工事に取懸つたからで、もう一年の終りには産額のうへ

にも以前より一層進展を示してゐたのであつた。

大阪の方の店も一時は閉店したが、半歳の後には又どうやら組織更へをして再び開店の運びになつたのであつた。そして磯谷の資産も實質の上では半ば以上減じてしまつたが、それでも此れから先の方針一つで、どうにでもなるだけの安全な位置にまでやつと漕ぎつけたのであつた。そして其整理の陰には今津の力が多分に働いてゐたとは忘れろとの出来ぬ事實であつた。併しさうはなつたもの、磯谷家は決して油断の出来ない位置にあつた。ひとつ方針を過れば今迄の整理も水の泡になつてしまはなければならぬ、民造の努力奮勵を要する必要は以前よりも倍加して、彼の責任は益々重くなつて來たのであつた。

二月の紀元節の夜は、貴族、政治家、實業家なぞの間の唯一の社交機關である交友俱樂部の新築披露の大夜會がその新築された建物の大宴會場で開催された。伊佐雄夫婦も無論出席しなければならぬ人なので、八重子はもうその日の午後から身支度にかゝつてゐた。漸次と贅澤三昧になつていく彼女は髪をひとつ結ふのにも銀座の美顏術師や特別の髪結を呼んで結はせるといふ風なので、湯から上つて身じまひが済むまでには長い時間が要る。それがすむと今度は

着換へが始まつて、装身具などもあれでは可けない、これでは可けないとその選擇に一時間とかゝる始末であつた。

すつかり身ごしらへの出來たのはもう開會の時間に間もない六時であつた。化粧室から電燈のあか／＼と點つた女關先へ出て來たときの八重子はまるで女王のやうな誇りと美しさに輝いてゐた。髪には三顆のダイヤモンドを鑲めた自慢の髪針をさし、濃く化粧つた顔には頬紅が美しく匂つて、濃い古代紫の地に光琳好みの早春の模様を繡ひとつた襲ねに、花鳥の細かな蜀紅錦の帯を胸高にしめた姿は常に見馴れた伊佐雄さへうつとりする位であつた。そして、手をあげると香水の薫りは四邊にゆらめいて、その繊細い指には金に飽かした指環の寶玉がきらりと光る。じつと見てゐると眼が眩ふしくなるやうなすばらしい容姿であつた。

伊佐雄夫婦は支度が済むとやがて女關先へ來て待つてゐる自動車へ乗つた。それは結婚の記念に今津の父から贈られたもので、英國製の大型の可成りな車であつた。

自動車は間もなく馬車廻しの小砂利を蹴たて、一散に駛り出した。伊佐雄は八重子と並んで坐つてゐながら偶に口をきくばかりであつた。此頃では邸にゐてもさう打解けて話をするこ

もないので、伊佐雄は何處へいつても寂しい思ひをするばかりであつた。八重子が美しく装ほへば装ほふほどその寂しさは深くなつて、或時は耐らないやうな嫉妬さへ覺えるのであつた。その自動車のなかでも彼は又いつものやうな苦悶を繰返さずにはゐられなかつた。自動車は山の手の町の坂を下つて、宮城の外濠の傍を驀地に駛つていつた。眞白に輝く前燈は暗い街路を劈いて漸次と交友倶楽部のある日比谷の公園の方へ近づいてゆく。

十四の三

新築の成つた交友倶楽部はルネッサンス風の立派な三層樓であつた。階上には三百人以上の大饗宴を催すことの出来る大廣間があつて、その他の設備も最新式で殆んど間然するところがなかつた。

正面の階段の登り口には綠葉で飾つた石柱の傍に幹事がゐて一々來客に會釋しながら階上の接客室へ案内してゆく。接客室は幾つにも分れてゐて、そこに入つてゐる人達の色彩も自然といろ／＼な集團に分れてゐた。

伊佐雄達夫妻の案内されていつた室には明るい電燈の輝きのなかに貴族院議員、政治界の名士、大頭の實業家といったやうな人達がごちや／＼に入つてゐた。その人込みのなかには今津の父や民造もゐる。そんなところの好きな石坂子爵、松浦子爵、それから入江、寺出、大河内などの面々もゐる。彼方でも此方でも煙草の煙と談笑の聲が賑やかに起つて、政治問題を論じてゐるものもあれば、銃獵の話をしてゐるものもある。さうかと思ふと芝居の新狂言の噂や俳優の月旦をしてゐるものもある。その話聲はざわ／＼と渦巻いて、浮影をした白堊の天井の方へ消えてゆく。まだ少しも汚れてゐない壁や窓懸けや、新調の卓子椅子などがその集團を一層派手に見せた。

伊佐雄達は方々を挨拶して廻つたが、民造のところへ來るとそこへ云ひ合はせたやうに一家のものが落合つてしまつた。その日は歌子も盛装して父に連れられて來てゐた。伊佐雄達はそのまゝ、そこへ立つて皆と話をしてゐた。

群衆のなかではふとすぐ間近かて、

「おい清岡君、今日は馬鹿に遅いぢやないか。は、は、は、いつもの君に似合はんねえ。」と、

云ふ聲が聞えたので、伊佐雄は思はずそつちへ眼をやつたが、そこには今來たらしい清岡子爵が石坂や、松浦や、大河内に取圍まれて頻りに挨拶をしてゐる。伊佐雄も黙つてゐる譯にはいかないので、そのまゝちよつと頭をさげて彼の方へ挨拶した。

子爵はしばらく逢はないうちにまるで見違へるほど寝れてゐた。頬の肉は薄くなつて、美しい眼までが妙に陰鬱になつてゐる。そして燕尾服を着た肩つきが何處となく寒さうだつた。子爵は皆の云ひかける言葉をひとり受けて、

「いや、どうも遅くなつて失敬した。僕少し用があつて、二三日前から京都の方へいつてゐて、實は今朝歸つて來たばかりなのだ。」

石坂はそれを聞くとにや／＼笑ひながら、

「清岡君、京都とはお娛しみだね、は、は、は、。いくら隠しても駄目さ、僕は少し聞き込んだことがあるんだから、……なあ、大河内君。」と、大河内の方へ振り返る。

大河内も意味ありげに笑つて、

「うむ、あれか？は、は、は、。清岡君、君は石坂に大變なことを押へられてゐるんだぜ。早く

手を廻して買収して置かないと容易ならぬ事件になるかも知れないよ。」

清岡は強ひて笑ひながら、

「大變なこと？」と、訝しむやうに聞きかへしたが、「一體そりや何んだね、僕にはまるで見當がつかんが……。」

「そりやさうだらうとも。君自身がまさかさうだとも云へんからねえ。」石坂は焦らすやうな顔になつて、「併し早晚それは知れることさ。まあ安心し玉へ。僕は斷じて秘密を守つて上げるから、は、は、は、。他へさへ知れなけりや何んでもないさ。その代り事件が進行したら僕は君が十分な報酬を受ける必要がある。もしそれを約束して呉れなければしかたがないから何んかの機會に皆にその秘密を暴露してしまふのさ。は、は、は、。」

子爵はそれを聞くと急に臆病な眼つきになつて、じつと石坂の眼のところを見た。

伊佐雄は何氣ない顔をしながらも、體中が耳になつたやうに一心になつてその話を聞いているた。

十四の四

清岡子爵はしばらくすると新しい葉巻に火を點けながら、

「どうも分らないなあ。一體僕自身に關係したことなのか、それとも他人が關係してゐることなのか？」と、さも氣懸りらしく訊く。

石坂はちら／＼八重子の方を偷み、ながら、

「そんなに氣にするならいつそ此處で話さうか？併し此處ぢや君の迷惑になりやしないかと思つてね。」

「いや、何も迷惑になることはないさ。僕にはそんな覺えはないもの。」

大河内は又側から口を出して、

「は、は、は。清岡君もなか／＼手強いねえ。そんなことを云つてゐるとあとで困るよ。は、は、は。」

石坂は事を好むやうな眼つきをして、皆の顔をひとわたり見廻したあとで、

「ねえ、君、兎に角ヒントだけ與へようぢやないか。ね、清岡君。實は他のことぢやないのだ、君は近いうちに或る貴婦人と結婚するといふ噂があるぢやないか。その用で東京と京都の間を往復してゐるといふ話だが、どうだい、當つたらう。」と、さも得意げな顔をする。

清岡は苦笑を洩らして、

「笑談ぢやない、誰れがそんなつまらんことを云ひ觸らして歩くんだらうねえ。そんな馬鹿なことがあるもんか。」

「ぢやそれは虚構の事實だといふのかい？」石坂は乗り出して訊く。

「無論だとも。僕はまだそんなことを考へたこともないのだ。」

さつきから黙つて笑ひながら聞いてゐた寺田はふいと口を出して、

「清岡君が結婚をするんだつて？そりや嘘だらう。清岡君は有名な獨身主義者ぢやないか、もしそんな事實があるとすりや大問題だ。は、は、は。」と、皮肉な調子で云ふ。

石坂はそれを抑へるやうに、

「寺田君、君には發言權はないよ。僕はそのことについて随分いろんなことを聞き込んでゐる

んだ。清岡君の秘密はちやんと此の手のなかへ握つてゐるんだからねえ。』
 皆は二人の會話を面白さうに聞きながら、清岡の一舉一動に注意してゐた。
 伊佐雄はふと耳に入つたその話が何か八重子に關係があるやうな氣がしてひどく不愉快な心
 持ちになつたので、このうへ何か自分に疑惑を起させるやうな事實を聞くのが厭さに彼はそつ
 とその群を離れて、室の隅の方へいつて、そこからそれとなく皆の様子に氣を配つてゐた。
 皆は時々高笑ひをしながら頻りに談笑してゐたが、思ひ出したやうにこつそり八重子の方を
 偷み、る彼等の眼光は嫉妬と羨望に燃えてゐるやうに見えた。そのなかの大部分は嘗て八重子
 の湯仰者で、なかには求婚をしたものさへゐるので、伊佐雄の身にすれば得意な誇りを感じる
 のだが、それでも彼はそんな心持ちよりも却つて妙に不安な、一種の恐怖に似た感じを覺えず
 にはゐられなかつた。事のなりゆきがかうなつて來てみると、八重子が何を考へてゐるか、何
 をしてゐるかそれがまるで分らないので、伊佐雄の苦悶は事々物々に對して一層深くなつてゆ
 くばかりであつた。
 少時すると清岡子爵はつまらなさうな浮かぬ顔をして談笑の群を離れていつた。何處へいく

かと思つてじつと注意してゐると、彼はそのまま、一三人の人と挨拶を交はしたあとですうつと
 室を出ていつてしまつた。

それと同時に伊佐雄のところへは取引のある銀行の専務達が集まつて來たのでそつちへ氣を
 取られて、いろく雑談を交はしてゐるうちにいつともなしに清岡のことも打忘れてしまつた。
 ふと氣づいて又もう一度石坂達の方をみると、すぐその傍にゐた八重子は何處へいつたのか
 影も形も見えなかつた。

十四の五

八重子の姿がみえなくなると、伊佐雄の心には猶一層深い不安が迫つて來た。ひよつとした
 ら何處かで清岡と逢つてゐるのではあるまいか。この公開の席上でもしそんなことがあつたら、
 それこそ自分にとつてはこのうへもない耻辱である。さう思ふと伊佐雄はじつとしてゐられな
 いほどもだくして來た。

やがて彼は自分でも端したないとは思ひながらどうしても我慢が出来ないので、そのままな

るべく人目に觸れないやうに室を出ていつた。そして四つある接客室を一々それとなく捜して歩いたが、どこにも二人の姿は見えない。

益々不審になつて、伊佐雄は激しく突きあげて来る胸を抑へながら廊下をうろくして歩いてゐるが、その時ふと見ると突當りの露臺のところに誰れかの人影がちらりと見える。こんもり葉の繁つた棕櫚竹の鉢物の影になつてゐるので、初めのうちは誰れとも分らなかつたが、よく見るとそれは見覚えのある清岡の洋服姿である。はつと思つて伊佐雄はそのまゝとある扉の陰へ身を隠して、猫のやうにじつとそつちの様子を窺つてゐるが、その時彼の眼には露臺の出口の硝子扉のところから古代紫の金糸の光る裾模様が少しばかりこぼれ出てゐるのがはつきり映つた。

伊佐雄の胸は早鐘を撞くやうにとつとと躍つて来た。今二人は吹く風の冷たい露臺のうへへ人目を忍んで逢曳をしてゐるのである。それにしてもこの多人数の眼が動いてゐる會場で、實に大膽なことをするものだと思ふと、彼は怒心頭に發して来た。もし彼の掌中に短銃があつたならば、忽ちその露臺へ向けて二發の彈丸を發射したに相違ないほど彼は激しく興奮して来た。

彼はふらくと眩迷を覺えながら思はず露臺の方へ歩いて行かうとした。その時、彼の心にはやつと自制力が湧いて来て、我れながら恐ろしいことだと思ひ直しながら彼はそのまま、くりりと踵を返してさつきの室へ歸つていつた。そしてその隅にある安樂椅子にぐつたり身を投げ懸けながら幾度か切なさうに嘆息を吐いた。

伊佐雄の心には漸次と悲しい思ひが湧いて来た。口惜さ腹立たしさは時とともに静まつて、あとには鉛のやうな苦悶だけが澱んで来る。彼と清岡の關係、さういつた理智的な考へは次第に伊佐雄の心を抑へつけては来たが、それと一緒に彼の眼には薄く涙が滲んで来た。そしてどうかして冷靜な心持ちになつて善後の手段を考へようとは腕つたが、併し彼は唯氣を焦つばかりで、どうしてもそこまで冷靜になることは出来なかつた。

「伊佐雄さん。伊佐雄さん。」と、誰れか、すぐ傍で呼びかけてゐる。

その聲ではつとして我れに返ると、伊佐雄は眼をあげてそつちを見たが、そこにはいつの間にか舅の民造がやつて来てにこやかに笑ひながら立つてゐる。

伊佐雄はさも吃驚したやうに力めて微笑みながらじつと民造の顔をみたが、民造はそのまま、安樂椅子に腰をかけて親しげな調子で、『あんた、どうしたのぢや。大層考へ込んでゐるぢやないですか。』と、云ふ。

伊佐雄は今の心持ちを民造にさとられるのが恐ろしさに、態と快調に装ひながら、
 「いや、考へ込んでゐる譯ぢやないんですが、は、は、は、今夜は併し随分盛會で御座いますねえ。大分珍しい顔が集まつてゐますなあ。』と、何氣ない調子で云ふ。
 民造は軽くそれを受けて、

『なにしろ交友倶楽部の勢力はえらいもんですなあ。此れだけの人を集めるのは容易なことぢやないですよ。』と、云つたが、やがて調子を變へて、

『あんた此頃ちつとも家へ来て下さらんなあ。尤も忙がしいにも忙がしいだらうがどうかちつと遊びに来て下さらんか、歌子とたつた二人きりになつてしまつたんで、私も寂しくてならんですよ。』と、寂しさうな眼色をして云ふ。

十四の六

民造と伊佐雄がそんな話をしてゐるうちに、餘興開始の報らせが接客室から接客室へ傳はつて來た。それと一緒に室のなかには又ひとしほの混雜が起つて、賓客はぞろ／＼つながつて室を出てゆく。そしていづれも階段を上つて階上の餘興場の方へ繰込んでゆく。そのさまをみてゐると、燕尾服やら振袖やらが入亂れて、まるで百花の咲き誇つた花園がそのまゝ、エスカレーターで上へ上へと引揚げられてゆくやうであつた。

幾顆となく電燈を點じた美しい電飾は廣々とした餘興場の天井に光の洪水を漲らして正面の假舞臺の緞帳に繡つた花模様も浮き出たやうに輝いて見える。賓客の席が定まるとやがてそこでは賑やかな長唄の三番がはじまつた。聴衆は鳴りを静めて聞き入つてゐるが室の空氣はいつの間にか葉巻や香水の匂で温かく蒸されてくる。

伊佐雄は民造と並んで坐つてゐるが、八重子が何處にゐるか分らないので、頻りに氣を配つて捜してゐた。數多い客のなかなので、少しぐらゐる伸び上つて捜したのは到底分らない。伊佐

雄の胸は又焦だ、しさに赫と燃えて来た。

その長唄が濟む頃になつて、餘興場の扉がそつと開いた。と、みるとそこから入つて来るのは八重子であつた。明るい光のなかに着飾つた姿の美しさを輝かしながら、彼女は女王のやうに誇らかに胸を張つて態と品をつくりながら徐に入つて来た。賓客の眼は一齊にそつちへ惹かれていつた。それと同時にいろくいな囁きが人々の間で起つた。

八重子はさも得意さうに四邊を見廻してゐるが、やがてそこにあつた空席へいつて、周囲の人に會釋しながら腰を下ろした。

それから間もなく又扉のところからは清岡子爵が手巾で口を掩ひながら入つて来た。

伊佐雄の胸にはその様をみると抑へきれないやうな憤怒が込み上げて来た。この公開の席上でかくまで大膽に振舞ふ二人の様子が彼の心を憎悪の頂點まで押し上げていつた。どうかしてそれを制しようと思つてゐるうちに、伊佐雄はふつと我れにもなく涙ぐましい心地になつて思はず下唇を噛みしめながら首を垂れてしまつた。

隣に坐つた民造は八重子と清岡が引違へに入つて来た時から急に眉のあたりを曇らせてゐる

た。そしてそれとなく伊佐雄の方を偷みながら深い思ひに暮れてゐるが、演藝が濟んで幕が下りると、彼は何喰はぬ顔で伊佐雄の方を顧みながら、

「さすがに巧いもんぢやなあ。よくあゝ三味線が弾けるもんだ。」と、獨語のやうに云つて強ひて笑つた。

伊佐雄はそれには返事をしなかつた。

民造は頻りに何か話題をつくらうとあせつてゐるが、伊佐雄が妙々しく返事をしないので、しまひには憂慮をあらはに眉のあたりに現はして、口ばかりで微笑ながらその場を取り繕つてゐた。

長唄のあとには落語やら舞踊やらがあつた。伊佐雄はもうそんなものを見聞してゐる氣もしないので、やがてそつと餘興場を抜け出て、階下の酒場へいつた。そしてそこで二三人の友達と一緒に麥酒を飲みながら氣を紛らかさうとした。常はまるで飲酒癖のない彼が其晩は大きな洋盃で四五杯も呷つた。しかし彼はそれでも少しも酔はなかつた。

餘興が終るとすぐに食堂が開かれたが、華やかな饗宴であつたにも拘らず伊佐雄は快々とし

て樂しまなかつた。八重子と竝んで食卓に就いてゐながら彼は唯一言も口をきかなかつた。伊佐雄はデザートコースに入るともうとてもじつとしてゐられないので、頭痛がして耐らないからと云つて父にだけ挨拶して、そのまゝ、たつたひとりて玄關の方へ降りていつた。そして供の自動車を呼んで、それへ乗つたが運転手が、

「あの奥様は？」と、訊くと、伊佐雄は少し慄へを帯びた聲で、

「俺を邸宅へ送つて、それからもう一度迎ひに来てやれ。」と、云つて、やがて又力めて平靜を装ふやうに、「俺は少し頭痛がするから一足先へ歸るのだ。……」

十五の一

小石川の今津の新邸では日に日に面白くないことばかり起つて、家中にも何處となく暗い陰影が射して來た。夫婦の間は妙に疎々しくなつて、結婚以來の習慣になつてゐる晚餐のまどるにも減多に夫婦が顔を合はせるやうなことはなくなつてしまつた。ひとつには八重子が外出ばかりしてゐるので、晚餐も多くは外でとるせるもあつたが、併し邸にゐる時でも彼女は態と理

由を設けて食堂へ出てゆくのを避けた。伊佐雄一人て小間使のお清を相手に寂しく食卓に就く日が漸次と多くなつていつた。その寂しさに耐へかねて、伊佐雄は又伊佐雄で、會社が退けるとそのまゝ、俱樂部へ廻つたり、料理屋へいつたりして、夜を更かすやうになつた。それ故夜になると邸内はひつそりして、まるで人の住まぬ家のやうな寂しさを呈するのであつた。

従つて伊佐雄は今津の本宅や、磯谷家とも往來することが少くなつていつた。いろ／＼な催して招待を受けても夫婦打揃つてゆくことが出來ないので、つひ悪いとは知りながら斷つてしまはなければならぬやうなことが往々あつた。

伊佐雄は會社にゐる時も亦俱樂部にゐる時も、それから又友達と快談してゐるやうな時でも、絶えず自分の家の將來といふことを思ひ悩んでゐた。それを考へるといつも切ない苦悶が胸に湧いてじつとして居られないほど心が暗くなるのであつた。どうかしなければならぬ、どうかして夫婦の關係を改善しなければならぬ。それには先づ事情を闡明してそのうへで何等かの斷乎とした手段を執らなければならぬ、さうした考へは日に幾度となく彼の心頭を過ぎつてゆくのであつた。

伊佐雄は苦悶に苦悶を重ねながらその機會の來るのを待つてゐた。

その日は彼も珍らしく家に入る。朝から何となく氣分が勝れないので、會社の方は休んで一日自分の書齋でなすこともなく書見などをしてゐた。

書齋の窓から眺めると、早春の柔かい日ざしは霜に荒らされた庭の面にかけて、南向きの築山の影にある梅は今を盛りと咲き誇つてゐる。空は飽くまで晴れ渡つて、何處かで鶯が明かに囀つてゐる。そこは高臺なので谷のやうになつた下の町の家並はごちやごちやと建込んだまゝ、ぼうつと淡霞に掩はれてゐた。

空はいくら晴れてゐても、日はいかに明るく照つてゐても、胸に苦悶のある伊佐雄はどうしても爽快な心地を樂むことは出来なかつた。彼は安樂椅子へぐつたりとくづをれたまゝ、頻りに暗い思ひに耽つてゐたが、急に思ひついて、いつからか實行しようと思つてゐたことを今日こそ實行しようと決心した。それは八重子の居間を一應調べてみることで、もし何等かの材料を發見したならばそれを機會にどうかして解決をつけてしまはうといふのであつた。甚だ卑怯な手段ではあつたが伊佐雄にはもうそれ以外にどうにも仕様がなないのであつた。

伊佐雄はやがて書齋を出ていつた。そして小間使のお清を呼んで八重子の在否を訊ねると八重子はその日も山内伯爵家で還曆の祝ひがあるとかで、午後からそつちへ出懸けていつたといふ。此頃では伊佐雄も八重子の出先などは聞かないし、又八重子もそれを云つて行かないので、何處に何うしてゐるのだから分らないことが往々あつた。

丁度留守だと聞くと、伊佐雄は今日こそ絶好の機會だと思つたので、小間使達に氣づかれないやうにこつそり廊下から奥の八重子の化粧室の方へ入つていつた。

八重子の居間は化粧室と、居間と、衣裳室と三つに分れてゐて、奥の母家からは別棟のやうになつてゐた。伊佐雄は張り切つた眼つきをしながら先づ居間の障子を開けてなかへ入つていつた。

十五の二

居間から化粧室、衣裳室と順々に調べてみたが、貴重なもの、入れてあるらしい小箆笥などはいづれも堅く鍵が下ろしてあつて、その外のものには何ひとつ手懸りになるやうなものはない。

かつた。箆笥の數をみても、装身具の棚をみても、よくもまあこれだけ買ひ集めたものだと思はれるほど總てが整つてゐて、伊佐雄は我が妻の所有品ながら妙からず驚かされてしまつたのであつた。此頃では殆んど八重子の居間へ入つたりすることはないので伊佐雄は八重子がこれほどまでに美を盡し贅を盡してゐるのを初めて見るのであつた。そして二重鍵のかけてある棚などをみると、そのなかに何か重大な秘密が隠されてゐるやうな氣ばかりして、どうかしてその扉を打壊して、も中が見度いやうな氣さへするのであつた。

いくら捜しても、此れと思ふものは見當らないので、伊佐雄はやがて甚だしい失望を覺えながら、思ひを残し残し八重子の居間を出た。いくら八重子が投げ遣りな女でもまさか良人に秘密にしてゐるものをさう譯もなくそこらへ投げ出して置く譯もないと思ふと、自分の企てが却つて餘りに馬鹿氣てゐるやうに思はれて、彼は自分で自分を嘲笑はずにはゐられなかつた。

伊佐雄は極めて不愉快な心持ちになりながら廊下のところまで歩いて來たが、その時向うからひよつくら八重子附きの小間使ひのお志保が急ぎ足に此方へやつて來る。と、みると、彼女は西洋封筒に收められた一通の手紙を持つてゐる。

伊佐雄はお志保が行措に一寸會釋をしてそのまゝ、八重子の居間の方へ入つて行かうとするのを見ると、後からふいに呼び留めながら、その手紙を見せると云つた。お志保は何氣ない風で云はれるまゝ、にその手紙を伊佐雄に渡したが、伊佐雄はものをも云はずその裏書きを打返してみて、それなり險はしい顔つきになりながら、それを持つてつか／＼自分の書齋の方へ歩いていつてしまつた。

書齋へ歸ると伊佐雄は手に持つた手紙をもう一度よく調べてみた。それは角封を嚴重に密封したもので、裏には須藤みつ子と書いてあるきりて、發信人の住所もなにも書いてない。しかもペンで書いてあるその文字はどうみても男の手蹟らしかつた。

伊佐雄はその手紙を見てゐるうちに耐まらなく胸が込み上げてそれを持つ手はぶる／＼小刻に慄へて來た。もうどうしても開封してみずにはゐられなくなつたので、彼はやがて卓子の前へいつて、そこに有合ふ小刀でさつと封を切つてみた。

なか、らは四つに折つた書簡箋が出て來た。それには四行ばかり次のやうな文言が走り書きしてあつた。

『先夜は失禮致し候。その後度々御手紙を頂き候得共、小生はそれを披見するに忍びず候間總て封の儘火中致し候。事茲に及び候上は最早何事も夢とおあきらめ下され度く、重ねて申す迄もなく、向後は一切御交際をも絶ちたき希望に御座候。小生渡歐の期日は不明に候得共、近々中に出發の運びと相成る可く候。』

その文言のあとには唯Kとしてあつた。

伊佐雄にはそれが清岡からの手紙であることはひと眼みて分つた。そしてそれと同時に計らずも清岡と八重子との間の關係がさりと分つてしまつたのであつた。

伊佐雄の胸には又新たな疑惑や憤怒が湧いて來た。この手紙で見ると二人の間には確かに何等かの關係が繼續してゐるに相違ない。しかもそれは八重子の方から積極的に持懸けていつたものであつて、今ではもう清岡の方が受動者になつてゐることだけはどうやら推定がつく。今迄はまさかと思つてそれとなく力めて打消してゐたことが、かうあらはに暴露されてみると、伊佐雄は抑へに抑へつけてゐた感情に耐へられなくなつて來た。殊に八重子の心がもう自分からすつかり離れ去つてしまつてゐることがこの手紙に依つて明らかに確められたやうなものな

で、さすがの伊佐雄も、う我慢が出来なかつた。彼は匕首を鼻の先へ突きつけられたやうな突詰めた心持ちになつていつた。

十五の三

伊佐雄が善後の手段に盡きて、遣り場のない悲しみに沈む頃には、書齋の窓にももうそろそろ黄昏の色が迫つて來た。窓帷を透かして射し込んで來る夕陽は紅黄く室内を染めて、そのなから書棚の金具や裝飾品がちらちらと輝く。漸次とその光の薄れてゆくさまが又伊佐雄を一層深い悲しみの底へ追ひ落としてゆくのであつた。

ふと、耳をとめて聞くと室の外の廊下の方からは誰れか、此方へ歩いて來る足音がかすかに聞える。今頃誰れがやつて來るのだらう、ひよつとしたら八重子が歸邸したのではあるまいか、と思ふと伊佐雄は甚だしい惑亂を覺えて、清岡子爵からの手紙を慌て、机の抽出しへ隠してしまつた。

それと引違へに書齋の扉が音もなくすうつと開いた。誰れかと思つて差覗くと、そこから黙

つて入つて来たのは思ひも懸けぬ磯谷の歌子であつた。

歌子は伊佐雄の顔を見るとにつこり笑つて、

「まあ、兄様。先夜は失禮いたしました。」と、親しげに挨拶する。

伊佐雄は案に相違した人が入つて来たので、稍どきまぎしながら、

「歌子さんか。私は誰れかと思つた。」と、力めて笑ひながら云つて、「どうもすつかり御無沙汰をしてしまつて、……」

「ほんとに兄様、随分御座いますわねえ。此頃どう遊ばして被居いますの。餘り被來つて下さいませんか。父も大層心配して居りますのよ。」と、浮々した聲では云つたが、その顔には何か隠してゐるやうな濟まぬ色が浮いてゐた。

伊佐雄は自分でもどうかして今の心持ちを人に見せまいとして、「いや、どうつて別に理由もないんだが、何かと忙がしいもんですからねえ。……は、は、は、お父様はお變りもないの？」

「え、有難う御座います。毎日々々寂しい寂しいつて云ひ暮らして居りますわ。」と、云つて歌子は伊佐雄の顔をじつと見ながら、「今日も自分で伺ふなんて云つて居りましたんですけど、お午

からお客様が御座いましたもんですから……」

伊佐雄はそれなり眼を移して、小卓の上に置いてある西洋花の紅い鉢物をじつと見つめてゐた。歌子の素直な口振りを聞くと、彼には八重子が同じ姉妹でありながらまるで別人のやうに思はれて來るのであつた。まだ處女の潔らかさに澄んでゐるその眼光、ふつくらしたその頬、それは傷ついた伊佐雄の胸に再び抑へきれぬ苦悶を湧かせる種になつてゆくのであつた。

歌子はさも落着かぬやうな様子をして、四邊を見廻はしてゐたが、やがて、

「ねえ、兄様。姉様はお留守なんて御座いますつてねえ。」と、云ふ。

伊佐雄はふと我に返つたやうに、

「え……」と、云つて、「今日は山内さんのところで何かのお祝ひがあるとか云つて出て行きましたよ。だがもう歸つて來る頃ですよ。」と、歌子の顔をまじく見ながら云ふ。

歌子は黙つてその顔を見返してゐたが、伊佐雄はそれに曇みかけて、

「何か用でもあるの？」と、訊く。

歌子は一寸首を振つて、

「い、え、別に用つて云ふほどの用ぢやないんで御座いますけど……」と、あとは言葉を濁してしまふ。

その時室内にはばつと電燈が點つた。

それと殆んど同時に、表女關の方では自動車の警笛の音が二聲三聲つゝいて聞える。歌子はふと聞耳をたて、

「あら、姉様がお歸り遊ばしたんぢやないかしら。」と、獨語を云つて、そのまゝ、そわ／＼しながら、

「兄様。一寸御免遊ばせ。」と云ひ捨て、急ぎ足に書齋を出ていつた。

伊佐雄は何かしら事ありげな歌子の後姿を眼を据ゑてじつと見送つてゐた。

十五の四

いつまで待つてゐても、書齋を出ていつた歌子はなかく歸つて來さうもないので、伊佐雄はじり／＼しながらやがて呼鈴を鳴らしてお清を呼んだ。そして歌子はどうしたと訊くと、お

清は只今奥様がお歸り遊ばしましたのであちらのお居間でお二人して何かお話になつて被居いますと云ふ。伊佐雄はそれを聞くと譯もなく胸が躍つて來た。

それにしても歌子は今日何にしにやつて來たのであらう。あの様子の落着かぬところを見るに何か事件が起つてゐるに相違ない。それは八重子に關して、あらうか、それとも磯谷の家のことであらうか、神経質になつた伊佐雄は一寸したことからそんな風に先々と氣が廻つてならないのであつた。

二度目にお清を呼んで訊いた時には歌子はもういつの間にか歸つたあとであつた。もう一度逢つてそれとなく様子を搜つてみようと思つて居たのに、歸つてしまつたと聞くと伊佐雄は失望を覺えない譯にはいかなかつた。

伊佐雄はそれから半時ほど経つて寂しい晚餐を済ますと、又書齋へ歸つて來て、もう一應篤と考へた上で腹を極めようとした。逸りたつ胸は「今夜」「今夜」と叫んで止まない。今夜をおいて何時またこない、機會が來よう。今夜こそ八重子を責めて事の眞實を吐かせ、とるべき手段を執つてしまはなければならぬ、伊佐雄の心の底から溢れ出て來る聲は慄へながらさう叫

んだ。

伊佐雄はやがて慄へる指先で呼鈴を押した。そしてお清がやつて来ると、態とそつちへは振顧りもしずに、

「あの奥さんに一寸此處へ来るやうにさう云つて呉れ。」と、力めて事もなげな調子を装ひながら云つた。お清はいつにないことなので怪訝な顔をしながら一禮して室を出ていつた。

もう来るかも来るかと思つてそれとなく息を塞めて、聞き耳を立てゝゐると、やがて二十分ほど経つてから廊下を歩く静かな足音が聞えて来た。そして書齋の扉の前で止まつたかと思ふと、やがてその扉はすつと開いて、そこから胸まで模様のある美しい襲に唐錦の帯をしめた八重子が花のやうな化粧を凝らしたまゝ、音もなく入つて来た。

伊佐雄の胸は云ひ甲斐もなく躍つて来た。

八重子は書齋へ入ると格別臆びれた様子もなく、伊佐雄の卓子のすぐ傍へ歩み寄つて来ながら、

「何か御用で御座いますか。」と、冷たい聲で訊きかける。

その聲の調子が伊佐雄の胸をちくりと刺した。彼はそれでやつと力を得ながら、重々しく合點いて、

「私は少しあなたに話し度いことがあるから、まあ兎に角その椅子へお坐り。」と、云ふ。

八重子は云はれるまゝにその腕椅子へそつと腰を下ろした。

伊佐雄はその顔をじいつと眞面に見詰めてゐたが、少時すると唇をぶるゝ慄はせながら、腹の底から絞り出すやうな聲で、

「八重さん。」と、呼んだ。そして胸に餘る興奮を顔色に表はしながら、

「話し度いといふのは他のことぢやないが、あなたは此頃の私とあなたの關係をどう思ふ？」と、詰るやうに云ふ。

八重子は俯向いたまゝ、返事をしない。

伊佐雄は更に緊張した聲で、

「ひとつ家に住んでゐながら、こんな状態で暮らしてゐてこれて果たして二人は夫婦と云はれるだらうか、此頃ぢや一日口をき、合ふこともなければ一緒に食事をすることもない。こんな状

態でゐてこれから先どうなるのだらう。私はそれを思ふと何んだか恐いやうな気がして来る。今のうちに何とかして置かなければ、近い将来に何か忌はしい結果が現はれて来やしまいかと、私は此間からそればかり心配してゐるのだ。』

伊佐雄はさう云ひながら一瞬の間も八重子から眼を離さなかつた。八重子はそれでも黙つてゐてひと言の返事さへしなかつた。

十五の五

伊佐雄は少時じつくり考へたあとで今度は一層嚴肅な聲になりながら、

「かうなつたに就いては、いろ／＼行懸りもあるだらうが、併し私はこれには何か重大な原因があるのだと思ふ。その原因を除いてしまはなければ二人の間には到底親しみは返つて来ないんだ。」と、云ふ。

八重子はそれでも返事をしなかつたが、やがてそつと顔をあげて伊佐雄の方を見る。その時伊佐雄はきつと眼を据ゑて、さも答へを迫るやうに彼女の顔を見返したので、八重子は到頭顔を

を背けて、

「その原因といふのは何んで御座いますの？」と、低い聲で訊く。

伊佐雄は聲を強めて、

「それはあんたの胸に覚えがあるだらう。私に訊くまでもなく、あんたはそれをちやんと知つてゐる筈ぢやないか。」

「さあ、私貴方の仰有ることがよく分りませんが、……」と、云つて八重子は袂から手帛を出して、口を掩ひながら、「何かお考へになつてゐることが御座いますんならどうか仰有つて下さいませんか？」と、答へる。

伊佐雄は顔色を動かして、

「それぢやあんたは私の口からそれを聞き度いといふのか？」

八重子は軽く合點いて、

「でも私には分らないんで御座いますもの。」

伊佐雄は傷ましい眼色になりながら少時の間口を噤んでゐるが、やがて腹を据ゑたやうに、

「よし、あんたがさういふ氣なら私の方から云はう。かうなつた以上はお互ひにもう遠慮し合ふ必要はないのだから、……實は私の云ふのはあの清岡子爵のことなのだ。もうあんたの耳にも恐らく入つてゐるだらうが、今私達の周圍ではいろんな風説が立つてゐる。私も初めはまさかと思つて氣にも懸けなかつたが、しかし今日になつてみるとどうも此儘にして置くことが出来ないうやうな状態になつて來たのだ。それといふのは、腹藏なくいふと私もそれに對して大きな疑ひを懷くやうになつて來たからだ。」

八重子は又顔をあげてきつと伊佐雄の顔をみた。そして今度は俄かに雙眼に一杯涙を溢へながら、

「貴方。そりや餘りて御座いますわ。そんな風説なんか、……」

「いや、さうは云はせない。もう今となつてはそんな風説とひと言に云ひ棄て、しまへる問題ではなくなつて來たのだ。……私もこんなことは云ひ度くないのだが、併しさうかといつてもう私はこのまゝにして放棄つて置くだけの餘裕を持ち得なくなつたのだ。……八重さん。かうなつてしまつたうへはあんたももう何事も隠さずにきつぱり云つて呉れ。そして私の苦痛を輕

くして呉れないか。」と、漸次と狂ほしい眼光になりながら云ふ。

八重子は頻りに涙を呑んでゐるが、やがて手巾で顔を掩つたまゝ、

「でも、私隠してゐることなんか無いんで御座いますもの。」と、飽くまで事實を否認しようとする。

伊佐雄はもう我慢が出来なくなつたやうに、

「あんたがさういふなら私の方でもそれ以上の手段に出なけりやならん。」と、強い聲で云ひ放つて、やがて今度は卓子の抽出しを開けて、さつきの清岡からの手紙を取出して、それを八重子の前へ突付けながら、

「あんたはこれでも嘘だと云ひ張るのか。」と、詰るやうな鋭い調子で云ふ。

八重子は何事かと云ふやうな顔をして、展げられた手紙の文言をみてゐるが、讀み了ると一緒にさつと顔色を變へて、何とも名狀することの出来ない眼つきをしながらじいつと伊佐雄の顔を凝視した。その眼からは涙がほろ／＼と留めどもなく流れ落ちて、身じろぎもしないその體はそのまゝ、石と凝つてしまふのではあるまいかと思はれるほど堅くなつて來た。

十五の六

夫婦の間には長い沈黙がついた。

八重子の嘔り泣く聲は漸次と高くなつて、ひつそりと静まり返つた室内へかすかにひびいてゆく。伊佐雄は唇を吐くやうな眼眸をして、じいつと八重子の姿を見詰めて居た。

伊佐雄は八重子が何とも返事をしないので、やがて氣を焦ちながら、

「八重さん。これだけの證據が上つてゐる以上は、もう仕様がないうさ。いくらあなたが圖々しくてももう嘘だとは云ひ張れまい。それよりも、いつそ茲で總てを告白してしまつて、そのうへでどうにか解決をつけたらどうだ？ その方が私も氣持ちがい、し、あなたも苦しんで済むだらうと思ふ。」

八重子は急に狂ほしい聲になつて、

「貴方、そりや餘りで御座いますわ。いくら私 が我儘者でも、人の妻としての道ぐらゐるは存じて居ります。私 貴方が何と仰有いまして、そればかりは御満足の出来るやうに申譯を致しま

す。そんなことがあつて、私 どうして生きてゐられませう。」

「いや、私は今更あなたから辯解を聞かうとは思はない。唯一時も早く解決をつけて貰ひ度いのだ。」伊佐雄はさう云ひながらも八重子にかうきつぱり云はれてみると、何かしら自分の方の陣立てに弱點があるやうな氣がしてならなかつた。たとへば交友俱樂部での出来事にしろ、此手紙にしろ、八重子と清岡との間に何か忌はしい關係があると推定するには餘りに根據が薄弱である。さう思ふと伊佐雄は何かなしに言葉の鋭さが鈍つて來るやうだつた。八重子の様子は眞實それほどに悲しさうであつた。

伊佐雄はしばらくすると煙草に火を點けながら、少し餘裕のある態度になつて、

「兎に角辯解はあとにして、あなたは私の妻となつてゐるながら、何故他の男とかうして密々の間に手紙の交換などをやつてゐるのだ。それが不思議ぢやないか。しかもこの清岡の手紙などは態と女名前にしたりして、なかの文言なども随分不穩當なものだと思ふ。たとへ他人に疑はれてもこれでは辯解のしやうがあるまいぢやないか。」

「い、え、それはどうしても申譯が出來ます。私 かうして此方へ参りましたも、女として生きて

居ります以上は良人以外の男の方とまるつきり御交際を断たなければならぬといふ理由はないと思ひます。いくらさうしななければならぬとも、そんなことは到底實行の出来ないことだと存じます。」八重子の言葉は漸次と熱をもつて来る。

伊佐雄は考へ深い眼つきでそれを受けながら、

「そりや無論のことだ。私はそんなことを云つてゐるんぢやない。唯こんな風な如何はしい手紙を交換するのが不思議だといふのだ。」

八重子は手巾で口を掩ひながら、

「それはあなたが清岡さんといふ方をよく御存知ないからそんなお疑ひをお持ちになるんです。清岡さんは決してそんな方ぢやありません。それに非常に世間を恐れて被居る方ですから、つひ手紙を下すつたりするのにも、あなたへ氣兼ねをなすつて、こんな女の名前にしたりなさるのです。このなかに書いてある文言だつて、冷靜な頭で考へて頂けば決して不思議なことはないと思ひます。」

伊佐雄は又清岡の手紙を取上げてもう一度讀み返してみた。しかし何度讀み返してみても「事

茲に及び候。上は最早何事も夢とお諦め被下度……」といふ文言が怪しい意味を含んでゐるやうに思はれてならなかつた。

八重子は黙つて深い思ひに沈んでゐたが、やがて又顔をあげて、

「かうなりました上はなまなかなことを申上げたつて、どうせお疑ひを解くことは出来まいと思ひますから、もういつそ思ひ切つて、何事もすつかり打明けてお話し致してしまひませう。さうしたらば貴方にも私の今の位置がよくお分りになりますでせう。」と、云つて、今度は反對に八重子の方が強い態度になつて来た。

十五の七

八重子はやがて幾度か云ひ憎さうにもぢくしながらやつと口をきつて、

「實はあの、今ですから申上げますけど、あの貴方がお疑り遊ばして被居る通り、私はずつと前にあの清岡さんを思つてゐたことが御座いますんです。もう何も彼も打明けて申上げてしまひますが、全くその時には私の心も體も皆あの清岡さんのものだつたんで御座います。」

かう云ひ切られてみるとさすがの伊佐雄も驚かすにはゐられなかつた。彼は苦痛に満ちた顔色になりながら、

「それは何時頃のことなのか？」と、慄へ聲で聞く。

八重子はもう度胸が据つたやうに、顔をあげて、

「初めて私があの方を思ふやうになつたのは一昨年の夏のことと御座いました。さうしてそれは貴方と結婚しますまでずっと續いてゐたんで御座います。」

伊佐雄はきつと其顔を見据ゑながら、

「しかしそんな祕密があるのをあんたは何んだつて今迄私に打明けて呉れなかつたんだ。あんたは今迄處女の假面を被つて私を欺いてゐたんだな。」

八重子は悲しげに首を垂れて、

「どうも貴方には申譯が御座いませぬ。事情がさうなつて來ましたもんですから。……」と、低い聲で云つて、「こんなことを申し上げちやお氣に障るかもしれませぬけど、あの私が此方へ嫁いて参りましたのは全く父の犠牲になつたんで御座います。父はあの、私の祕密をようく

知つて居りました。さうして涙をこぼして私に清岡さんを思ひ切れと申しました。私その時にどうしても父には勝てなかつたもんで御座いますから、到頭此方へ参るやうになつてしまつたんで御座います。」

伊佐雄はそれを聞くと耐らなくなつたやうに顔を背けてしまつた。

八重子は又涙聲になつて、

「一旦は清岡さんのことも思ひ切りましたんですけど、私私ほんとのことを申しますと、どうしてもあの方のことだけは忘れることが出來ないんで御座います。人の妻となつた以上はもう何も彼も諦めて思ひ切つてしまはなければならぬと思ひまして、今迄にも随分そのため身を苦しめました。どうかして貴方を愛しさへすればあの方のことも自然に忘れられると思ひまして、私は一生懸命になつて、心を傷めました。でも私、どうしても自分に勝つことが出來なかつたんで御座います。」さう云つて八重子は涙に沈みながら、嗚咽に咽だした。

伊佐雄はひと言も答へない。

八重子は又言葉をついで、

「併し私そんなに苦しんで居りましても、決して妻としての道だけは忘れませんでした。又忘れようとしても清岡さんがそれを忘れさせて下さいませませんでした。貴方のお眼にはどう映つてゐるか分りませんが、あの方ぐらゐる堅い方は御座いませぬのです。」

伊佐雄は狂ほしい眼を据ゑて、

「いや、もう分つた。あんたの口からそれ以上のことを聞く必要はない。」と、早口に云つたがやがて、「それで清岡はこの手紙にあるやうにほんとに歐羅巴へ行くのか？」

八重子は恨めしさうな眼つきをして、「え、もうぢつきにあの方は西洋へ行つておしまひになるんです。それもとを云へば私の爲を思つて、遠い外國へても行つてしまつたら、せめて、私があの方のことを忘れるだらうと思つて、それで行つておしまひになるんです。私それと思ふと悲しくつて、……」八重子はそのまま、言葉を奪はれて泣き沈んでしまつた。

伊佐雄もそれつきり口を噤んでしまつたが、やがて何と思つたかつかいと起ち上つて、

「八重さん、兎に角私は今も此際何にも云はんから、あんたはあんたでよく考へてみるがいい。」と、云ひ捨て、そのまゝ、書齋を出ていつてしまつた。彼の眼もその時薄く涙ぐんでゐた。

十六の一

銀座の表通りにあるそこいらでも有名な寶石商、杉本の店先の車道のところには、今一臺の大型の自動車があり捨て、ある。歩道の柳はまだ冬の色にすがれてはゐるが、刺々しい枝を吹く風に靡かせながら戯れるやうにその自動車の屋根にもつれついてゐるのである。その車はもう三十分も前からそのまゝ、そこに止まつてゐるのであつた。

杉本の店の接客室のなかでは大きな緑色の卓布をかけた卓子の前で美しく着飾つた貴夫人と、もうひとり脊丈のずんぐりした緒ら顔の紳士が、脊廣服を着た店員を相手に何事か頻りに取引の話をしつゝけてゐるのであつた。彼等の前には緑色や紫色の天鵝絨の小箱が幾つも置き並べてあつて、蓋のあけてある箱からは紅白とりぐの寶石が燦然たる光輝を放つてゐるのであつた。

着飾つた貴夫人は横顔を見たゞけてもすぐに八重子であることが分つた。彼女は一つの箱を取上げて、さつきからさも欲しさうにしげく見てゐるが、到頭買ひ取ることに定めたと見え

て、幾度か店員に合點いてみせた。

緒ら顔の紳士はそれと一緒に追従笑ひをしながら頻りに何事か饒舌つてゐたが、やがて洋服のポケットから大きな革の紙幣入れを取り出して、そのなか、ら紙幣の束をだして、無雑作に卓子の上へ突き出した。

店員は恭々しくそれを受け取つて奥へ入つていつたが、しばらくすると受領證らしい紙片を持つて出て来る。八重子はそれを一應眼を通して、どうか此れは貴方の方へといふやうに紳士の方へそれを押し遣つたが、紳士は笑つてゐて受取らない。暫時押問答らしいことをやつた末、到頭紳士はそれを自分のポケットへをさめた。

二人は奥から女の給仕が持つて来た茶を啜つたあとで、やがて起ち上つた。そして店員の世辭らしい言葉に送られてずつと店先へ出て来たが、八重子はそこで立止まつて、

『どうもいろいろ有難う御座いました。いづれ兩三日中に伺つてあの方のことは定めますから。……』と、云ふ。その顔には艶やかな笑ひが浮んでゐた。

紳士は事もなげに笑つて、

『いや、そんなことはどうでも宜しう御座いますよ。そんなに堅くして頂くと却つて私の方が恐縮いたします。は、は、は。』

『でも私それぢや氣が濟みませんから。』と、云つて八重子は眼で自動車の運轉手呼びながら紳士の方を向いて、

『貴方はこれから何方へ?』と、訊く。

紳士はもう一度笑つて、

『私はこれから一寸日本橋を廻つて社の方へ歸ります。貴女は無論お約束のホテルの方へお廻りになるんでせう。』

『え、どうしようかと思つてゐますの。もう時間も遅う御座んすし、……』八重子はさう云ひながら今買った寶石を入れたオペラバッグを指先で弄びながら、『それに今夜は英國の大使館へ参らなけりやなりませんしねえ。』

『はあ、なる程。夜會ですな。夫人も随分お忙がしいですなあ。』紳士はさも感心したやうに相槌を打つ。

八重子は一寸嬌態をして、

「ほんとに忙がしくつて仕様が御座いませぬの。此頃のやうちやほんとに體が耐りませぬわ。」
 「は、は、は、御尤もです。それぢやまあ今日はホテルの方は止しになすつて、眞直にお宅へお歸りなさいまし。晩のお出ましの支度もあるでせうから。」

紳士はさう云ひながら八重子を送つて自動車の方へ行つた。

その時ふいに後から、

「夫人。八重子さん。」と、呼ぶ聲が聞えた。

八重子は悸乎として後を振り返つたが、そこには華奢な背廣服を着て、オーバーコートを腕にかけたひとりの若紳士がにこ／＼笑ひながら立つてゐる。

それは絶えて久しい稻垣の貞夫であつた。

十六の二

八重子は貞夫の顔を見ると、餘り思ひがけないので思はず顔を染めながらにつこり眼顔で笑

つて、

「まあ、貞夫様、随分しばらくで御座いましたわねえ。」と、云ふ。

貞夫もにこ／＼嬉しさに笑ひながら、

「其後は御無沙汰してゐます。」と、云つたが、八重子の傍に立つた紳士の顔をみると、互に見知越しとみえて一寸頭を下げ合ふ。

八重子と貞夫とはそれから久々の挨拶をしはじめたが、事實二人はもう随分長いこと逢はないのである。八重子が今津家へ興入れしてしまつてからは妙に疎々しくなつて、僅か二度か三度逢つたことがあるきりであつた。

「まあ、ほんとにお珍らしい、妙なところでお眼にかゝれたもんで御座いますわねえ。」八重子はしみ／＼云ひながら、その頃よりもぐつと老けて書生氣のなくなつた立派な貞夫の姿を見上げ見下ろしてゐた。

緒ら顔の紳士は貞夫が來合はすと急に居辛さうにそわ／＼しだして、

「ぢや夫人。何かとお話しも御座いませうから、私はひと足お先へ失禮いたします。」と、云つ

て帽子へ手をかける。

八重子は艶やかにそつちを振顧りながら、

「まあ、お歸り。ぢや失禮ですけど、私あの茲で御免蒙ります。久しぶりて稻垣さんにお眼にかゝりましたんですから、……」

「へ、……、どうぞ御ゆつくり。」さう云つて紳士はそのまま、丁寧に挨拶して電車の停留場の方へ歩いていつてしまつた。

貞夫はその後をじいつと見送つてゐたが、やがて又八重子の方を振顧つて、

「貴女はあの山中を御存知なんですか？」と、妙な顔をしながら訊く。

八重子はさういふ貞夫の顔色を讀むやうに見返しながらか、

「え、知つてゐますわ。」と、答へる。貞夫は怪訝さうな眼色になつて、

「いつ頃から御存知なんですか？」

「いつ頃つてまだつい此間知り合ひになつたばかりなんて御座いますわ。ホテルで、あの私學校にゐる時分からお友達だつた方に紹介されましたのよ。」八重子は事もなげな調子では云つ

てゐたが、心の中では大分どきまぎしてゐるらしかつた。

貞夫はもうそれから先のことは訊かなかつた。

八重子は自分から話題を變へるつもりで、又艶やかに笑ひながら、

「ねえ、貞夫様。あの貴方此れから何方へ被往いますの？」と、何か思考がありさうな眼つきをして訊く。

貞夫は腕にかけたオパークコートを持ちかへながら、「今病院から歸りなんです。これから一寸三越へ廻つて買物をして、ずつと家へ歸らうかと思つてゐるんです。」

「まあ、だつてお宅は築地ぢや御座いませんか。」

「いや、まだ御通知しなかつたかも知れないけど、僕はつい十日ばかり前に大森の方へ引越しました。」

「まあ、大森へ？ おひとりですか？」

八重子は意外な顔をして云ふ。

「え、無論ひとりです。ついあの清岡さんの邸の下でしてねえ。いづれどうにか家の形がつき

次第に皆さんへ御通知するつもりでゐますけど、……」

八重子は清岡の名を云はれると言葉を吃つたが、

「そりや結構で御座いますわねえ、それで大森から毎日病院へ通つて被往るんてすの？」

「え、少し遠いけど電車が便利だから、……」

貞夫はもう去年の冬、醫科大學を卒業して今は父の病院へ勤めてゐるのであつた。その噂は八重子もいつか歌子から聞いたことがあつた。

二人はそのまゝ、口を噤んだが、八重子は急に眼を輝かして、

「ねえ、貞夫様。折角久し振りてお眼にかゝつたんですから、あの何處かで御一緒に御飯でも頂きますせうよ。このまゝ、お別れするのは何んだか厭ですわ。」と、小娘のやうな甘えた調子で云ふ。

十六の三

貞夫はそれと聞くと嬉しさうな顔になりながら、

「さあ、久振りだからお伴をしてもいいけど……貴女は何かお差支へがあるんぢやないんです

か？」と、遠慮がましく云ふ。

「い、え、用なんかないのよ。晩に英國大使館へ行くんですから四時頃までは差支へないんですの。」と、八重子は蓮葉に云つて、「ほんとに久し振りぢや御座いませんか、何處かへ参りませうよ。私、貴方に澤山お話したいことがあるんですわ。」

貞夫は黙つて笑ひながら合點いた。

何處がよからう此處がよからうと相談しあつてゐるうちに、往來の女子供は美しい八重子の姿に眼を奪はれて、ふと立止つてうっかり此方に見惚れていつたりするので、彼女は人眼を厭つて、

「兎に角、あの自動車へ乗つちまひませうよ。さうして中で相談いたしませう。」と、云つて運轉手に眼で合圖をした。

運轉手は慌て、帽子をとりながら扉を開ける。八重子は先づ貞夫を乗せて自分はそのあとからまるで孔雀のやうな威をみせながら乗つた。往來の人はじつと立つてみてる。

自動車はやがてギアをかへる音と一緒にすすつと動き出して、賑やかな銀座通りを眞直に

駛つてゆく。

八重子は貞夫の方へびつたりと肩を寄せて、

「ほんとに何處へ参りませう。何かい、お思ひつきは御座いませんか？」と、云ふ。その胸からはエリオトローブのやうな甘い香水の匂ひが惑はすやうに匂つて来る。

貞夫は何か別なことを考へてゐるやうな眼つきをしながら、

「さうですな、何處といつて別に考へもないけど、……精養軒はどうです？」

「あんな廣いところ厭ですわ。彼處ぢやゆつくりお話しも出来ないぢやありませんか。もつと何處か小さな部屋のある處がよう御座いますわ。」

「小さい部屋のある處と、……」さう云つて貞夫は考へ込んだが、八重子は不意にそれを抑へて、

「それぢやよう御座んすわ。構はないから、あのカッフエ・ローズへ参りませうよ。彼處なら私室が幾つもあるしそれにお料理もおいしう御座んすから。」八重子はさう云つたかと思ふとすぐに送話口へ口を持つていつて、運轉手にカッフエ・ローズへと命ずる。

自動車はそれと一緒に大きな四辻を曲つて銀座の裏通りへ入つていつた。そして往來の人を消魂しい警笛の音で驚かしながらとある小路へ曲つていつたが、やがて二階建の小體な建物の前へ来て止る。その軒先にはカッフエ・ローズと書いた看板が出てゐた。

八重子は今度は自分が先へ降りて、コートの胸をあけて帯の間から燦然と輝く金時計を出してみて、運轉手へ、

「あの、たしか二時に旦那様がお出ましになるとか聞いてゐるから、お前此れから一應歸つて、また四時十五分前に此處へ迎ひに来てお呉れ。きつちり四時十五分前だよ。」と、命じて、彼女はそのまま、カッフエの扉を開けてなかへ入つてゆく。

貞夫もついていつた。

入口のところには制服を着た給仕と、白の前懸けをかけた女給仕が三人ほど立つてゐて八重子が入つてゆくと、さも親げに、

「被來いまし。」と、云ふ。

八重子は馴れきつた様子で給仕に後からコートを脱がせながら、やがて階段を登つてゆく。

そこは佛蘭西人の經營してゐる純巴里式の料理店で、カッフエと云ふよりも一種のホテルであつた。廊下や階段の上り口に置いてある裝飾品や、草花の鉢ものなぞも中々凝つてゐて、主に上流の人達を客にしてゐるので、何處をみてもしつとりとして品がよかつた。

二階には四つの私室があつた。八重子はそのひとつへ入つていつた。

十六の四

八重子達が入つていつた私室は、日本座敷にしたら十二疊ぐらゐるな廣さの、極めて居心地のよさうな室だつた。壁全體が桃色の壁紙で張つてあつて、二つの窓から射し込んで来る午後の日射しが、何とも云へない柔かい影をつくつてゐる。小さな卓子と、椅子が三脚、それに壁際へ安樂椅子が一脚据ゑてあつた。

八重子は室へ入るといきなり卓子の上へオペラバッグを置いて、自分はさも疲れたやうに安樂椅子へいつて腰を下ろした。そして給仕に、

「あの、私、お午齋が食べたいんだがね、何かさつぱりしたものを見繕つて下さいな。」と、如何

にも物馴れた調子で云ふ。そして貞夫の註文も聞かせてついでに白葡萄酒も命じた。貞夫はそれを抑へて、

「あの酒は澤山ですよ。晝間から紅い顔をしちや歩けませんから。」

「は、は、は、い、ちや御座いませんか。お酒がなけりやお話が弾みませんわ。いつぞや大磯へいらしつて下さつた時にもあんなにお飲みなすつたぢやありませんか。」

給仕は笑ひながら出ていつた。

八重子はたつた二人になると、貞夫を招いて、

「ねえ、貞夫様。そんな處に被居らないで、この安樂椅子へ被來いませよ。そこぢやお話が遠すぎますわ。」と、云ふ。

貞夫は云はれる通りに八重子の隣りへいつて腰を下ろした。八重子はそれを見るとにつこり艶やかに笑つて、

「あのこの窓帷を少し引いてもよう御座いませう。餘り明る過ぎますわねえ。」と、云ひながら眞白な織手を伸ばして、薄いレースの窓帷を少し引く。そして又貞夫の方へ笑顔を見せながら、

「ほんとにかうしてお話の出来るのも随分久し振りて御座いますわねえ。私もういつからかお眼に懸り度くて耐らなかつたんで御座いますわ。矢張り女といふものは結婚すると駄目なもんですわねえ。自分ちや自由なつもりでも、何かにつけて縛られてるんですわ。」と、云ふ。貞夫もその言葉をしんみり聞きながら、

「いや、僕も何か機会があつたらお宅へも一度伺つてみたいと思つてゐたんですが、矢張り他家へ嫁いてゐられると思ふとさう自分勝手に訪ねていつたりすることも出来なくなるんですなあ。」

「ほ、ほ、ほ。そんなに御遠慮なさらなくつてもよう御座んすわ。お暇の時にはどうか是非お遊びに被來つて下さいましな。」と、云つて、じいつと貞夫の眼のところを見詰めながら、「つても、貴方も随分お變りになりましたわねえ。一年で云ふと短い月日なんですけど、人はずん／＼變つて行くもんで御座んすわねえ。」

「は、ほ、ほ。馬鹿にお婆さんじみたことを云ひだしましたねえ。僕はどう變りました？」

「さあ、何んて申上げたらいいでせう。兎に角お立派におなり遊ばしたわ。」

「は、ほ、ほ。有難う。さう云つて呉れるのは貴女ばかりだ。」貞夫はすつかり打解けてこんな笑談口までもき、だした。

八重子はその顔を滴るやうな艶やかな眼でみながら、

「い、え、お世辭ぢや御座いませんわ。ほんとにさうなんですもの。」と、笑つて、「あの確かもう近々のうちに結婚遊ばすんだつて云ふぢやありませんか？」

「は、ほ、ほ。そんなことを云つて山を懸けちや可けませんよ。僕はまだなか／＼そんな段ぢやありません。第一こんな學校を出たばかりのひよ／＼な人間の處へは來て呉れてがありませんからなあ。」

「まあ、随分な、そんなことがあるもんですか。餘りお望みの方が多くつて、お選びになるのに骨を折つて被居るんでせう。ほ、ほ、ほ。」

貞夫は面白さうに笑つてゐた。

貞夫はふと思ひついたやうに、

「それはさうと結婚といへば、一體清岡子爵はどうしてゐるんでせう、此間うち何だか結婚するとか云ふ噂を聞いたが、ほんとにさうなんでするか知ら。何んでも京都の堂上華族の令嬢を貰ふとかいふ噂があつたぢやありませんか。」

八重子はそれを聞くと急に眞顔になつて、

「あの、それは石坂さんからお聞きになつたんでせう。あの方そんなことばかり云ひ觸らして歩いて被居るんですのねえ。」

「いや、石坂にも聞いたが、そのほか誰れかにも聞きましたよ。なんでも大變に綺麗な人だとか云ふことだが、清岡君なら丁度似合ひの夫婦でせう。羨ましいですなあ。」貞夫は笑ひながら云ふ。

八重子は氣持ちにそぐはない顔をしながら笑つて、

「ほ、ほ、ほ。そんなにお羨ましがりになる必要はないぢや御座いせんか。貴方だつてどんなにお綺麗な方をお迎へになるか分らないんですもの。」と、云つて、もう黙つてゐられないやうに、

「うに、」でもあの清岡さんが御結婚なさるつて云ふお話は、私、あの嘘だらうと思ひますわ。そんな道理がありませんもの。」

「と云ふと、貴女は何かその間の消息を御承知なんですか？」貞夫は微笑をつげながら云ふ。八重子は心もち顔を染めて、

「あら、そんな皮肉なもの、云ひ方をなすつちや私厭ですわ。随分ですわねえ。」と、艶めかしい流眸で貞夫の方をじつと見て、「あの貴方はもう何も彼も私の秘密を御存知なんですから、私、いくら隠しても駄目ですわねえ。其かはりどうか今迄のやうに何事も秘密を守つて頂き度う御座いますわ。さうしたら私、何んでも打明けてお話し致しますわ。」と、云ふ。

貞夫は黙つて合點く。

八重子はやがて息を塞めて、

「あの清岡さんが結婚遊ばすつて云ふのは、ほんとのことを云ふと嘘なんですの。あの方は今とてもそんなお心持になれる氣遣ひはありませんわ。あの方はつい近頃に又歐羅巴の方へいつておしまひなさるんですもの。」

貞夫は意外な顔をして、

「え、歐羅巴へ？ そりや又どうして？」

八重子は急に涙含んで、

「どうつて、あの、私、どうお話し、たらい、てせう。つまり何んですわねえ、かうして日本に被居ればいろく、苦しい出来事にばかりお逢ひ遊ばすからせう。私、決してあの方をお苦しめ申すつもりぢやないんですけど、つひ私……」それから先は云ひ遊つてしまふ。

貞夫は考へ深い眼眸をして、少時の間黙つてゐたが、やがて眞顔になつて、

「こんなことを聞くのは貴女に對して或は禮を失することになるかも知れないけど、實は僕も少し聞き込んだことがあるので、此間から陰ながら心配してゐたんです。貴女が結婚なさる際には、僕もあんな關係で多少でもその事實に立入つてゐたんだから、もし貴女が私にだけ秘密を洩して下さるといふんなら、聞いても差支へないだらうと思ふんです。」と云つて、ポケットから煙草入れを取りだして、そのなか、ら金口の紙巻煙草をだして靜かに火を點けながら、
「ては何んですか、あの清岡君と貴女の間には今でもまだ交通があるんですか？」

八重子は袂から佛蘭西絹の手帛を出して、それで口を掩ひながら、

「もうどうせ隠したつて仕様がないうで御座いますから、私すつかりお話し、てしまひますわ。實は私、今でもちよく、清岡さんにお眼にかゝつてゐるんです。このローズへもそんなこと出入りするやうになつたんで御座いますの。」さう云ふ八重子の眼には涙が溢れさうに湧いて來た。

貞夫はその眼をじつと見つめてゐた。

十六の六

八重子はやがて何か思ひついたやうに、

「でも、あの貞夫様。かう申したからつて誤解遊ばしちや困りますわ。たとへ清岡さんにお眼にかゝつてゐるまでも、私は一度だつて人の妻としての道を忘れたことは御座いません。又清岡さんはそれを決して忘れさせて下さいませでした。今度歐羅巴へ被往るのももとを云へばそれが原因なので、萬一のことがあつてはといふ懸念から、あの方は態と私から遠退かうと

して被居るんです。遠い外國へ行つてしまひさへすれば、私も思ひ切つて断念めてしまふだらうとさう思つて被居るのは、私にもよく分つて居ますの。それを思ふと、私、ほんとにお氣の毒で、……」あとは術なげな涙聲に沈んでしまふ。

貞夫は黙つて聞き入つてゐた。

注文した白葡萄酒や料理が通つて來ると、その間だけは二人ともさあならぬ顔をして別な話に紛らかしてゐた。そして給仕が行つてしまふと又悲しい話の筋を追つてゆくのであつた。

貞夫は白葡萄酒の洋盃を嘗めるやうに啜りながら、

「これは或人からちらと聞いた話なんですが、今津君と貴女との間には清岡さんのことから何か不和が起つてゐると云ふぢやありませんか。そりや事實なんですか？」

八重子は何も彼も打明けてしまふやうな調子で、

「え、そりや事實なんて御座いますの。清岡さんの御手紙が伊佐雄に見付かつてしまひましたもんですから、それから事が面倒になつて、つい此間良人の方からそれを切り出して参りましたの。」

「それはどういふ風な形式でゝすか？」

「別にどうつて云ふことはないんで御座いますけど、唯何とか解決をつけて呉れと申して居りました。表面は穩かな物云ひをして居りましたが、心の中では随分腹を立て、居るらう御座いました。」と、云つて、八重子はその時のことを思ひ出すやうにじつと眼を据ゑて卓子のうへを見てゐるが、やがて、「でも結婚します時からもうあんな關係になつてゐましたんですし、末はどうせかうなつて來るのはあの時から分つて居りましたんですから、私、もう已むを得ないと思ひますわ。全く運命には勝てませんものねえ。」八重子は妙に捨鉢なやうな、體ごと運命の波に突出してゐるやうな無責任な調子になつていつた。

貞夫は傷ましい顔をして八重子の肩のところを見詰めてゐるが、

「併し、僕に云はせるとさうばかりも云へないと思ひますよ。伊佐雄君の身にしたら、随分悲しい出來事だと思ひます。伊佐雄君は貴女が結婚する當時のことを知つてゐるんですか？」

「それはあの、つい此間まではまるで秘密になつて居りましたんです。私、もかうなりましたからにはもういつそどうかしてすつかり打明けてしまはうと思つて居りましたんですけど、その

機會がなかつたんです。今度愈々伊佐雄の口からそれを云ひ出されましたんで、私ももう隠して居る必要も御座いませんから、すつかり今迄のことを話してしまひましたんですの。』

「清岡さんのこともですか？」

「え、問題の中心はそれなんて御座いますからね。……」八重子ははつきり云ひ切つた。

貞夫は少時の間ものが云へないやうに押黙つてゐたが、やがて嘆息をついて、

「併し、夫婦の間がそんな風な關係になつていつていゝものでせうかねえ。僕はこんな不幸なことはないと思ひますがねえ。」

「そりや私だつて決して幸福だとは思つちや居りませんわ。でも、もうかうなつてしまつた上はどうにも仕様がなないぢや御座いませんか。……」と八重子はさすがに打沈んだ顔色になつて、「今更清岡さんのことを忘れろと云はれた時にどうせ忘れられや致しませんし、私だつてどうかして伊佐雄を愛し度いと思はないぢやないんで御座いますけど、どうしても今の私にはそんな氣になれないんで御座いますわ。それもこれもとを云へば私の罪で、私があの時にもう少し強い意志を持つてさへるればこんなことにはならなかつたんで御座いますけど、……」

十六の七

八重子は猶ほも言葉をついて、

「でもほんとに境遇といふものほど辛いものは御座いませんのねえ。私だつて貴方が仰有るまでもなくかうしてゐれば漸次と不幸な身に落ちていくのは自分でもよく知つて居りますんですわ。でももうさうなつていくものは仕様がなないぢやありませんか。ですから私此の頃ぢやもうなる様にしきやならないと思つて、何事も諦めて居りますの。唯浮世を面白く暮らしていきさへすりやそれはいゝんですわ。いくら跳いたつて、どうせ自分の思ふやうにはならないんで御座いますからねえ。……」八重子の眼には何も彼も投げてかゝつてゐるやうな節制のない色が漸次と濃く現はれて来る。

貞夫は聞き辛いやうな顔をして態と傍を向いてゐるたが、やがて急に話題をかへて、
「それはさうと貴女は何う云ふ譯であんな山中のやうな男と交際してゐるんです？」と、唐突

な調子で云ふ。

八重子は大きな眼を睜つて、

「別にどうつて云ふ譯でもないんですけど、……」と、呟いたが、貞夫はそれを受けて、

「あの山中と云ふ男の素情を貴女は御存知ですか？」と、さも押付けるやうに訊きかける。そして八重子が返事に塞つてゐるのを見ると、重々しい聲になつて「ありや貴女、表面は石油會社の重役だけど、裏では高利貸しのやうなことをしてゐる男ぢやありませんか。あんな男と一緒に歩いたりすると貴女の名譽に關はりますよ。」

八重子は切なさうな顔色になつて、

「そりや私だつてよく知つて居ります。でも私少し事情があつて、あの山中つて云ふ人にいろ／＼厄介になつたことがあるもんですから。」と云つて、顔色を讀むやうに貞夫の方を見たが、急に苦しきうな笑ひ聲をたて、「あの、そんなことどうだつてい、ぢや御座いませんか。それよりもつと面白いお話を致しませうよ。貴方この頃父の宅の方へ被往つて下さいまして？」と、云ひながら葡萄酒の壺を取上げて貞夫の洋盃へなみ／＼と注ぐ。

貞夫はそれを抑へながら、

「いや、此頃は頓斗御無沙汰してゐるんです。いつてしたか一月程前に一寸行きましたけど。」と、云ふ。

「私も此頃ちつとも父に逢ひませんの。つい此間妹が久し振りで参りましてね、その時の話に何んでも父は又事業の方が面白くないんださうぢや御座いませんか。」と、八重子は此間から忙がしいなかにも氣懸りになつてゐたことを云ひ出す。

貞夫は洋盃をとりあげながら、

「僕もそんなことをお父さんから伺つたんですが、併し大した事ぢやないんでせう。それにまだ事實になつて現はれて来たことぢやないし、亞米利加の方の相場が極まりさへすれば、大した損にはなるまいとお父さん御自身も云つておいてゐました。」

「でも歌子の話ぢや此の前の時のやうな事件になりさうな様子で御座いましたわ。そのために態々宅へやつて参りましたんですもの。」

「いや、そりや杞憂に過ぎないですよ。磯谷商會ももう大方整理が濟んだといふお話ですから、

そんな取越苦勞をする必要はないと思ふんです。』と、云つて、貞夫は煙草の烟を天井の方へ吹きつけながら『それよりも歌子さんは一體何うするんです。大分諸方から結婚の申込があるとかいふお話ですがいづれ近々のうちに極るんでせうなあ。』と、つかぬ方へ話頭を持つてゆく。それと一緒に貞夫の頬にはほつと酒が出て来た。

八重子はそれを聞くと笑顔になつて、

『さあ、どうしますんですか私の方へはちつとも話がないんですけど。……』と、云つて思惑ありげに貞夫の顔をみてるたが、それから先は口へ出しては云はなかつた。

貞夫は少時間を置いて、

『歌子さんの方は貴女と違つて實に地味な摯實な考へを持つてゐるんですね。あ、云ふ性格も僕には興味があるんですよ。』

そこへ給仕が次の料理を持つて入つて来た。

十六の八

八重子は自分の前に置かれた料理の皿を馴れた手つきで約ましやかに食べてしまふと、ナブキンでそつと口を拭いて、その間に考へついたらしい調子で、

『ねえ、貴方。あのこんなことを私の口から申上げてい、か悪いか存じませんが、あのほんとうのことを申しますと、貴方が歌子を貰つて下さいますと一番宜しいんですわ。私實はもうとうからそんなことを考へて居りましたの。もし御縁があつて貴方が歌子と結婚遊ばして下さつたらどんなにい、だらう、私先からそんなことばかり空想して居りましたわ。』と、艶めいた嬌態をしながら云ふ。

貞夫は思はずぼつと顔を染めて、

『は、は、は、は。笑談いつちや可けませんよ。たとへ僕がそんな希望を起したところが、歌子さんの方で承知して呉れないに極まつてゐます。そりや僕だつてそんなことも考へないぢやなかつたんだが、併し僕も此頃になつてやつと先が見えて来ましたからなあ。』

『先が見えるつて何うして、御座いますの。貴方は歌子がお嫌ひなんですか？』

『いや、さういふ譯ぢやないんですよ。僕はその人が好きなんですけど、併し僕に云はせると、

歌子さんの心はもつと別な方面へ向いてゐると思ふんです。」

「別な方面で何で御座いますの？」

「そりや或は貴女の知らないことかも知れません。恐らくは貴女のお父さんも御存知ないこと
でせう。」さう云つて貞夫は寂しい顔になりながら、「實は此の前に麴町のお邸へ伺つた時に僕は
歌子さんといろく話をしたんです。その時歌子さんは頻りにあの北海道の武田欽哉の話し
をしてゐました。歌子さんは心の底からあの北海道の農場の生活に憧憬してゐるんです。憧憬
してゐるといふよりも寧ろ没頭してゐるんですな。僕はほんとに羨ましいと思ひました。武田
とも始終文通もしてゐられるやうだし、この様子ぢやどうせ此れから先歌子さんの行く道は
極まつてゐると、僕はその時つくづく思つたんです。」

八重子はそれを聞くとくすくす笑ひ出して、

「ほ、ほ、。そんな貴方、歌子はまだ子供ぢや御座いせんか。何を考へてゐるんだか自分
もよく分らないんで御座いませうよ。」

「いや、そんなことはありません。僕の見るところでは、中々しつかりした思考をもつてゐる

れると思ふんです。だから此際もし僕が歌子さんと結婚しようなど、云ふ考へを起したら、又
今津君と貴女との關係を繰返すことになりやしまいかと思ふんです。僕はたとへ自分の幸福を
犠牲にしても歌子さんのあの純潔な心を苦めようとは思はんですからなあ。」貞夫の言葉は言
言句々眞實の響をもつて來た。

八重子はそれを聞くと急に眉のあたりを曇らせて、そのまゝ口を噤んでしまつた。

貞夫は熱心な口調になつて、それから今津家の不幸ななりゆきを順に悲しんでゐたが、し
まひには自分も妙に悲しげな顔になつて、黙り込んでしまつた。八重子にも貞夫にもお互に心
の底で考へてゐることが漸次と分らなくなつていつた。

出るだけの料理が出て、珈琲になると、その時妙に話の弾まなくなつた二人のところへ給仕
が迎ひの自動車の來たことを告げに來た。話し込んでゐるうちに時間は容赦もなく経つて、今
迄硝子窓に射しか、つてゐた日の光はいつの間にか斜に町の藁の波の方へそれていつてしまつ
た。それと一緒に黄昏の近づいたことを示すほの黄い光が空一面に漂つて來た。

「ぢや貞夫様。今日はこれで失禮いたしますわ。いづれそのうちに又是非お眼に懸り度う御座

いますから、いつかお暇の時に一度宅へもお遊びに被來つて下さいまし。晝間のうちは大抵伊佐雄も居りませんし、電話さへかけて頂けば私はきつとお待ち申して居りますから、……」さう云ひながら八重子は名残惜しさうに立つていつた。

貞夫は妙に打惚れて、寂しさうな眼つきをしながらその後から送つていつた。そして二人はカツフエ・ローズの入口のところでもう一度別れを告げて、八重子は自動車へ、貞夫は銀座の方へ袂を分つた。

十七の一

清岡子爵が愈々歐羅巴へ向けて出立することになつたのは、それから間もないことであつた。京都へ永住するの、やれ結婚するのと彼の身の周圍にはさまざま噂が立つたが、それでも愈遠い海外の旅へ出ると決まつた時には聞く人毎に驚かないものはなかつた。そしてその歸期は不明で、都合に依つたら一生彼方で暮らしてしまふかも知れないと聞いてはさすがに誰れしも子爵の不思議な行動に疑ひを挿さずにはゐられなかつた。

伊佐雄は清岡が何日の何時に立つと聞いた時には何となしにほつとしたやうな安心を覺えた。彼のその日その日の生活を脅やかす原因が除去されてしまへば、八重子との間も自然と圓滿な解決がつくてあらう、それよりも第一に安心が出来るのは世上の噂であつた。かうした状態が長い間持續すれば決して、結果は生れて來ないに極まつてゐる。そして不幸は不幸について、しまひにはどういふ悲惨な大團圓を持ち來たすか分らないのである。やれ姦通の、やれ破倫のと煩さい人の口の端にか、つて、自分の生涯まで滅茶々に破滅させてしまふ日は事實ついで眼の前に迫つて來てゐるのである。その際に清岡が男らしく身を犠牲にして、遠い海外へ去つてしまはうとするのは如何にも紳士らしい覺悟を示したものである。伊佐雄はさうした見地から、陰ながら清岡に對して感謝の心を捧げてゐたのであつた。時とする清岡に對して激しい憎惡を覺えることもあつたが、眞實は彼の心がそれほどまでに弱くなつてゐたのであつた。清岡が愈々明日の午後に横濱から乗船するといふ日のこと、伊佐雄はいつも少し遅れて小石川の邸へ歸つて來たが、その時八重子は何處へ出たのか邸にはゐなかつた。いつものことなので伊佐雄もさして氣にも留めず、小間使のお清を相手に電燈の輝き渡る食堂でひとり寂し

く晚餐を済まして、そのまま、自分の書齋へ歸つて、書見に耽つた。
 その晩は珍らしく會社の重役が處用で訪ねて來たので、伊佐雄は應接室へ出て、川談を済ました。そして九時頃になつてやつとその客が歸つたので又書齋へは歸つて來たが、その時になると何んだか妙に八重子のこと気が懸りになつて來た。明日は清岡が愈々日本を離れる日である。明日が八重子にとつては清岡と永遠の別離になるかも知れない悲しい日である。さう思ふと伊佐雄は俄に激しい胸騒ぎを覺えて來た。

今か今かと歸りを待ちあぐねてゐたが九時が十時になつても八重子は歸つて來なかつた。伊佐雄は我慢しきれなくなつて、八重子附きの小間使のお志保を呼んで訊いて見ると八重子は今日の午後何處へとも云はずに邸を出ていつたのだといふ。そして今日は珍らしく自動車にも乗らずに態々俵を雇はせて、それに乗つて出懸けていつたのだといふ。

伊佐雄は小間使達の思惑もあるのて感と惑亂を押へに押へてはゐるが、十一時近くなつても八重子が歸つて來ないので、到頭心の苦痛に耐へきれなくなつて、又お清を呼んで俵宿へ電話をかけさせ、八重子を何處まで送つていつたかを確かめさせた。

お清は暫らくすると歸つて來て、俵宿では八重子を送つていつた若者が今出てゐて分らないが、帳面には東京驛まで出たことについてゐるといふ。

その返事を聞くと伊佐雄の心は更に暗くなつて來た。ひよつとかしたら八重子が清岡と最後の別離を惜しむ餘りに何か無謀なとでもしてゐるのではあるまいか、平常から胸に懐いてゐる疑惑や不安は一時に潮のやうに湧き起つて來て、彼はしまひには座に居耐まれなくなつて來た。その時女關の方では突如、自動車の警笛が二聲ばかり断れぎれに聞えて、誰れか、邸の女關へ轍の音も騒々しく自動車を乗り入れて來た氣勢がする。

伊佐雄ははつとして思はず耳を欬てた。

十七の二

やがて少時経つと廊下の方で足音がして、小間使のお志保が書齋の扉を半分ほど開けながら、「あの、旦那様。お客様で御座います。」と、云ふ。

伊佐雄は居坐ひを正しながら、來客の名を聞いたが、お志保は、